

令和6年度春
ベトナム超短期派遣プログラム 報告書

2025 年 3 月 6 日～3 月 18 日

東京科学大学

アントレプレナーシップ教育機構

グローバル教育実施室



目次

1. はじめに	4
1.1 海外派遣プログラムの目的	4
1.2 派遣プログラム日程	5
1.3 参加者紹介	6
2. 訪問先の概要	8
2.1 ベトナム全般の基礎情報	8
2.2 ベトナムの教育	9
2.3 ベトナムの産業	12
2.4 ベトナムの農業	14
2.5 社会課題	15
2.6 ハノイ	17
2.7 カントー	21
2.7.1 カントーの概要	18
2.7.2 都市の特徴と産業	19
2.7.3 都市インフラと交通	19
2.8 ホーチミン	20
3. ベトナムについて興味があること	23
3.1 食べ物	23
3.1.1 ハノイ	23
3.1.2 カントー	23
3.1.3 ホーチミン	24
3.2 建物	25
3.2.1 建築の変遷と特徴	26
3.2.2 増改築の広がり	26
3.2.3 中心市街地の電飾と看板	26
3.3 土地利用と天候	27
3.4 文化・観光	29
3.4.1 文化	29
3.4.2 観光	30
3.4.2.1 ハノイ	30
3.4.2.2 カントー	30
3.4.2.3 ホーチミン	31
4. ベトナムの歴史	32
4.1 フランス植民地時代～独立まで	32
4.2 インドシナ戦争から現在	33
5. サイトビジット、フィールドワーク	35
5.1 市内フィールドワーク①_ハノイ市内廃棄物回収状況	35
5.2 T&J Green Energy Company Limited (JFE廃棄物焼却発電プラント)	37

5.3	フンイエン省リサイクル村.....	39
5.4	Xà Cầu村リサイクル村.....	40
5.5	市内フィールドワーク②_ハノイ市内家電量販店調査.....	41
5.5.1	Nguyễn Kim Tràng Thi.....	41
5.5.2	Mediamart.....	42
5.6	Bình Thuy Ancient House.....	44
5.7	Can Tho市内 Tan An市場見学、Kai Lang水上マーケット.....	45
5.8	Can Tho大学内.....	46
5.8.1	ヤンマー研究所 Dr. Thanh.....	46
5.8.2	JICAカントー大学プロジェクトオフィス 今井淳一氏	47
5.8.3	タケショー 小野間氏	48
5.9	Can Tho大学Hau Giangキャンパス.....	49
5.10	Kien Thanh Agricultural & Services Cooperative.....	50
5.11	Khu Bao ton Lung Ngoc Hoang Nature Reserve, Phung Hiep (自然保護区).....	52
5.12	Tiền Giang省My Tho市 Chua Vinh Trang (永長寺).....	53
5.13	AGRITECHNICA ASIA VIETNAM.....	54
5.14	市内フィールドワーク③_ホーチミン市内100台バイク調査	55
6.	Expert Lecture.....	57
6.1	村上先生の講義.....	57
6.2	農機具(坂田正三氏の講義).....	58
6.3	カン先生によるベトナム南部の農業について.....	59
6.4	ホーチミン工科大学環境天然資源学部 Vo Thanh Hang 先生の講義.....	60
6.5	VECA (Ve chai cong nghe) (ホーチミン工科大学).....	60
7.	学生交流及びグループワーク.....	61
7.1	ハノイ工科大学.....	61
7.2	ホーチミン工科大学.....	63
7.3	ホーチミン工科大グループワーク.....	65
7.3.1	グループ1 西村.....	65
7.3.2	グループ2 宮武 長谷川.....	66
7.3.3	グループ3 真鍋 浜岸.....	67
7.3.4	グループ4 關川 若尾.....	67
7.3.5	グループ5 鈴木 山中.....	68
7.4	グリニッジベトナムワークショップ.....	69
7.4.1	グループ1 真鍋.....	70
7.4.2	グループ2 若尾.....	71
7.4.3	グループ3 西村.....	72
7.4.4	グループ4 鈴木.....	73
7.4.5	グループ5 浜岸.....	73
7.4.6	グループ6 宮武.....	74

7.4.7 グループ7 關川.....	75
7.4.8 グループ8 長谷川.....	76
8. 博物館、美術館訪問.....	77
8.1 ホアロー刑務所(6名).....	77
8.2 ハノイ美術博物館(2名).....	83
8.3 ベトナム国立博物館(3名).....	85
8.4 タンロン城(2名).....	88
8.5 ベトナム女性博物館(2名).....	91
8.6 カントー博物館(4名).....	92
8.7 ホーチミン市博物館(3名).....	96
8.8 ホーチミン市美術館(2名).....	99
8.9 戦争証跡博物館(2名).....	101
8.10 インディペンデンスパレス(統一会堂)(3名).....	103
9. 派遣プログラム全体の各自の所感.....	105
9.1 工学院 機械系 B4 西村.....	105
9.2 工学院 機械系 B4 宮武.....	107
9.3 工学院 システム制御系 B4 關川.....	108
9.4 環境・社会理工学院 建築系 B4 真鍋.....	108
9.5 環境・社会理工学院 建築系 B2 鈴木.....	110
9.6 環境・社会理工学院 B1 長谷川.....	111
9.7 環境・社会理工学院 B1 浜岸.....	112
9.8 工学院 B1 山中.....	113
9.9 生命理工学院 B1 若尾.....	115

1. はじめに

1.1 海外派遣プログラムの目的

本プログラムは、グローバル理工人育成コース「実践型海外派遣プログラム」、アントレプレナーシップ科目・グローバル教育オプション（GE0）の対象科目の一つとして実施され、海外での経験を積むことで、下記の能力を養うことである。

- 1) 自身の将来計画と関連付けた明確な目標を持ち、様々な活動に積極的に参加する。
- 2) 自身と出身国、母語、習慣、文化等が異なる相手と、多面的な視野から交流することができる。
- 3) 対象国の概要、歴史・文化などを説明でき、対象国に関連した自身の学びを深めるために主体的に行動し、今後の留学やキャリアの参考とすることができる。

実践型海外派遣プログラムは、下記の3つの能力の育成を目指すものである。

国際性を養うために海外で身に付ける実践的能力

1) 将来計画と関連付けた明確な目標を持って積極的に海外研修に参加し、帰国後も、将来計画と合わせた行動を継続できる（できた）。

2) 訪問国の概要、歴史・文化などを説明でき、訪問国に関連した自分の学びを深めるために主体的に行動し、今後の留学やキャリアの参考にできる。

3) 渡航中の健康管理、危険回避の方法について、常に実践している。

4) 病気になったり、事件・事故に遭遇した場合の連絡先（医療機関や大使館、警察など）を把握しており、有事には、自分自身で解決できる。

1.2 派遣プログラム日程

	Date		行動予定(フライトは予定)	訪問内容	宿泊
Day 1	3/6	水	7:30 成田空港 第1ターミナル 北ウィングAカウンター集合 9:30 VN311→ハノイNoibai空港着 13:50 16:00 ハノイ工科大学 学生交流 (Meet with Ms. Lai Mỹ Linh. at Tran Dai Nghia Gate), room D6-102 18:00 ハノイ工科大学発→ホテルへ	(自分らで車借りる) 学生交流、旧市街地フィールドワーク	
Day 2	3/7	金	8:30 バスで出発 (Vietnam Waste Planning 和田氏、平田氏、Nguyen Huyen Num氏 同行) 10:00 : T&J Green Energy Company Limited (JFE廃棄物処理発電プラント) Thuan Thanh district, Bac Ninh Province 12:30 Hung Yênフレイエング省 Van Lam県Nhu Quỳnhニュークイン市 Minh Khai村 (プラスチックフィルムリサイクル) 14:30 Hanoi市Ứng Hòa県Phu Cau, Xa Cau村	廃棄物コンサルタントの和田氏と、 リサイクル村、廃棄物処理発電プラント訪問 (借り上げ車移動)	Hanoi 市内ホテル DE LA SOIE hotel and travel 111 Hàng Đào Hoàn Kiếm, Hoàn Kiếm Hà Nội (Hàng Đào通り、Hoàn Kiếm区、Hanoi市) +84 24 3205 2186
Day 3	3/8	土	・2グループに分かれ市内フィールド調査(家電量販店) ①Điện máy Nguyễn Kim Tràng Thi, Hoàn Kiếmまたは②Media Mart Hai Bà Trưng ・博物館	・市内フィールドワーク ・各自で博物館訪問	
Day 4	3/9	日	7:30 ホテル発→ハノイNoibai空港第1ターミナル 9:55 VN1203→Can Tho空港着 12:10 Binh Thuy Ancient House (旧家の古民家) カントー博物館(Bao Thag Can Tho)等	(自分らで車借りる) ・カントーへ移動 ・古民家、博物館を見学	
Day 5	3/10	月	8:00出発: タンアン市場(Cho Tan An)見学 終日Can Tho 大学キャンパス内 (Gフロアあり) 9:30-10:00 CTU's International Relations (greetings) 10:00-12:00 Yanmar研究所 (Dr. Thanh, Ms. Ruby) 4階 学食でランチ 13:30- JICA-CTUオフィス (今井淳一氏) 5階 15:00-16:30 タクシヨウ (小野館様) 5階	大学キャンパス内の企業、 JICAオフィスで話を伺う (Grab 移動)	Can Tho市内ホテル Ninh Kieu 2Hotel Số 3 Hòa Bình, P.Tân An, Q.Ninh Kiều, Bến Ninh Kiều, Cần Thơ (3 Hòa Bình通り、Tân An坊Ninh Kieu区、Can Tho市)
Day 6	3/11	火	終日 Hau Giang Province (ハウザン省) 7:00 ホテルをバスで出発 (Can先生、Liem先生、Nay先生いずれか同行) 8:00-9:00 College of Rural Development, Can Tho 大学, Hoa An Campus メコンデルタ地域の農業についての講義及び学生交流 10:30-11:30 Kien Thanh Agricultural & Services Cooperative, Vi Thuy, (農協) (Agricultural Extension Center; AECの方がサポート) 14:00-16:30 Lung Ngoc Hoang Nature Reserve, Phung Hiep (自然保護区)	Can Tho大学農学部 (Hoa An キャンパス) でメコンデルタの農業を学ぶ、学生交流、農協でドローン開発と実態の話を聞く、 自然保護区 (借り上げ車移動)	
Day 7	3/12	水	5:00 : Cai Rang 水上マーケット 10:00 : ホテル出発、ホーチミンへ移動 Tiền Giang省My Tho, Chua Vinh Trang (永長寺) 経由 16:00: AGRITECHNICA ASIA VIETNAM Saigon Exhibition and Convention Center (SECC) 17時まで	カントー→ホーチミン (借り上げ車移動) フレンチ風の寺院 農業機械フェア見学	
Day 8	3/13	木	終日 ホーチミン工科大学(HCMUT)キャンパス 環境・天然資源学部 9:00 Opening ceremony 9:15-10:30 Lecture: Introduction of Faculty of Environment and Natural Resources (Dr. Khai and Dr. Hang) 10:30-12:00 Lecture: Introduction for studying in Science Tokyo, about waste management and discussion (Murakami) 12:00-14:00 Breaks 14:00-15:30 : Ice breaking, cultural exchange, games (OISP; Office for International Study Programs) 15:30-16:00 :Lab tour, campus tour (OISP and Dr. Que)	ホーチミン工科大 (協定校) 環境工学部とのセッション開始	Ho Chi Minh 市内ホテル White Lotus Hotel Saigon 6A Thi Sách, Bến Nghé, Quận 1, Hồ Chí Minh (Thi Sách通り、Ben Nghé坊、1区、ホーチミン市)
Day 9	3/14	金	午前 HCMUT、午後 Greenwich University Vietnam 8:00-9:30 Lecture : VECA model - The chain of 3R of the circular economy (VECA CEO, Mr. Bao) 9:30-11:30 Group project discussion (Dr. Hang) 13:00-17:00 "The Design Shift: Creating a Sustainable Tomorrow" @Greenwich Vietnam (Ms. Hồ Hoàng Ngọc Thy and Murakami) 村上徳国	午前中: ホーチミン工科大 午後: グリニッチ大学ベトナムホーチミン校 講義、WS	
Day 10	3/15	土	博物館見学、HCMUTの学生とグループワーク	博物館、グループワーク	
Day 11	3/16	日	博物館見学、HCMUTの学生とグループワーク	博物館、グループワーク	
Day 12	3/17	月	AM: HCMUTの学生とグループワーク、発表、クロージング 18:00 レイトチェックアウト (2室) 20:30 ホテル発→ ホーチミンTan Son Nhat空港第2ターミナル	(自分らで車借りる) ホーチミン発 (深夜)	
Day 13	3/18	火	00:20発 VN300 (機内泊) 東京 (成田空港 第1ターミナル) 着 07:45		

1.3 参加者紹介

		
關川	西村	宮武
工学院 B4	工学院 B4	工学院 B4
		
鈴木	長谷川	真鍋
環境・社会理工学院 B2	環境・社会理工学院 B1	環境・社会理工学院 B4

		
若尾	山中	浜岸
生命理工学院 B1	工学院 B1	環境・社会理工学院 B1

	
村上 理映 (引率教員)	HUY (TA)
アントレプレナーシップ教育機構特任准教授	工学院 電気電子系 電気電子コース博士課程



2. 訪問先の概要

2.1 ベトナム全般の基礎情報

ベトナム（正式名称：ベトナム社会主義共和国）は、東南アジアのインドシナ半島東部に位置する国であり、中国、ラオス、カンボジアと国境を接している。人口は約1億人、国土面積は約33万km²で、日本の約9割の広さである。

宗教は日本と同様に大乘仏教が中心であるが、上座部仏教、カトリック、伝統的な民間宗教を信仰する人々もあり、信教の自由が認められている。民族構成としては、人口の約9割をキン族が占めているが、他にも53の少数民族が存在している。

ベトナムは南北に長いので地域差が大きく、北部は温帯気候、南部は乾季と雨季に分かれる熱帯モンスーン気候に属している。今回、北部に位置するハノイに滞在した際には、気温が低く、長袖で過ごしやすい気候だった。対照的に、南部のカントーやホーチミンに滞在していた際には乾季で、毎日晴天が続き、非常に暑く、半袖で過ごしていた。南部では6月から9月が雨季の中でも特に雨量が多く、洪水が頻発することであった。現地の学生との交流の中で、この時期に合わせて大学が夏休みになると聞いた。

政治体制は社会主義の一党制であり、ベトナム共産党が国家を主導している。経済面では、1986年に導入されたドイモイ政策以降、外国資本の受け入れや市場経済の導入により、急速に発展を遂げている。特に都市部では高層ビルやショッピングモールが多く見られた。一方で、路上で物乞いをする人の姿も多く見かけ、急速な経済発展の恩恵をまだ受けられていない人々がいることを肌で感じた。

ベトナム全体で最も印象的だったのは、圧倒的な数のバイクであった。道路には車よりもバイクが多く、特に夕方の帰宅ラッシュ時には、まるでバイクの洪水のようであった。クラクションの音が常に響いており、誰もが我先にと運転しており、非常にせわしない雰囲気だった。また、信号のない横断歩道を渡る際には、バイクや車が遠慮なく進んでくるため、道路を渡るのに苦労することも多かった。



ベトナム地図



夕方の帰宅ラッシュの様子

参考文献

1. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/data.html>

2.2 ベトナムの教育

ベトナムの義務教育制度は、教育法の改定に伴い段階的に拡充されてきた。1998年の教育法では初等教育5年間で義務とされ、2005年の改定では下級中等教育を含む9年間に延長された。さらに、2019年には就学前の5歳児教育が追加され、義務教育期間は10年間となった。これにより、より早い段階から基礎教育を受ける機会が保証されるようになった。2021年時点での初等教育純就学率は97.7%に達しており、教育の普及が進んでいることが示されている。義務教育の実施は国の責任であり、保護者には子どもを就学させる義務が課される。就学する学校は指定されており、毎年5月から6月の間に入学手続きを行う必要がある。手続きには学校で配布される申込書、子どもの出生証明書、居住地証明書などが求められ、これらの書類を提出することで正式な入学が認められる。

教育費に関しては、公立小学校は憲法により無償とされているが、中等教育以降は学費が発生する。ただし、低所得家庭や少数民族、遠距離通学が必要な子どもには学費免除の制度が設けられている。2012年のデータによれば、私立学校の学費は公立学校の約4倍であった。公立学校であっても制服や教科書の購入は自己負担となっており、2020年の家庭負担額は子ども1人当たり年間707.1万ドン（約4万円）に上る。教育費の内訳として、学費が35%、塾代が18%、学校への寄付金が7%を占めている。また、都市部と農村部では教育費の格差が大きく、2020年における都市部の子どもにかかる教育費は農村部の約2.2倍であった。このような地域間格差は、教育機会の均等を考える上で重要な課題となっている。

障害のある子どもに対する教育制度も整備されており、インクルーシブ教育、セミ・インクルーシブ教育、特別支援学校の3種類の教育形態が存在する。インクルーシブ教育では、通常の学級において障害のある子どもと障害のない子どもが共に学ぶ。セミ・インクルーシブ教育では、通常学校内に特別支援学級が設置され、障害のある子どもはその学級で教育を受ける。特別支援学校では、教育訓練省が定める障害種ごとの特別支援教育カリキュラムに基づいて専門的な教育が提供される。

現在、幼年教育機関は、2015年から2019年にかけて14532校から15476校に急増した。これは、ベトナム国内の経済が発展し始めたことにより、教育機関を充実させるために投資が積極的に行われたためと考えられる。一方で、2019年から2020年は新型コロナウイルスの感染拡大により続々と閉鎖し他一方で、同じくコロナ渦でベトナム国内の出生率が大きく上昇したことを踏まえると、今後は幼年教育施設が不足することが懸念される。(図. 幼年教育施設の推移)

また、高等教育については、大学生数は2016年から2018年にかけて徐々に減少傾向であるものの、学生募集に関する職業教育機関の取り組みが功を奏して、専門学校の新入生数は増加が見受けられた。また、大学院生は少なく、大学院の学位取得が必要な職業が少ない点や大学院の授業料を払える学生が少ないためであると考えられる。(図. 高等教育の学生数)

カリキュラムはベトナム語を基本とし、算数、道徳、理科、社会、歴史、地理、体育、芸術、体験活動などが必修科目とされている。第一外国語（英語）および情報技術は、小学校3年生から必修となっており、早い段階から外国語やデジタル技術に触れる機会が設けられている。成績評価は試験結果、学習態度、出席状況などを総合的に判断し、一定の基準に達しない場合は進級・卒業できず留年となる。初等教育における留年率は1%であり、最終学年の残存率は96%である。

学期制度は、9月から1月初頭が第一学期、2月下旬から6月上旬が第二学期となっている。旧正月（テト）の間は休暇が設けられ、7月と8月は夏休みとなる。学校によっては、午前と午後で生徒を入れ替える二部制を採用しているところもある。授業時間は小学校が35分、中学校が45分で、15分の休憩が設けられている。宿題は原則として課されず、昼休みは長く設定されている。給食の有無は学校や地域によって異なり、特に農村部では昼食のために帰宅する生徒が多い。また、昼寝の習慣が根付いており、学校でも長めの昼休み時間が確保されている。

学校生活においては、ほとんどの学校で制服が指定されているが、お菓子や携帯電話の持ち込みは許可されている。一方で、パーマや髪染め、化粧、アクセサリーの着用は禁止されている場合が多い。また、放課後補習「ホック・テム（Hoc・them）」が一般的であり、集団指導の授業料は1回あたり4万から6万ドン（約220から330円）となっている。ホック・テムは補足授業としての側面を持つが、学習内容の理解を深めるために多くの児童生徒が受講しており、実質的には学力向上のための重要な役割を果たしている。

このように、ベトナムの義務教育は段階的に拡充され、教育機会の公平性を高める取り組みがなされている。一方で、教育費の地域格差や補習授業の負担など、解決すべき課題も多い。今後、これらの問題に対応しながら、さらなる教育環境の改善が求められると考える。

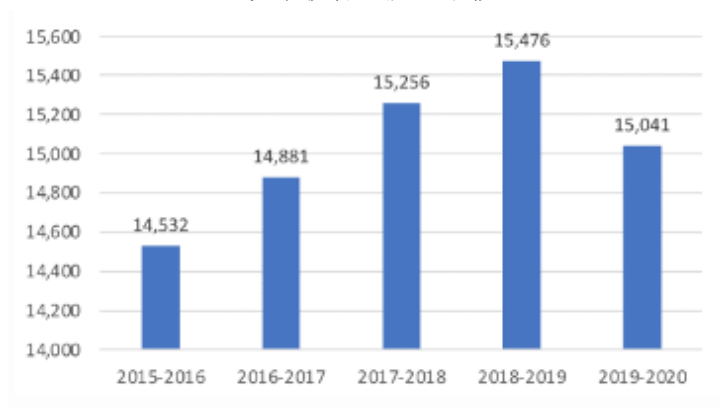
また、現地の学生との交流を通じて、特に英語教育の水準の高さが印象的であった。英会話に関しては、日本よりも高い水準の教育が行われているように感じられ、大学生に限らず、街中でも多くの人が基本的な英会話を難なくこなしていた。このことから、英語の実践的な運用能力の教育が重視されていることがうかがえる。

また、学生の外見や雰囲気については、日本の大学生と大きな違いは見られなかった。しかし、大学ごとにユニフォームやジャージが設定されており、私服と併用している学生も一定数存在した。

さらに、訪れた大学ではIT化が日本と同程度に進んでいることに驚かされた。ほとんどの教室にはプロジェクターが完備されており、授業ではデジタル教材が活用されていた。加えて、学生の多くがPCやタブレットを携行しており、講義中に積極的に活用して

いる様子が見られた。このことから、大学教育の場においてデジタル技術の導入が進み、学習環境の効率化が図られていることが感じられた。

幼年教育施設の推移



高等教育の学生数



参考文献

1. <https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/1000044781.pdf>.
2. https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2017/10/02/1396848_015.pdf.
3. <https://www.gso.gov.vn/wp-content/uploads/2022/06/Khao-sat-muc-song-2020.pdf>.
4. <https://vanbanphapluat.co/joint-circular-no-42-2013-ttlt-bgddt-bldtbxh-bt-c-education-policies-for-disabled-people>
5. <https://www.who.int/data/gho/data/countries/country-details/GH0/viet-nam>.
6. https://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/vietnam_2015.html.
7. https://www.eduport.mext.go.jp/epsite/wp-content/uploads/2021/03/subcommittee-2016_vietnam.pdf
8. https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2021/db6cdef49e854b9a/202101.pdf

9. <https://www.sggpnews.org.vn/hcmc-announces-20222023-school-year-calendar-9-day-tet-break-for-students-post96669.html>.
10. <https://data.worldbank.org/indicator/SE.PRM.PRSL.ZS?locations=VN>.
11. <https://data.worldbank.org/indicator/SE.PRM.REPT.ZS>.

2.3 ベトナムの産業

ベトナムは、1986年のドイモイ政策導入以来、経済の自由化と市場経済への移行を進め、急速な産業発展を遂げてきた。この政策により、国内総生産（GDP）は大幅に増加し、特に製造業とサービス業が経済成長を牽引している。2023年のGDP成長率は6.72%を記録し、前年同期の3.28%から大幅に回復した。しかし、産業構造の変革は依然として進行中であり、2018年の産業別GDP比率では、第一次産業が16.2%、第二次産業が38.1%を占め、農業と工業が依然として経済の過半数を構成している（図参照）。

ドイモイ政策の成果の一つとして、外国直接投資（FDI）の増加が挙げられる。政府は経済特区や工業団地を設立し、外資系企業の誘致を積極的に推進した。その結果、多国籍企業の進出が進み、製造拠点の設立が加速した。

特に、製造業はベトナムの経済成長を支える主要産業であり、繊維・衣料産業、電子機器製造、自動車産業が発展している。ホーチミン市は繊維・衣料産業の中心地として発展し、2023年の繊維・衣料品輸出額は約400億ドルに達した。また、北部のバクニン省やハノイ近郊には、サムスン、LG、フォックスコンなどの電子機器メーカーが進出し、スマートフォンや電子部品の生産拠点となっている。さらに近年では、ホンダやトヨタといった自動車メーカーも工場を構え、国内市場向けの生産を強化している。我々がベトナムを訪れた際にも、空港の近くに日本の自動車メーカーの工場が見えたり、町中にソニーやサムスンのショップがあるのが見受けられた。

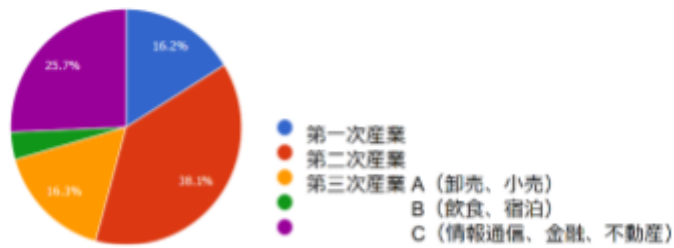
加えて、サービス業も近年急速に成長しており、特に観光業とIT産業の発展が著しい。ベトナムは歴史的な名所や豊かな自然環境を活かした観光地が多く、2019年には約1800万人の外国人観光客が訪れた。ホイアンやハロン湾などの世界遺産が人気を集めている。ホーチミンは大都市ということもあって近代化と観光地化が激しいと感じた。物価が他の都市に比べて高く、他国のチェーン店やブランドショップが立ち並び、少し残念に感じた。また、IT産業においては、ダナンやホーチミン市がスタートアップの拠点となり、ソフトウェア開発やBPO（ビジネス・プロセス・アウトソーシング）分野での成長が期待されている。

一方で、ドイモイ政策には課題も存在する。市場経済への移行に伴い、社会的格差の拡大や環境問題が顕在化した。特に、都市部と農村部の経済格差は依然として大きく、農村部では貧困率が高い水準にある。ハノイやカントーでは観光客にガムやお菓子を売りしている人もおり、生活は成り立っているのだろうかという疑問を感じた。

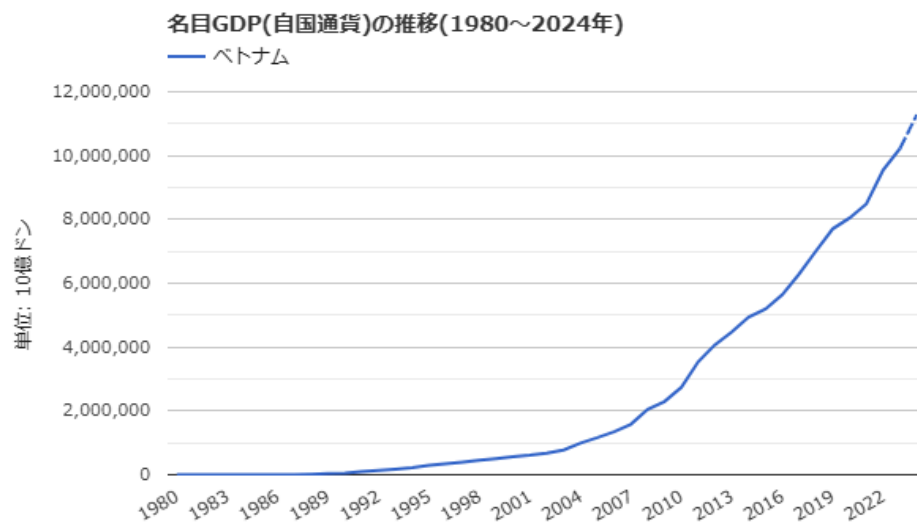
都市部では外資系企業の進出やインフラ整備の進展により、雇用機会の増加や所得水準の向上が進んでいる。一方、農村部では農業に依存した経済構造が続いており、機械化の遅れや生産性の低さが課題となっている。特に、中部高原やメコンデルタ地域では、天候不順や気候変動の影響により収穫量が不安定で、安定した収入を得ることが難しい状況が続いている。これにより、若年層を中心に都市部への人口流出が進み、農村地域の労働力不足が深刻化している。

また、急速な経済成長に伴い、環境問題も深刻化している。都市部では工業化の進展により大気汚染や水質汚染が悪化しており、特にハノイやホーチミン市ではPM2.5の濃度上昇が健康問題として懸念されている。さらに、製造業の発展による廃棄物の増加や、違法な森林伐採による環境破壊も問題となっており、持続可能な成長に向けた対策が求められる。

ている。



ベトナムの産業別GDP(2018年)



カントーの水上マーケットで訪れたレストラン。マーケットを見て回るだけかと思いきや、ツアー会社のレストランとお土産屋さんに来ていかれた。観光地化を感じた。

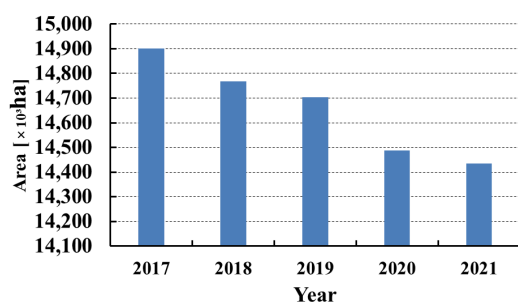


ホーチミンの都市部の様子。高層ビルが立ち並び夜でも明るい。

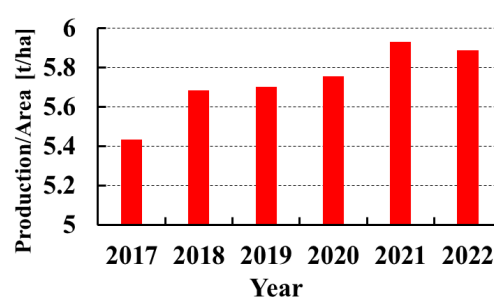
2.4 ベトナムの農業

まず、主要な農産物について述べる。ベトナムの代表的な農産物としては米(生産量世界5位、輸出量世界3位)、コーヒー(生産量世界2位)、胡椒(生産量世界1位)、カシューナッツ(生産量世界3位)、天然ゴム(生産量世界4位)などがある。その中でも米はベトナム人の主食であり、ベトナム発祥のフォーにも米麺が使用されている。ドイモイ政策によって農業の脱集団化が起こり、余剰生産分を自家消費や、販売、貯蓄などに自由に回せるようになったことで生産性が向上したという背景がある。また、コーヒー豆は熱帯モンスーン地域に属するベトナムは栽培に向いており、フランス植民地時代に導入されたという背景がある。

次に、ベトナム農業の現状について説明する。工業化に伴い、農業従事者の割合は減っており今後もさらに減少していくことが予想されるため後継者不足が課題となっている。工業化に伴って都市化も進み、作物の作付面積もここ5年で減少している。特に一年生工業作物などの大規模な機械化が難しかったりコストパフォーマンスが悪かったりする作物の作付面積が大幅に減少していた。一方で2000年代からは農業機械が普及し始め、生産効率が大きく増加した。日本の中古農業機械などを改良して使用しており、特にベトナム最大の米の生産地であるメコンデルタで最も生産効率が増加していることがうかがえた。これはメコンデルタでは大規模な農業が可能で機械化などが進みやすいからであると考えられる。しかし、日本やヨーロッパなどに比べると生産効率はまだ低く、土地改良と並行した機械化の促進が課題となっている。



作物の作付面積



穀物1haあたりの生産量

	全体	一年生 作物	穀類	一年生 工業作物	多年生 作物	多年生 工業作物	果物
増減(%)	-3.14	-6.45	-7.54	-30.38	8.02	-0.88	26.2

2017と比較した2022年の種類別作付面積の増加率

	紅河 デルタ	北部中部 山岳地帯	北部およ び中部沿 岸地域	中央高地	東南部	メコン デルタ
増減(%)	8.8856	7.4548	4.5787	8.6092	8.2407	9.7554

各地域における2017と比較した2022年の1ha当たりの穀物生産量の増加率

2.5 社会課題

突然だが、ベトナムの社会問題と言え何の思い浮かべるだろうか。

私が最初に思い浮かべるのは、「交通」である。ベトナムはバイクが主流であり、道路の半分がバイクに埋め尽くされる。実際私がベトナムに行って最初に感じたのもバイクの多さだった。また、人々の交通ルールが無視具合もひどい。日本ではすぐ白バイに追いかけるレベルである。車線は守らない、バイク4人乗り（たまには運転手+犬）、信号無視、逆走などなどである。当然のことだがベトナムの交通事故率はとても高い。実に1時間に1人が亡くなっているというデータもあるほどである。空気は排気ガスによって汚れており、夜までクラクションの合唱が続く。

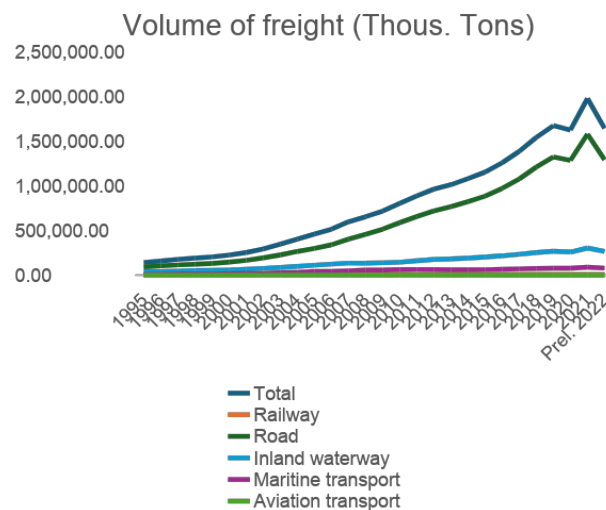


ベトナムの交通の様子

しかしなぜここまでベトナムでバイクが普及しているのだろうか。この理由として第一に電車が普及していないこと、そして第二に自動車を買うよりバイクを買ったほうが安いことがあげられる。

第一について下図 (Volume of freight) を参照いただきたい。

貨物量について最も多いのがRoad（道路）である。Railwayと比べると圧倒的である。ここからベトナムでは鉄道が発達していないことがわかる。「南北統一鉄道」という全35州を結ぶ唯一の鉄道はあるにはあるが老朽化が進んでおり、運行速度も決して早くはない。



第二について、学生交流中に私はそれぞれ一回ずつ生徒の自動車とバイクに乗る機会が

あった。バイクは全生徒が所有しており、みんなこれで通学しているため、学生にとってなくてはならない必需品であった。一方で自動車については、ある生徒が「乗せるよ」と言ってくれた時、別の生徒がとても驚いて「彼はとても金持ちだ」といったのが印象に残っている。日本では車を所有することはとても難しい、というほどではない。各家庭1台は持っていてもおかしくはない。しかし彼らの発言からベトナムでは自動車はとても高級なのだな、と改めて実感した。

以上より、ベトナムの道路にはたくさんのバイクで溢れており、大気汚染問題や交通渋滞、交通事故などの社会問題を引き起こしているということがわかる。

2.6 ハノイ

本都市はベトナム北部に位置する首都であり、東南アジア有数の世界都市とされる。地名の「城^ホ河内」は、かつての市街地（現在のホアンキエム区、バーディン区、ドンダー区、ハイバーチュン区に相当）が紅河とトーリック川（蘇瀝江）に囲まれていたことに由来する。2023年の人口は約859万人で、国内の工業の中心地であると同時に、農産物の集散地としての機能も果たしている。また、タンロン史跡、ホアロー捕虜収容所、一柱寺など歴史的価値のある建造物も多く存在し、文化的にも重要な都市といえる。経済面では、国内総生産（GDRP）の約16%を占め、ホーチミン市が経済の中心地であるのに対し、本都市は政治・文化の中心地としての役割を担っている。

都市の公共交通機関としては、かつてフランス統治時代から路面電車が主力であったが、1989年までに全廃された。その後、変電所などのインフラや車両部品を再利用したトロリーバスが運行されるようになったものの、これも1990年代前半には廃止された。以降、バスが唯一の公共交通機関となっている。1990年代後半には国営企業二社によりバス路線網が運行され、当初はハノイバスが13路線・車両220台、ハノイ電気軌道が1路線・車両17台を運行していた。2002年以降、バス路線網の整備が進められ、2004年には41路線・687台が運行されたが、急速な都市化と人口増加により需要には十分対応できていない。そのため、市民の多くはバイクを主要な移動手段として利用している。

本都市を訪問した際、無電柱化が進んでいることが確認された。特に大通りには電柱がほとんど見られず、裏通りなどから電線を引いているケースが多く見られた。これは景観の向上や安全性の確保に寄与していると考えられる。また、旧市街の通りの名称は、かつてその地域で盛んであった産業に由来しており、現在でもその名残が見られる点が興味深かった。例えば、「絹通り」「銀通り」といった名称の通りでは、今もその分野の商店が営業を続けていることが確認できた。このように、都市の歴史的背景が現在の街並みにも色濃く残っている点は、この都市の特徴の一つといえる。

さらに、街全体が夜でも明るく、訪問した他の都市と比較しても治安が良いと感じられた。大通りには多くの街灯が設置され、商店や屋台も夜遅くまで営業しているため、人通りが絶えない。また、警察の巡回も頻繁に行われており、市民が安心して夜間に外出できる環境が整っていると考えられる。夜市などはそれらの治安の良さが前提としてあるからこそ成り立つ文化であると感じた。現地で行き交い商品を購入する人々も、楽しげに会話しながら値切り交渉や商品の購入を行っていたのが印象的である。

一方で、交通量の多さやバイクの密集は依然として課題であり、交通渋滞や大気汚染の問題が懸念される。実際、配車アプリをしようしてバイクに乗車した際、速度40kmに満たない程度でも、排気ガスによって目が叩かれるような痛みを感じ、メガネなしには乗車できない状態だった。実際現地の市民の姿を見ても、皆顔全体を何かしらのアクセサリや道具で覆っており、ベトナムの大気汚染問題は他の環境問題よりも深く市民の生活に影響を与えており、可及的速やかな解決が求められている理由を身をもって実感

することができた。

本都市は、歴史的・文化的な要素と近代的な発展が共存する独特の都市である。無電柱化や公共交通の発展など都市インフラの整備が進められている一方で、バイクの多用や交通渋滞といった課題も残っている。



地上に設置されたトランス 人通りの多い場所では、見た目の配慮もなされている



夜遅くでも明るいハノイ旧市街の様子（22:30ごろ）

参考文献

1. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/index.html>
2. https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2023/c9a6be68979e4501/202304r2.pdf

2.7 カントー

2.7.1 カントーの概要

カントーはベトナム南部のメコンデルタ地域に位置し、同地域の経済・文化の中心都市である。ホーチミンから西へ約160キロメートルに位置し、同市からは車で2時間半、ハノイからは飛行機で約2時間の距離にある。ベトナム国内ではハノイ、ホーチミン、ダナン、ハイフォンに次ぐ規模の都市であり、メコンデルタ地域最大の都市でもある。

2.7.2 都市の特徴と産業

カントーは、肥沃なデルタ地帯を活かした農業が盛んな地域であり、特に米の生産が主要産業となっている。そのため「ベトナムの米どころ」として知られている。また、果物の栽培も盛んで、ドリアンやマンゴー、ランブータンなどの南国フルーツの生産が行われている。実際に我々も南国フルーツを手軽にいただけた。マンゴーやスイカ、パッションフルーツなど日本ではなかなか食べられないものを低価格で味わうことができ、それだけでベトナムに来た価値があると感じた。近年では商業や観光業も発展しており、カントーの水上マーケットやエコツーリズムが観光客を引きつけている。

また、産業の多角化も進んでおり、食品加工業や水産業が発展している。特にエビや魚の養殖は国内外の市場に向けた輸出産業として重要な役割を果たしている。カントー市の産業は、伝統的な農業と近代的な加工・流通が融合する形で発展している。

訪れた所感としてはハノイやホーチミンと比べると地方味が強く、英語が通じない店も多かった。しかし、その分物価が安く、のどかな雰囲気が感じられとても楽しめた。

2.7.3 都市インフラと交通

カントーでは近年、交通インフラの整備が進んでおり、特に道路や橋梁の建設が進められている。これにより、地域間の移動がより円滑になりつつある。日本のODAによって建設されたカントー橋の開通により、それまでフェリーによるピストン輸送に頼っていた状況が解消され、交通の利便性が大幅に向上した。

市内では以前は運河を生かした水上マーケットが盛んであったが、陸路の発達により衰退してきている。我々は実際に水上マーケットを見学するツアーに参加したが、取引をしている船は少なく、ほとんどが観光船か観光船に対してモノを売る船であった。



朝市の様子



水上マーケットの様子。
竿に売っている商品を刺して提示している。



減少してきてはいるが船上で生活している人もいる



観光船に横付けしてくる船。
ココナッツやコーヒーなどを売っている。

2.8 ホーチミン

ホーチミン市は人口約938万人(2022年)の南部に位置するベトナム最大の都市で、同国のGDPのおよそ半分を占める。滞在時の気温は昼間でだいたい33度ぐらいだった。1976年に現在のベトナム共産党政府が、指導者であるホー・チ・ミンの名前にちなんで、サイゴン市からホーチミン市へ改名した。ベトナムは大気汚染が問題となっているが、実際にハノイと比べるとホーチミンは空気がきれいだった。

ハノイよりもバイクの割合が多くハノイよりも道路がきれいで、信号も整備されており、信号無視も少ないように感じたが、その分渋滞することが多かった。日本と違って信号には、色が変わるまでのカウントダウンの数字がある。日本でいうところの黄色信号がないので、進めと止まれの切り替えの間がほとんどない。日本は左側通行・右ハンドルである一方で、ベトナムは右側通行・右ハンドルである。ベトナムではたいていの場合右折は信号に関係なくできるようになっており、たまに合法コンビニワープ専用道路がある。カフェなどのお店の近くなど場所によっては無料でバイクを止められる場所があり、バイクは警備員(警察ではない)が守っていた。警備員はきちんとした制服と帽子を身に着けていたが、履いていたのはサンダルだった。バイクを駐車する際は警備員から特定の番号が書かれたカードをもらい、出るときに警備員に返す。公園や大学などの大きな施設には有料のバイク駐車場があり、手動で駐車料金を回収していた。公園の駐車場職員は爆音で音楽を流しながら仕事をしていた。仕事さえ果たせば誰も文句を言わないようだ。駐車料金は大学だと2000ドン(112円)で公園は5000ドン(30円)だった。

中心部にはエルメスやディオールなどの多くのハイブランドが店を構えていた。東京の銀座とかに似ている。ホーチミン工科大学の学生のおすすめのファストフードはテキサスチキンというフライドチキンの店だった。マクドナルドは人生で一回しか行ったことがないらしい。KFCはクオリティがひどいらしい。日本企業の看板も多く見られた。大学の目の前にTOTOの看板があったが、誰も何の企業かは知らなかった。中心部でベトナムで初めて屋外の自動販売機を見つけたが、日本で見ると箱が置かれているのではなく、壁にめり込んでいた。日本と違って、そうしないと壊されて中身をとられる可能性があるのだろう。

ホーチミン工科大学は多くの建物が3、4階建てでそれほど高くない。すべての部屋が空調が整っているわけではないが交流に用いた部屋はとてもきれいで空調も整っていた。

小さなサッカーコートがあった。ホーチミンには2024年12月22日にホーチミン・メトロが開業した。計画中の路線を見るとどことなく東京のようだ。

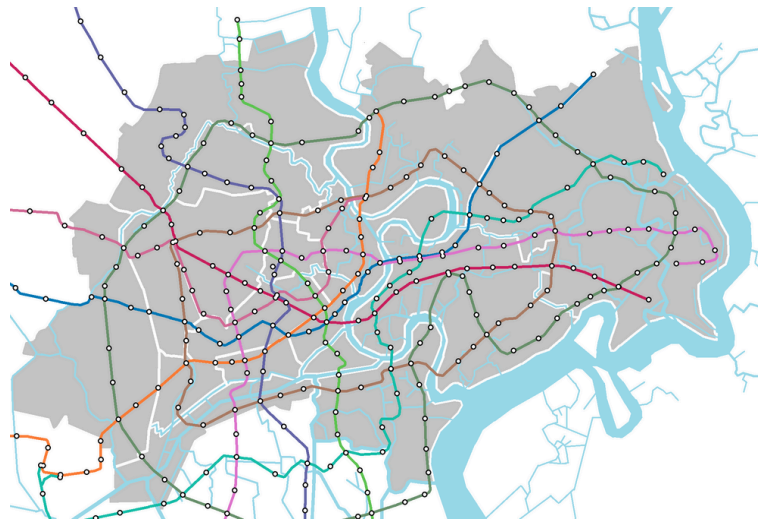
イオンモールに行ったが、日本のメーカーの商品が数多く売っていた。なんなら日本よりも日本の商品をおいていた。日本のメーカーの製品でパッケージに韓国語が書かれたものもあった。上階にはフードコートとゲームセンターもあり、ショッピングモールの構成は日本と全く同じだった。ゲームセンターに置かれていたゲーム機はすべて日本から中古で持ってきたと思われる型落ち品だった。一部壊れていてもお構いなしに設置されていた。ベトナム紙幣をコインと交換してゲーム機に投入する方式だった。10000ドン（60円）で2コイン。多分100円玉でも動く（損する）。

ベトナムの店でお金を払うときは毎回切りのいい数字で（多くが1000ドンが最低単位）表示されている金額は税を含んだ金額だった。お釣りを細かくしないための工夫だと思われる。しかし町田商店（日本に本社がある家系ラーメン）で食事したときは非常に切りの悪い額を端数切り捨てで払った。自分がホーチミンで行った町田商店では、ベトナム風のアレンジはほとんどされていなかった。

ハノイの建物は種類は問わずとにかく電装されている感じだったが、ホーチミンのビルはきれいにゲーミングに電装されていた。



ホーチミンの位置



ホーチミンの鉄道計画

3. ベトナムについて興味があること

3.1 食べ物

今回訪れたハノイ、カントー、ホーチミンの印象に残った食べ物をそれぞれの地域に分けて紹介していく。

3.1.1 ハノイ

ハノイではブンチャー、バインミー、フォー、生春巻き、ココナッツコーヒー、エッグコーヒー、チャーなど有名なベトナム料理をほとんど食べることができた。辛い料理や独特な匂いのする食べ物は特になく、基本的にどれも美味しく味わえた。ブンチャーとはハノイ発祥のつけ麺で、細い米麺を炭火で焼いた豚肉や野菜と一緒に甘酸っぱいタレにつけて食べる料理である。つけ麺の汁が甘酸っぱいのがとても新鮮で、豚肉は焼き鳥のタレの味がして美味しかった。また、ハノイから少し離れたフンイエン省では蒸した鶏と揚げた鶏をそれぞれまるまる一匹ずついただいた。鶏の脚が原型を留めたまま提供され私たち日本人学生は衝撃を受けた。脚の肉球はとても柔らかくぷにぷにとした感触であったが、食べられる所はあまりなかった。



ブンチャー



鶏

3.1.2 カントー

カントーでは到着してすぐにフルーツジュースをいただいた。筆者はパイナップルジュースを選んだが、とてもフレッシュでパイナップルをそのまま飲んでいるかのような味わいで美味であった。ジュースの見た目にもこだわりを感じた。また、カントーはメコンデルタの中心部であり、メコン川で獲れる川魚をはじめとした魚介料理が有名である。カントー大学教授おすすめの海鮮料理のお店に連れていってもらった。鍋の中に入っていた魚を鰻と言われて出されたが、見た目、味ともに私の知っている鰻ではなかった。シンプルな味わいでさっぱりと食べられた。料理の中に甘じょっぱく味付けされた魚料理があったのだが、これが私の好みにピッタリでとても美味しかった。インディカ米によく合った。



搾りたてのフルーツジュース



鰻と言われた魚



筆者のイチオシグルメ

3.1.3 ホーチミン

ホーチミンではバインミー、フォー、揚げ春巻きなどをいただいた。同じ料理名でも地域が異なればもちろん、お店によっても味付けが違い興味深かった。特にホテルの近くにあったベトナム料理のお店の揚げ春巻きが非常に美味しかった。野菜が入った汁につけて食べるのだが、揚げ春巻きのジューシーさと汁のさっぱりさが絶妙なバランスであった。また、ベトナムの学生におすすめしてもらい街中で売られていたソルティーレモネードを飲んだのだが、これが異常なほどしょっぱかった。作っている工程で塩をおおさじ7杯ぐらい入れていて目を疑った。筆者がしょっぱすぎて少しずつしか飲めない中、ベトナムの学生はごくごく飲み干していて異なる国に住む人々との味覚の違いを感じた。ちなみにホーチミンではベトナム料理も食べ尽くしそろそろ飽きてきていたので、イタリアンや韓国料理、日本食などもいただいた。久しぶりに食べたとんかつカレーは異国の地で疲弊した身体に非常に染みた。



揚げ春巻き



ソルティーレモネード

参考文献

1. <https://www.vietnamnavi.com/special/5054834>

3.2 建物

3.2.1 建築の変遷と特徴

ベトナム市街地の建築はとても雑多な特徴を持つ。ベトナム土着の赤い瓦を用いた木造建築様式から、特に北部に見られる中国由来の寺院建築、19から20世紀のフランス入植時代に建設されたフレンチ・コロニアル様式、そしてカーテンウォールが主体の現代建築まで、多種が入り混じった街並みを形成している。例えばハノイ大聖堂やタンディン教会は、パリのノートルダム大聖堂を思わせるゴシック建築の特徴(尖頭アーチ、垂直性、リブ・ヴォールトetc.)を備えている一方で、狭い間口と細長い敷地に立ち並ぶ旧市街のRC造建物がその周囲を囲んでいたりする。



ハノイの雑多な街並み



ホーチミン市内の鳥瞰



タンディン教会



ハノイ大教会

建物の使われ方も多様で、店先に商品や食卓を所狭しと並べたり、奥で店先を伺いながら携帯をいじっていたり、そうした自由な振る舞いが日常となっている様子を見ることができ、日本の理路整然とした都市景観に慣れた私たちには非常に新鮮で面白かった。

3.2.2 増改築の広がり

ハノイ・ホーチミンの都市部を中心に、狭い敷地でなんとか居住・商業スペースを増やそうと、日曜大工的に増改築が行われてきた。一般の建物も似て非なる作られ方をしており、庇や屋上の鉄骨・RC架構が垂直にのる形で多様な顔を見せていた。

これらは道教上の風水が建築計画にも影響を与えている点も特徴である。1日目に訪れたハノイのブンチャ屋では、3階まで狭い急な階段を登らされたが、その段差の蹴上(＝一段の高さ)がひどくバラバラで非常に上りにくかった。これも狭い敷地の中で風水上段数が決められているためであったりする。他にも、配線が外に飛び出していたり、室外機や建具が適当に取り付けられていたりするが、どうにか形になっていて生活が滞りなくできている。こうした慣習に習う真面目な姿勢と使いやすさを優先する大雑把が同居しているからこそ、ベトナムの魅力的で雑多な都市空間が生まれているのだと実感した。

3.2.3 中心市街地の電飾と看板

ハノイ旧市街の夜の街並みは電飾で溢れ、特筆して非常に眩しかった。一般に屋外広告物は人の移動速度に応じた大きさや色、主張度合いやになることが知られているが、ベトナムも例外ではない。むしろバイク移動主体のためか、華美な電飾と「Banh Mi」や「BEER」といった直接的な店名表示が多くみられた。奇しくも外国人の私たちには分かりやすくありがたかったが、現地市民にとって快適なものなのかは定かではない。しかし、午後10時になっても歩道にバイクを止め店先で歓談する彼らの姿からは、この風景が日常となっていることが感じられる。



ハノイのカラオケ店の電飾



「BEER」の看板

参考文献

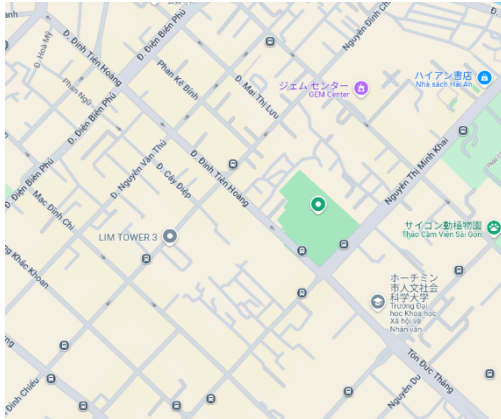
1. 竹森紘臣：『ベトナム建築行脚：ハノイ・ホーチミン・フエ・ハザン』, 彰国社, 2023. 6 （最終確認日2025年03月26日）

3.3 土地利用と天候

東京がそうであるのと同じように、ホーチミンやハノイなどの発展している地域は道路が格子状に整備されていることが地図からわかる。しかし拡大してみると、東京と比べて行き止まりの数が圧倒的に多い。町を散歩しているときも、行き止まりに突き当たって引き返すことが多かったように感じる。政府主体で都市計画が行われているが、日本と比べて土地にかかるお金が安いいため、まだ限界まで土地を有効活用しようしていないことが理由だと考察する。また、ベトナムでは土地を個人が所有することはできず、国が所有者を代表して土地を公共財として統一的に管理するということが法律で定められている。ただし建物は個人や法人が所有することができる。個人や法人は、「土地の所有権」ではなく「土地の使用権」にお金を払うことになる。路上販売や、移動式の屋台で商売することに許可は必要ない（一部エリアを除く）。そのため食べ物はその分安くなるが、衛生基準がないため不衛生な店が存在する。ハノイでは、道路の端に食べ物を焼く屋台があった。明らかに道を狭めているように見えるが、特に問題になっていないようだ。近い将来、規制が厳しくなったらもう見られなくなるかもしれない。ホーチミンの泊まったホテルの近くでは、歩道にテントを立てて寝ている人もいた。

グーグルマップのストリートビューを用いてベトナムについて調べようとしたところ気づいたのだが、タイやインド、日本と比べてストリートビュー可能な道が圧倒的に少ない。特に田舎の方はほとんど不可能。中国では完全にストリートビューを禁止しているので、ベトナムでもおそらく政治的な理由で近年まで使用できなかったものと思われる。現在ハノイやホーチミンで使用できる事から、これから拡大していくのではないだろうか。

天候について、ハノイでは、去年はたまたま寒波によって気温が低かったらしいが、今回のハノイもたまたま寒かった。カントーとホーチミンはずっと33℃前後だった。雨はカントーについたところに一時間弱猛烈に降ったきり（いわゆるスコール）で、留学中は基本雨が降らなかった。



ホーチミンの地図の一部（行き止まり
になっている道が多い）



東京の地図の一部



歩道でものを売る様子



移動しながらものを売る様子



ストリートビューに対応した道（青）

参考文献

1. https://www.google.com/maps/@35.6058973,139.680929,15z?authuser=0&entry=ttu&g_ep=EgoyMDI1MDMyNS4xIKXMDSoASAFQAw%3D%3D

3.4 文化・観光

3.4.1 文化

まず宗教に関しては国教は定められておらず、仏教や儒教、ベトナム古来の伝承がミックスされた民間宗教が一般的であるが、8割以上の人々は無宗教である。それ以外では仏教とキリスト教がそれぞれ1割弱で、特定の宗教に縛られない自由さがある。ベトナム人の価値観や傾向としては日本と似た部分も多く、向上心旺盛、勤勉で教育を重んじる、人懐こいという傾向があり、仕事においては女性の社会進出が進んでいる。就業率の世界平均は47%なのに対し、70%超えとなっている。また、朝のスタートが早く、6～7時には屋台やレストランが営業を開始し始めている。

交通の面では日本と異なる点も多い。まずバイクが多く不規則で、運転する側にとっては非常に緊張感の高い道路状況が続く。ベトナムは右側通行であり、独特のルールとしては、バイクの右折は赤信号でも可能で、専用レーンがある。横断歩道は存在しているものの、信号がない限りは線の前で歩行者を車が待ってくれるという状況にはならないので、積極的に道路に出ていく必要がある。また、横断歩道がない箇所でも横断は可能である。一方通行の道が多いので逆走するバイクもあり、実際に現地で何回か見かける機会があった。更に、クラクションをよく鳴らすのでベトナムに来たばかりの時は頻度の違いに驚くかもしれない。自分の存在を周囲に知らせたり、横を通過するという意味で鳴らしたりする意味もある。

ベトナムのトイレではホテルについているトイレや大学にあるトイレでもトイレットペーパーが流せないトイレも多いので横にあるごみ箱に捨てることになる。また、ウォシュレットの代わりにトイレ横のシャワーが置いてあることが多い。

3.4.2 観光

3.4.2.1 ハノイ

街中を歩いているとあちこちに屋台を見かけることができる。ホテルの近くにはハノイ旧市街地があり、朝早くから開いている店から夜遅くまで空いている店があり多くの人で賑わっていた。ホテルから少し歩いたところにはHanoi Train Streetと呼ばれる通りがあった。ここは1日に何回か実際に電車も通る線路の両脇に店が連なっている通りである。電車が通っていない時間は多くの歩行者が線路の上を歩いており、電車が通る時間になると店の席は電車を見ようとする多くの観光客で埋まっている。目の前を電車が通過する様子はなかなか日本では味わえない経験なので、ハノイを訪問する際は電車の時間を調べてぜひ行ってみたい。



街中の様子



Hanoi Train Street

3.4.2.2 カントー

ハノイからカントーは飛行機で移動したが、空港を出たときハノイとの気温差が15℃ほどあり、北部と南部の気温差を身をもって体感することとなった。

カントーでは川に沿ってナイトマーケットが開催されており多くの屋台と人で賑わっている。あちこちに電飾も用いられており大変活気のある様子が伺える。また、早朝には水上マーケットがあり、朝5時くらいに受付を済ませると水上マーケットのツアーに参加することができる。乗っているボートの横に小型の船がつけ、買い物をすることができる。日本では体験できないことなので早起きを頑張ってぜひ参加してみたい。



毎日見ることができる電飾



ナイトマーケットの様子



水上マーケットの様子

3.4.2.3 ホーチミン

カントーから移動してくるとホーチミンの都会さに驚かされる。高層ビルがあちこちに立ち並び、広い道路にはたくさんの車とバイクが走っている。その中でも市場は存在しており、たくさんの小物や服、バックなどを販売している。中でも有名なベントイン市場は多くの人が集まる市場であるが、相場に比べると基本的に高値で設定されているので、値切ることが前提となっている。旅の思い出に行ってみるのも良いだろう。

中心市街地から少し歩くとSaigon Japan Townという場所がある。その名の通り日本料理が楽しめるお店が多く立ち並び、日本人としては懐かしくなる店の名前も多い。日本食が懐かしくなったら立ち寄ってみるのも良いだろう。



ベントイン市場の雑貨屋



Saigon Japan Town

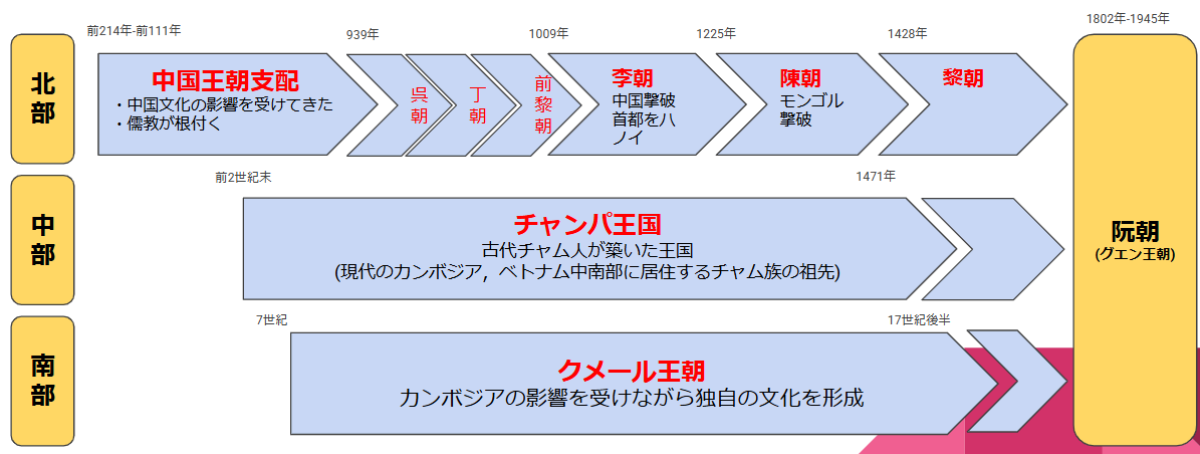
参考文献

1. <https://www.saomai.co.jp/blog-company/2120/>
2. <https://vietbiz.jp/vietnamese-character/>
3. https://fcv.vn/blog_ja/3-strange-traffic-rules-in-vietnam/
4. <https://vietcam-oh.com/blog/basic/detail/000168.html>

4. ベトナムの歴史

4.1 フランス植民地時代～独立まで

フランス植民地時代以前の歴史は複雑であるが簡潔にまとめると、ベトナムは北部・中部・南部に分かれており、それぞれ別々の道を歩んでいた。北部は中国の影響を強く受け時代によって王朝が移り変わり、中部は古代チャム人が築いたチャンパ王国、南部はカンボジアの影響を受けながら独自の文化を形成したクメール王朝が栄えていた。それをベトナム最後の王朝グエン朝が一つに統一した。



ベトナム地域における古代から近代の王朝変遷

そのような中、1840年アヘン戦争が勃発し清がイギリスに大敗した。大国清がイギリスに敗北している姿を見て欧米諸国に恐怖を感じたグエン朝はキリスト教禁止令を打ち出し鎖国体制をとった。また同じ時期にベトナムに滞在していたフランス人とスペイン人の宣教師が殺害される事件が起こった。これらをきっかけにナポレオン3世がインドシナ出兵を開始し、ベトナムとフランスの戦争が開始した。

戦争に敗北したグエン朝の皇帝は清朝の皇帝に支援を要請し、清朝も宗主国としてベトナムを守るため清仏戦争が勃発した。しかし、戦争中に朝鮮で甲申政変が起こったため清朝は講和を急ぎ、天津条約を締結してベトナム保護国化を承認した。それによりベトナムはフランス領インドシナ連邦の中の一邦となった。

フランスの植民地時代はベトナム国民は厳しい生活を余儀なくされた。不平等な関税制度とともに農地や土地はフランスのものとされた。農民たちは小作農民として重労働を強いられ、重税も課せられてフランスによる搾取が強まった。学校ではフランス語のカリキュラムが導入され、これまで使っていた漢字は禁止、代わりにアルファベットを使ったベトナム語表記（クォックグー）のみが許可された。さらにフランスはインドシナ大学を設立し、高等教育をすべてフランス語で行うなど、フランス同化政策をベトナム国民に強いた。

今でもベトナムの街を歩けばフランスの名残りを感ずることができる。今回の留学で特にホーチミンにはヨーロッパ風の建物が多く残っていると感じた。中央郵便局やサイゴン大教会、オペラハウスなどが挙げられる。また、食文化にも大きな影響を与え、バケットを使ったバインミーやコーヒー、プリンなどがベトナムの文化として残っている。

フランス植民地時代にたびたび反対運動が起こるようになり、そのたびにフランス政権に厳しく弾圧されてしまっていた。しかしそれらの運動はやがて独立への強い思いへとつながっていった。1941年ホー・チ・ミンがベトミン（ベトナム独立同盟）を結成し、独立運動を展開した。そして1945年ベトミンはハノイで蜂起し八月革命を起こし、9月2日にハノイで独立宣言を行った。これは現在の独立記念日となっている。しかし、フランスの占領が本当に終わりを迎えるまでにはさらに9年必要となる。



ホテルコンチネンタルサイゴン



ホーチミン市役所

1840 アヘン戦争
1858 フランスの侵攻
フランス=ベトナム戦争
1884 清仏戦争
1885 天津条約でベトナム保護国が成立
1887 フランス領インドシナ連邦が成立
フランス植民地時代
1945 ベトナム独立宣言

歴史年表

参考文献

1. https://www.y-history.net/appendix/wh0802-052_1.html
2. https://www.jtb.co.jp/kaigai_guide/report/VN/2014/07/colonial-period.html

4.2 インドシナ戦争から現在

この節ではインドシナ戦争から現在のベトナムの歴史について紹介する。最初に年表をご覧ください。

ベトナム歴史年表（インドシナ戦争以降～現代）

- 1946 インドシナ戦争 旧宗主国フランスがベトナムの独立を認めず勃発
- 1949 フランス・ベトナム協定 コーチシナ（南部ベトナム）がフランスの傀儡国家に
- 1951 2/11 ベトナム労働党結成（のちのベトナム共産党）
- 1954 5/7ディエン・ビエン・フーの戦いでフランスの敗北 7/21ジュネーブ協定
- 1955 ベトナム国の解散とベトナム共和国の建国（南ベトナム）
- 1964 トンキン湾事件
- 1965 アメリカによる北爆開始
- 1968 ソンミの虐殺
- 1973 1/27 パリ和平協定 アメリカ軍の撤退 9/21 日本と外交関係樹立
- 1976 南北統一 ベトナム社会主義共和国樹立
- 1979 中越戦争
- 1986 ドイモイ政策発動
- 1992 新憲法公布
- 1995 アメリカとの国交正常化 ASEAN加盟
- 2007 WTO正式加盟

この年表をもとに説明していく。まずインドシナ戦争について説明する。前提として、指導者ホー・チ・ミンが率いるベトナム独立同盟、通称ベトミンが八月革命でベトナム民主共和国の独立宣言を行っており、これに対して1946年12月に独立を認めないフランスが軍事侵攻を始めた。これがインドシナ戦争の始まりとなる。のちのアメリカによる軍事侵攻と区別するため、第一次インドシナ戦争とも呼称される。1949年、フランス・ベトナム協定が締結され、ベトナム国が「フランス連合に属するベトナム人国家」として正式に成立、南部地域を実効支配することになる。しかしベトナム国の実態はフランスの傀儡国家であった。1950年にはソ連と中国がベトナム民主共和国を正式承認し武器援助を開始したことで、アメリカがフランスとベトナムに軍事援助を開始するに至った。これによってインドシナ戦争は東西冷戦の様子を呈することとなった。1951年にはホー・チ・ミンを中心に結成された党であるベトナム労働党が結成され、フランスからの完全独立を目指して北側として戦うこととなる。1954年、インドシナ戦争に終わりが訪れる。ディエン・ビエン・フーの戦いでフランス軍を包囲したベトミン軍が50日ほどの戦闘で陥落させ、フランスが大敗を喫したことで、フランスはベトナム民主共和国と和平交渉を開始し、ジュネーブ協定が締結されることとなった。協定内ではベトナム、カンボジア、ラオスの独立が尊重された。ベトナムは北緯17度線を暫定軍事境界線とされ、南北統一のための選挙実施を約束した。しかし、アメリカが最終宣言の参加を拒否し、南ベトナムであるベトナム国も反対した多く実質的に拘束力を持たないことになり、選挙も実施されなかった。こうして第一次インドシナ戦争は終結した。

翌年、南ベトナムにおいてバオダイ帝が追放されベトナム国が崩壊する。同様の土地で

フランスの代わりにアメリカが後ろ盾となりゴ・ディン・ジェムが初代大統領のベトナム共和国が建国された。実効支配する地域がなくなったことで1956年にフランス軍は完全撤収となった。

1960年、ベトナム共和国のゴ・ディン・ジェム政権の激しい弾圧から、北と統合することを目指す南ベトナム解放民族戦線が組織される。アメリカは南ベトナム軍を軍事支援した。1964年には、アメリカが直接介入のきっかけとなったトンキン湾事件が発生する。アメリカの駆逐艦がトンキン湾を巡視していたところ北ベトナムの魚雷艇の攻撃を受けたと発表したため直接介入したが、でっちあげであったとも言われている。翌年にはアメリカが北ベトナムに対する爆撃を開始、恒常化する。結局この戦争は1973年の1月27日にアメリカ、北ベトナム（ベトナム民主共和国）、南ベトナム解放民族戦線、ベトナム共和国の四つでパリ和平協定が調印されるまで続くこととなった。ベトナム戦争の停戦、アメリカ軍の撤退などが合意された。ただし南ベトナムの政治的対立の解決はなされなかったため、内戦は続くことになった。1975年にはベトナム和平協定が結ばれたことでアメリカ軍が撤退した後、南ベトナム政府が崩壊し、北による吸収合併でベトナムの南北統一と独立が実現した。翌年、ベトナム社会主義共和国が樹立する。

1979年、中越戦争と呼ばれるベトナムのカンボジア侵攻を受けて中国が懲罰として限定的、短期的に侵攻を行った戦争が起こる。第三次インドシナ戦争とも呼ばれている。

1986年にはドイモイ政策が発動し、資本主義の導入、国際社会への強調、国民生活に必要な産業への投資、社会主義政策の緩和を政策方針としている。

1995年、アメリカとの国交が正常化し、またASEANに加盟した。2007年にWTOに正式加盟している。

現在の政治体制について、ベトナムは社会主義共和国であり、元首はルオン・クオン国家元首である。政策としては市場経済システムの導入とドイモイ路線を継続し、汚職対策や構造改革、国際競争力強化などに取り組んでいる。2026年に国会議員選挙が実施される予定である。

ベトナムはベトナム戦争が比較的最近まで行われていたので、ベトナムで博物館を回ると至る所にベトナム戦争の痕跡を垣間見ることができた。そのような点で戦争が日本よりも身近にある国だと思った。また、学生と交流した時も戦争のことを思想を挟むことなく事実としてまっすぐ受け止めているという感想を抱いた。

5. サイトビジット、フィールドワーク

5.1 市内フィールドワーク①_ハノイ市内廃棄物回収状況

日本とベトナムでは、ゴミ回収の実態が大きく異なる。街中に日本のようなゴミ箱や収集場所が設置されていることは少なく、道端に各々各個人が家庭や店舗で出たゴミを置いている光景が特徴的だ。そして経済成長の中、増大するゴミや行き届かない分別が環境問題として度々挙げられている。

回収のプロセスとしては、まず建物や街路樹の前に各家庭が置いたゴミ袋を個人事業者や業者が回収し、大きい収集箱を引いて移動させる。飲食店と住戸が混在した市街地ゆえか、それに対応するかのように有機ゴミや紙ゴミなどが混在して(袋ではある程度分別されているようだったが)道端にポツンと置かれている。次に下図(回収作業)のように2,3人の従業者によって収集箱から回収車に詰め込まれていく。ホーチミンも同様だが、ハノイではゴミ回収時間は地域によって異なり、早朝や夜中に回ることも多々あるそうだ。

観察していて気づいたことを列挙すると、

- ・分別させる色や言語の表示があまりなく、実際に規定のある袋の色に従えているわけで

はない。

- ・歩道はゴミ置き場だけでなく商品陳列や皿洗い、バイク駐車など多様に使われていたが、現地民はなんともなしにそれらを軽々避けながら通行していた。
- ・ホーチミン市よりも用いられている袋の種類にばらつきがあったり、ホアンキエム区より旧市街地の方が個人事業者が多かったりと、行政単位で実態が大きく異なる。



道端に置かれる家庭ゴミ



回収作業 100Lほどの大きなゴミ箱を手で引いている。



回収車でゴミ箱から溢れ出すゴミを回収する様子(左：午後6時ごろ 右：午後8時ごろ)
同じハノイ市でも回収時間帯がバラバラ

印象としてはかなり現場主義というか、慣習に任せている雰囲気を感じた。中にはゴミ捨てついでに飲食店も排水を側溝に流す店員の姿もあり、歩道の使い方も含めて大雑把な印象を受け、むしろこの体制で成り立っていることに感心した。2025年を境に、ホーチミン市やハノイ市で各自治体や人民委員会らの罰金による分別義務化が始まるが、意識改革の道のりはかなり長いように思われる。既存の慣習的なゴミ捨てプロセスの改善を、いかに現地住民に自分ゴト化させられるかが重要になるだろう。

5.2 T&J Green Energy Company Limited (JFE廃棄物焼却発電プラント)

3月7日は朝からバスで移動してT&J Green Energy Company Limitedという会社のJFE廃棄物焼却発電プラントの見学をした。T&Jというのは日本企業であるJFEとベトナム企業であるT&Tの合併企業である。この企業では、廃棄物を燃やす熱をボイラーで集めタービンを回し発電を行うバイオマス発電を行っている。ベトナムでは一般廃棄物と産業廃棄物を混ぜて燃やしている。しかし、それぞれのカロリーが異なるため無作為に混ぜて燃やすことはできない。そこで、この会社では巨大なクレーンを用い一般廃棄物と産業廃棄物の割合を3：1程度にすることでカロリーを一定にして燃やしている。また、却炉は不完全燃焼を防ぐため1000℃まで温めており、さらに着火で灯油を使用するがあとは空気を送り込むだけ、という非常にエコな仕組みを導入している。

私はまず、ごみを資源に変えるという発想が素晴らしいと思った。確かにこのような取り組みはすでになされているが、いざベトナムに行ってみると本当にごみが多いのだ。道を歩くとそこら中にごみが落ちている。場所によっては異臭を放っているところさえある。だからベトナムでこのような事業を行うのは、会社にとってもその地域に住む人々にとっても有益なことなのだなと思った。

次に面白かったのは、ごみの灰が地上30mくらいの穴からパラパラと落ちてくる場所だ。この景色は圧巻だった。私は小学生のころ、都内のごみ処理場に見学に行ったことがある。そこでは焼却炉の様子を高い位置から施設越しに見せられただけだった。しかしこの工場で実際に作業員がコントローラーを用い巨大なクレーンを動かしごみを混ぜているところ（正直ここはごみの匂いでとても臭かった）、発電用のタービン、トラックごとごみの重さをはかる計測器、そしてパラパラと落ちてくる灰をこの目で見ると、「ごみ処理」という行為をものすごく身近に感じる事ができた。

また、日本技術が海外でどのように役立っているのか知ることができた。上記の通りT&J Green Energy Company Limitedは日本企業とベトナム企業の合併企業である。このように国境を越えて会社が協力することで、日本は最新技術を提供し、現地企業はその土地の人脈や住民からの支持を提供している。ただ最新技術を持っているだけでは技術浸透は行えず、技術を人々や地域に定着させるには現地企業の力が不可欠なのだな、と思った。



工場前での集合写真

このはなしを受けて事前授業の坂田さんの講義「技術浸透には人々に浸透させるためのサービスが必要である」を思い出し、この合併企業はまさにそれを実行しているのだなと思った。

今回このごみ処理場に行ってこの目で見てきたおかげで、頭の中では理解していただけのものを完全に自分の中に落とし込むことができたのではないかなと思う。この留学に行く前は、ごみ処理に関してそこまで興味はなかったが、この工場見学に行ったおかげで少し興味がわいてきた。自分たちの生活の中で生まれた廃棄物をどのように処理していくのか、これは産業の発展に伴い永遠に続く課題である。この工場見学は私にとってとても貴重な経験になった。



T&J Green Energy Company Limitedオフィス内での集合写真

5.3 フンイエン省リサイクル村

フンイエン省では、多様なリサイクル事業が展開されている。代表的な事例として、ミンカイ工芸村のプラスチックフィルムリサイクル事業が挙げられる。同村では、1日あたり約600から650トンのプラスチックの生産・リサイクルが行われており、主な製品としてプラスチックパイプ、ビニール袋、プラスチックビーズ、薄膜、ネット、カップ、箱などがある。しかし、1日あたり約60から65トンの固形廃棄物が発生し、一部は未処理のまま環境へ放出されている。また、約7000m³/日の未処理排水が直接排出されることで、深刻な環境汚染が問題となっている。

貴金属リサイクル事業では、日本の松田産業が2013年に「MATSUDA SANGYO (VIETNAM) COMPANY LIMITED」を設立し、環境リサイクル事業を展開している。また、廃電線や通信線のリサイクルも行われており、個人事業主が建物の解体業者やプラスチックフィルム収集業者から原料を調達し、銅やアルミニウムの芯を製造業者に販売している。さらに、被覆材は再生樹脂ペレットの製造に活用されている。

環境省の「アジア水環境改善モデル事業」の一環として、高濃度含油廃液の減量化・再利用水の実証試験が2024年9月より開始される予定である。フンイエン省の鋼管工場において、膜処理技術を用いた実証試験が実施され、チューブラー型モジュールを活用した水環境改善が試みられる。

また、電子廃棄物リサイクルも行われており、2011年にはミーハウ地区内でE-wasteリサイクルを担う村が確認された。この村には約250世帯、1000人程度が居住しており、稲作に加え電子廃棄物のリサイクルが主要産業となっている。フンイエン省では、このような多岐にわたるリサイクル活動が展開されており、それぞれの分野で環境問題への対応が求められている。



左図. 道端に集積されているプラスチックフィルムの様子こうした道が数キロにわたって続く

右図. 同様に道端で乾燥されているプラスチックフィルムの様子。定期的に攪拌及び入れ替えを行う人員がいた。



河岸のプラスチックフィルムにより汚染されたと考えられる河川の様子。中には川の流れを堰き止めるほどのプラスチックフィルムが放置されている部分もあった

5.4 Xã Cầu村リサイクル村

Xã Cầu村は、かつて線香製造が主力産業であり、訪問した際にも一軒線香を製造している家屋が見られた。現在では、近年では使用済み等のプラスチックの収集およびリサイクル業が主要な産業となり、約180世帯がこの業務に従事している。使用済み等のプラスチックの収集と選別は分業化されており、地域全体で効率的な運営が行われている。

リサイクルのシステムは、地元住民があらゆる地域、工場などから自主的に使用済み等のプラスチックなどを回収し、それを使用済み等のプラスチック集積場に持ち込むことで、その重量に応じて現金と交換する仕組みになっている。このため、リサイクル事業は地域住民にとって重要な収入源となっている。訪問時の印象としては、作業に従事する人々の年齢層は比較的高く、特に女性の労働者が多く見られた。

使用済み等のプラスチック集積場にはプラスチックリサイクルのための器具が設置されているものの、処理能力が使用済み等のプラスチックの量に対して十分とは言えない状況であった。さらに、適切な処理がなされていない使用済み等のプラスチックが山積みとなっている場所も見られ、衛生環境の悪化が懸念される。ベトナム全土のあらゆる地域、工場から使用済み等のプラスチックを政府などが関与することなく自主的に回収し、リサイクルを行うというシステム自体は環境保護等の観点からも有用な取り組みであり、普及させるべきだと考えるが、その一方で、以上の実態を踏まえると、とても処理しきれない量の使用済み等のプラスチックが集積され、さまざまな問題を引き起こしかねないと感じた。十分な処理施設の整備や、より広範な回収ネットワークの確立が求められる。



うずたかく積み上げられた使用済み等のプラスチックの様子



分別された空ペットボトルの様子

5.5 市内フィールドワーク②_ハノイ市内家電量販店調査

5.5.1 Nguyễn Kim Tràng Thi

ベトナムの家電量販店の入り口で気づくことは、日にちの表記方法が日本と異なるということである。日本では2025/03/05と表記するがベトナムでは05/03/2025といった具合に、細かいほうから表記する。31/04のような明らかに存在しない日にちだと間違えることはないが、05/03のだと何月何日をさしているのか見間違えてしまう。

入り口付近には売り物の人の半身程の大きさのスピーカーが置いてあり、爆音で音楽を流していた。曲は <https://soundcloud.com/> から適当に流していたのだが、日本ではこのように商業目的で他社のものを利用する際はもっと慎重なように思える。

入ってすぐ左には仏壇のようなものがある。ベトナムでは商売繁盛を祈って神様をお祀りする文化がある。この家電量販店も例にもれず祠を設置していた。入り口にもあった巨大なスピーカーがたくさん並んでいる。ベトナムの町を歩くと、いくつかの店は表にこのような巨大なスピーカーを設置しているのを見かける。この家電量販店では日本で売ってのようなポータブルなスピーカーは見当たらず、最小でも2Lペットボトルサイズだった。騒音を出しても問題ないぐらい、ほかの家と間隔が開いているか、騒音がそもそも問題にならないのかもしれない。巨大スピーカーのうちの一つの価格は239万ドン（約14000円）だった。思ったよりかなり安い。

冷蔵庫のエリアだけはなぜか冷蔵庫がすし詰め状態で、そのほとんどが真っ黒なことも相まってサーバールームのようだった。冷蔵庫のうちのハイグレードのものにはウォーターサーバーのような機能がついていた。そして巨大だった。

テレビに関しては全体平均が日本の2から3倍ぐらい巨大で100インチ級のものがゴロゴロあった。むしろ小さいサイズのは売っていなかった。（そのサイズでも持ち帰るときはバイクのこともある）日本のメーカーも日本で見ないようなサイズのテレビを売っていたが、サムソンやLGなどはその二倍は大きいサイズを売っていた。家が広いか、そもそもこの店が富裕層向け（外国人向け）だからだろう。そして日本ではテレビを展示するときは適当な番組を流しているが、ベトナムでテレビ放送を流しているテレビは一台もな

く、アマゾンプライムやYoutubeの画面だった。見た限りすべてのテレビがアンドロイドTVだった。

掃除機はダイソンの高級なものが数台あるだけで、ほとんどおいていなかった。ベトナムは掃除機を使わない？



店の正面



巨大なスピーカー



高級冷蔵庫



巨大なアンドロイドTV



日本語の書かれた製品

5.5.2 Mediamart

3月8日、私たちのグループは「Mediamart」と呼ばれる家電量販店を訪問した。訪問の

目的は、日本メーカーの製品がどのように取り扱われているかを確認し、日本の家電量販店との違いを現地で調査することだった。Mediamartの売り場は1階から3階まで広がっており、4階以上はオフィスとして使われていた。商品はカテゴリごとに分かれて陳列されており、一部の在庫品は階段スペースにも並べられていた。店内の印象としては、通路が非常に狭く、特に店員が通路で商品を段ボールに梱包しているときなどは、通行が困難な場面もあった。取り扱われていた日本メーカーの製品としては、パナソニック、日立、シャープなどが目立ち、特に炊飯器はほとんどが日本製だった。一方で、LGやティファール、フィリップスなどの海外メーカーの製品も多く見られた。

価格に注目して電子レンジを調べてみたところ、およそ180万ドン（約1.1万円）から460万ドン（約2.9万円）と幅があり、日本で購入する場合と比べても大きな差は見られなかった。電子レンジ以外の家電も同様で、日本と同程度か若干安い価格帯の商品が多く、ベトナムにおいて家電は高級品として位置づけられている可能性があると考えられた。また、電子レンジの機能についても注目した。多くのモデルには10～14種類の自動メニューが搭載されており、温め・解凍はもちろん、簡単な調理にも対応していた。さらに、チャイルドロックやタッチパネル、静音設計など、日本でもよく見られる機能が備わっており、ベトナムでも電子レンジの多機能化が進んでいることがうかがえた。実用性に加えてプラスアルファの便利さを求めた製品が多い印象だった。

また、店内にはウォーターサーバーの売り場が広く設けられており、日本のように水道水をそのまま飲用する習慣があまり一般的ではないことがうかがえた。日本では上部に水タンクを設置するタイプが一般的だが、ここではタンクが下部に配置され、蛇口をひねるような方式が主流だった。



ウォーターサーバー



電子レンジ



エアコン

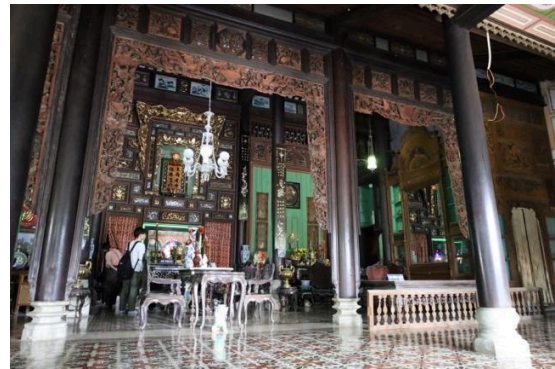
5.6 Binh Thuy Ancient House

Binh Thuy the Ancient Houseは19世紀インドシナ植民地時代の当時の市長の邸宅で、竣工年は1870年である。外の見学料は無料であるが、家の中に入るには一人当たり1.5万ドン必要である。見学可能な時間は8時から12時、14時から18時となっている。現在の家主による説明は英語ではなくフランス語で聞くことができる。

当時のベトナムはフランスに与する陣営とあくまでベトナム独立を訴える陣営に大きく二分されていたが、この邸宅はフランスに与し植民地運営に協力した市長によって建設されたという。邸宅はコロニアル様式というよりも当時フランスで流行していたアール・ヌーヴォー様式を取り入れており、仏統治時代の名残あるオールドハウスと言える。家の周りの池や花も美しく特徴的である。また、インテリアには仏から輸入した大理石の家具やベトナム式の祭壇、螺鈿や宝石を散りばめた机、精巧な透かし彫りが施された欄間など、調度品も非常に豪華なものが数多くあった。特にずっと使用され続けている椅子は、今もなお使用可能なものであるが、現在では入手が難しい木材を使用しており、学術的にも技術的にも重要性の高いものだと言える。これらの調度品は当時の高貴な生活を表しているとも言えるだろう。この豪華絢爛な住宅は、家主とフランス政府が植民地政策によって地元農民を搾取した富をもとに建設されたものであり、言わば植民地主義の集大成でもある。特にベトナムのような植民地となった背景のある国の建築は、前述のような直接は見てこない一面が存在する美しさである可能性もあることを忘れてはならないと感じた。



外観



内装



調度品類

参考文献

1. <https://ameblo.jp/hozumi0107/entry-12671733037.html>
2. <https://vinpearl.com/en/binh-thuy-ancient-house-a-national-heritage-site-for-architect-arts>

5.7 Can Tho市内 Tan An市場見学、Kai Lang水上マーケット

カントーに到着した翌日の朝、タンアン市場を見学した。タンアン市場は地元民が毎日通う生鮮食料品市場であり、川で獲れた新鮮な魚介から肉、果物まで並んでいた。確かに観光客はほとんどおらず、少々我々が場違いのように感じた。一番衝撃を受けたのは豚の生肉のほぼ全てが部位ごとに売られていたところだ。生肉を常温で放置しているところはもちろん、豚の耳まできれいに切られて売られていて日本では絶対に見ることのできない光景であった。

また、カントーを出発する日の早朝、カイラン水上マーケットに参加した。陸路が発達していなかった頃は水上マーケットで活発に商品の取引が行われていたが、十分に陸路が発達した今、そこまで盛んではなく、現在は観光客用としての存在意義が大きい。水上マーケットは気温の高くない早朝に行われるため、午前五時ごろ船が出発する。四時過ぎに起き、眠い目をこすってなんとか時間に間に合うことができた。船が進んでいく中で、私たちの乗っている船の両脇に果物やジュースを乗せた船がとまり（なにかを引っ掛けて船同士をつないでいた）商品を売って、売り終わったらつなぎ目を外していなくなる、というのを何回か繰り返した。また、途中で川に浮かぶレストランやお土産屋さんも訪れ

た。気づくと空も明るくなり始め、午前8時ごろ船場へ戻ってきた。想像していた水上マーケットとは少し異なり、かなり観光客向けの内容であったが、船と船をつなぎ合わせて商売をするというアイデアがかなり斬新で興味深かった。ちなみに商品の買い方がよく分からず、意外とすぐ船は離れて行ってしまうため商品を購入することはできなかった。



豚の生肉



明るくなり始めたころの様子



商品に乗せた船

5.8 Can Tho大学内

5.8.1 ヤンマー研究所 Dr. Thanh

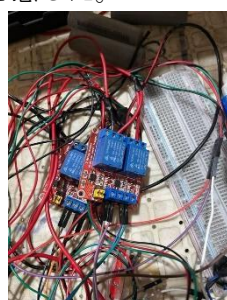
本留学プログラムではカントー大学を訪れた際、同大学内にあるヤンマー研究所を訪れた。ヤンマーは2013年からカントー大学と連携を取り、2023年から大学内に研究所を設けている。Dr. Thanhのお話の中でもキーワードとして出たが、ヤンマー研究所では modernization of Agriculture、すなわち新しい技術や仕組みを現地の農業に取り入れていくことを目標にカントー大学の農学部と連携し、共同研究や学生実習などを行っている。特に稲作に着目し、肥料の与え方を効率的に行えるよう考えたり、人力作業を機械の導入で効率的にできるように考えたり、それによって生産品のコストが下がるように考え

たりしているという話があった。例えば、米の収穫時に自動で不要な部分を吐き出し、もみ(paddy)だけを回収するような機械であったり、農薬の散布を行うドローンであったりがDr. Thanhのお話の中で紹介された。こういった農機具は実際に実物を見学させていただったので次項で説明する。農業機械の導入に関しては農協がサポートしており、農協が購入した物を各農家に貸し出す形をとっているそうだ。そのためベトナムでは農家は農協に入ることが促進されているが、農業機械が必要になる時期がかぶる分、融通を利かせることが大変であるという課題は残っている。また他の課題としては、所有する土地の大きさによって必要になる機械の大きさが変わるといことがある。当然広大な土地を所有する農家は大きなマシンを欲しがるとし、逆に小さな土地では大きなマシンは使用できない。現地では約250haの土地を所有する農家と約2ha程度の土地しか所有していない農家が混在しており、農家ごとの格差があるようだった。

Dr. Thanhのお話の後、実際にカントー大学内にあるヤンマーの農業機械を見せてもらうことが出来た。以下に示す画像はそれらの写真である。これの農業機械に用いられる技術には日本の技術が協力・貢献しており、自分を含めた機械系の学生にとってはなじみある機構や精度の高い構造に大いに興奮した。例えば1枚目の写真は肥料をまく機械だそうで、タイヤの回転数に応じて排出する肥料の量を調節することが出来るそうだ。一方でその技術を用いたこういった製品はベトナムの現地向けに製造されたわけではなく、2枚目の画像にあるようにカントー大学の学生が研究の中で現地向けに農機具の改良を行っている様子も見られた。こういった現地向けの改良を研究として行う学生と交流し、技術交流や共同研究などを行ってみたいと感じた。



肥料をまくための農業機械



農機具改良の様子



全体集合写真

5.8.2 JICAカントー大学プロジェクトオフィス 今井淳一氏

3月10日は、JICAカントー大学プロジェクトオフィスにも訪れた。まずJICAについて説明しておく。JICAとは、ODAを行う日本の政府機関である。主な活動としては、技術協力、有償資金協力、無償資金協力、海外協力隊、災害などの緊急援助、官民連携などがあげられる。

さて、なぜ大学のキャンパス内にJICAのオフィスがあるのだろうか。実は、カントー大学はベトナム戦争時からJICAと関わりがある。1966年、カントー大学が設立される。その三年後、1969年にJICAはカントー大学との協働関係をスタートさせる。1990年代には大学に無償資金提供を行い、カントー大学農学部改善計画を実施している。2010年から2020年には有償資金提供を行い、2022年からは気候変動対策など、今も深い協働関係を築いている。このように大学と連携することでJICAは人材育成を行っている。

特にカントー大学は、ベトナムのメコンデルタ地域に位置しており、農業が盛んである。実にコメの国内生産量の56%がメコンデルタで作られているのである。しかし、デルタ地域は海抜が低く、メコンデルタは気候変動に盤石な世界三大デルタのうちの一つであ

る。このまま気候変動が進めば、コメを作っていた地域に海水が混じり塩分濃度が上がってしまい、今までのように十分に作物を収穫できなくなってしまう。下手すると住む自体すら危うくなる地域もある可能性がある。そこでカントー大学とJICAはこのメコンデルタ地域の持続可能な発展を模索している。特に、この地域の人材を育てるための産学官連携プラットフォームの構築を推進している。

私は将来漠然と将来国際協力分野で働きたいと思っている。しかし専門分野を何にするかまだ決めていない。そこで私はこの訪問の際、先生方がどのような経緯で今のお仕事をされているのか質問した。私のキャリアを考えるうえで参考にしなかったからだ。その際先生方に、「あまり気負う必要はない、今はたくさんの分野に興味をもってたくさん学ぶことが大事だ」と言われたのが印象に残っている。プログラム前、私は再生可能エネルギーに興味を持っていたが、このプログラムを受けて農業やごみ資源も面白そうだと思っていた。その時にこのようなお話をいただけたことで、まだ自分の視野を狭めずにたくさんのことを学んでいこうと思ったし、自分のことをせかしすぎずにもう少しのんびり好きなことを好きなように取り組んでいいんだな、と思うことができた。

また、このオフィスでは、カントー大学と日本の大学を結び付け、両国の専門家による共同研究を推進している。このような教育による国際協力はとても大切なことだと思う。今回プロジェクト内で様々な大学の生徒と交流があったが、どれも私の今までの（日本国内での）常識を覆すものばかりで新鮮だった。だからこのような共同研究は、一つの国では思いつかないような素晴らしいアイデアを生み出す絶好の機会だと思う。



JICAオフィスでの集合写真

5.8.3 タケショー 小野間氏

Can Tho大学にて、タケショーフードベトナムの小野間様から、ベトナムでの事業展開についてお話をいただいた。また、親会社である株式会社タケショーの田中利直社長とも日本とZOOMをつなぎ、オンラインで企業理念などについてお話をいただいた。

株式会社タケショーは、1960年に新潟県で創業し、食品開発のサポートやブレンド調味料の製造・販売、食品加工用副原料・副資材の販売、包装資材・包装機材の提供など、幅広い事業を展開する企業である。2018年にはベトナムのCan Tho大学と共同研究契約を締結し、メコンデルタ地域の豊富な食資源を活用するための研究開発を開始。2019年にはベトナムに子会社「タケショーフードベトナム」を設立し、現地での事業を本格化させた。

タケショーがベトナムでの事業を展開する根底には、「メコンデルタの素材の高付加価値化」と「ベトナムにある食品会社の国際競争力強化」を通じて、メコンデルタの持続的発展に貢献したいという強い思いがある。例えば、ベトナムではエビや魚の加工時に発生する副産物が多く廃棄されているが、タケショーはCan Tho大学と連携し、これらを活用

した調味料の開発を進めている。また、規格外の果物・野菜を使用したパウダー製品の製造や、米のもみ殻を活用した食品添加物の研究にも取り組み、食品廃棄物の削減と新たな価値の創出を目指している。

こうした取り組みを通じて、単に食品を製造・販売するだけでなく、地域資源を最大限に活用し、メコンデルタの食品産業の発展と環境負荷の低減を両立させることを目指している。タケショーは、ベトナムの食品産業の持続的な成長に寄与しながら、国際市場でも競争力を高めていくことを目標に掲げている。

タケショーの方々のお話を聞き、単に事業として利益を追求するのではなく、ベトナムの発展や環境問題の改善にも貢献している点が素晴らしいと感じた。特に、廃棄されがちな副産物や規格外の食材を活用し、新たな価値を生み出す取り組みは、持続可能な社会の実現に向けた具体的なアクションとして非常に印象的だった。また、カントー大学と、ベトナム人と日本人の味覚の違いに関する共同研究をされているということで、異なる国同士ならではの研究で面白いと感じた。



田中社長をはじめとするタケショーの方々（オンライン）とタケショーフードベトナムの小野間さん（現地）

5.9 Can Tho大学Hau Giangキャンパス

3月11日、カントー大学ホアアンキャンパスにてカン先生の講義を受けるため、現地へ向かった。宿泊していたカントー市中心部からは車で約1時間の距離であり、都市の喧騒から離れた静かな農村地帯に位置している。

このホアアンキャンパスは、約100ヘクタールもの広大な敷地を有しており、主に農業に関する実践的な研究・教育の場として活用されている。周囲には運河が流れ、自然豊かな環境に囲まれたこのキャンパスには、広々とした農地や実験用の圃場、畜産施設などが整備されているとのこと。場所としては都市部から離れているが、キャンパス内の建物はしっかりと整備されており、講義室も充実していた。

その後、私たちはカントー大学の学生と交流を行った。まずは名前などの簡単な自己紹介を行い、お土産を手渡した。参加していた学生の中には、将来日本の大学院などの教育機関で学びたいと考えている人もいて、自主的に日本語を勉強しているとのことだった。その学生とは日本語でもコミュニケーションを取ることができ、積極的な姿勢がとても印

象的だった。



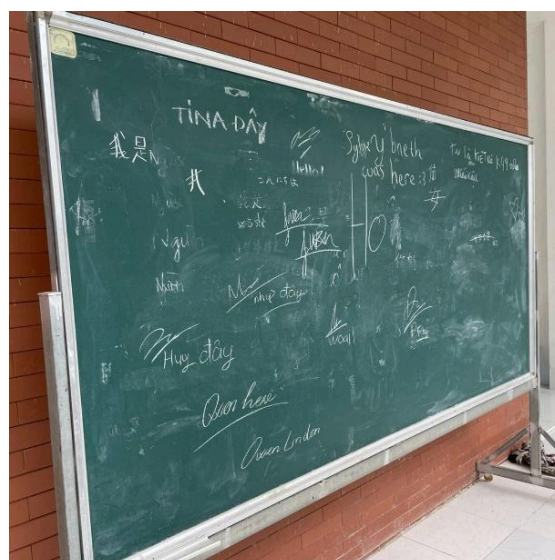
ホアアンキャンパスの校舎



カントー大学に通う生徒と集合写真



ホアアンキャンパスの校舎の廊下
参考文献



ホアアンキャンパスの校舎の黒板

1. <https://crd.ctu.edu.vn/en/index.php/introduction>

5.10 Kien Thanh Agricultural & Services Cooperative

いわゆる農協である。いくつかの説明や質問を通してわかったことは、大部分を日本の農協のシステムを参考にしているということである。最初は少人数で発足したこの組織は、順調にメンバーを増やし、今では大規模な組織となっている。加入している農家がドローンや農耕用の大型機械を導入したい時、その費用の何割かを農協が負担することによって、多くの農家が初期投資の大きい設備を導入することができる。「農協の活動に国家権力はどのぐらい影響を与えますか？」という質問もしたら、「農協の加入は強制ではなく任意なので、メンバーは自由に脱退することができます。」ということだった。どちらにせよ、加入していない農家と、加入してドローンや重機械、肥料を使って効率的に高品質な作物を大量に生産できる農家には大きな格差が生まれ、もはや加入していなければ

事実上農家が続けられなくなる、ということは十分に考えられる。そして逆に、大規模で収益性の高い農家は、農協への加入に消極的であるという話もあった。

実際のドローンは思ったよりも大きい。農家の人は裸足で、現代的とは言えない格好で、最新のドローンを操る。アンバランスに農耕用の牛とドローンが同時に存在する農業形態は非常に奇妙だった。日本だったら靴をスキップしてドローンを買うことは絶対に起こらない。生産力を上げるためなら、使ったことのない最新の道具も進んで導入するという、ベトナム農家の適応力の高さと意欲は、日本も見習うべきだ。ドローンはどこから持ってきた古くて安いものを使っているのかと思ったら、この後に展示会でも見かけた最新のものと同じだった。



最新のドローンのコントローラーを持つ裸足の農家



農業用のドローン



農協

5.11 Khu Bao ton Lung Ngoc Hoang Nature Reserve, Phung Hiep (自然保護区)

次にルンゴック・ホアンの湿地保護区域を訪れた。この区域はハウザン省により管理された2800haある自然保護区である。3区域(重点保護：生態復元区：行政サービス区)の区分けが保護のための緩衝帯として機能し、申請なしには行政でさえ部外者は入ることができない。今回はエコツーリストや観光で知られる周回ツアーに参加させていただいた。かなりのスピードと風で気持ちよかったが、奥に進むにつれ生い茂るマングローブ帯と浮遊する藻や流木が増え少し恐怖心も覚えた。道中にすれ違った船に乗る現地民二人組は、Can先生の説明によると川に浮いているネズミを集めて売っているそうだ。



クルーズの様子



水面には藻や流木



大量のピンクの謎の虫



物見塔からみた景色

ツアー終盤ではピンク色の物見櫓に登り、一面の眺望を楽しんだ。一様な風景に対して、向かうべき方向が分かるように周りの木々より高くなっているようだ。市街地の雰囲気と打って変わってメコンデルタの壮大で平らに広がる緑の絶景にとっても感動した一方で、厳重な保護が加えなければならない状況に危機感を覚えた。

参考文献

1. <https://fme.travel/lung-ngoc-hoang-nature-reserve/>

5.12 Tiền Giang省My Tho市 Chua Vinh Trang (永長寺)

ミトー市では永長寺という1849年設立の仏教寺院に訪れた。1907年にはフランスの影響を受けてコロニアル調の華やかな装飾が彫刻やタイルに施され、さながらヨーロッパ宮殿のような雰囲気を醸し出す現在の姿に改築された。仏教寺院ではあるが、日本のものとは異なり中国・フランス様式の建築様式を用いており外装が派手と言えるであろう。見学できる時間は6時半から19時半である。

敷地内には台座に座っていたり横たわっていたりする数多くの白く巨大な仏像が並んでおり、また本堂には60体もの仏像が並んでいるため大変見応えのある寺院である。広大な敷地内の建物のほぼ全てで中に入ることができるため、観光の際には時間に余裕を持って訪れることをおすすめしたい。個人的にも綺麗でどこをとっても写真映えする寺院だと感じ、写真を撮る手が止まらなかったものでぜひ訪れてみてほしい。また建物内の仏像の後光が電飾なものも面白く感じた。

ミトー観光の目玉である日帰りメコン川クルーズの立ち寄り先となっているため、観光客が多く立ち寄る場所ともなっている。



メインの寺院



様々な仏像や特徴的な建物



建物内の仏像

参考文献

1. https://www.jtb.co.jp/kaigai_guide/asia/socialist_republic_of_viet_nam/XTW/120431/
2. <https://ameblo.jp/vamikomon/entry-12861431648.html>
3. <https://travel.asean.or.jp/vietnam/2789/>

5.13 AGRITECHNICA ASIA VIETNAM

AGRITECHNICA ASIAは、最新農機具・技術の展示会AGRITECHNICA（ドイツ隔年開催）からスピンオフしたアジアにフォーカスした展示会。同展示会には世界25か国・地域から企業200社が参加し、多くの関係者や学者、企業広報で賑わう。今年度よりタイ・バンコクとベトナム・ホーチミンの隔年開催となり、そのホーチミン開催一年目初日を訪れた。出展カテゴリは、トラクターや耕運機、灌水・排水・収穫用コンバイン・梱包機・刈取り機、土壌改良具、農薬散布用ドローンやスペアパーツ/システム&コンポーネントなど。ベトナムは急速に成長する経済と政府の農業機械化開発計画により、海外の農業機械メーカーにとって大きな可能性を秘め、市場や議論の場として益々注目されることになるだろう。

特に印象的だったのは各企業の散布ドローン展示だった。特にXAG社(韓国)ブースには日本語が話せるスタッフがいて、その方に展示を紹介してもらった。敷地の大きさに応じた積載量で選べるサイズ展開や、全て折りたたみ式で明快な操作が可能など、実用化レベルの技術力でとても見応えがあった。一方、ドローンに関してはどの企業も部位ごとの材質や機構は類似しており、一見差別化が図るのが難しいように思えた。

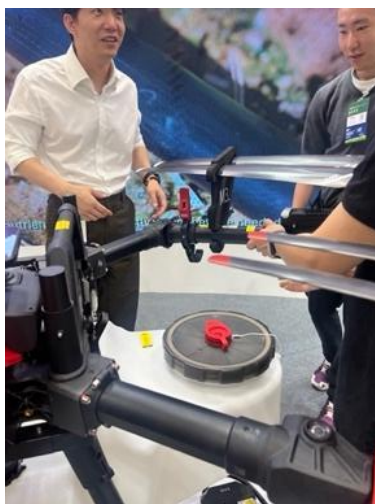
また、日本関連企業から出展していたのは北海道合同企業とYANMERのみであり、同じアジア圏の韓国・中国と比べても活気がなく、少し危機感を覚えた。



場内の各ブースの様子



韓国企業XAGからドローンの説明を受ける



別企業の大量のドローン用部品展示

参考文献

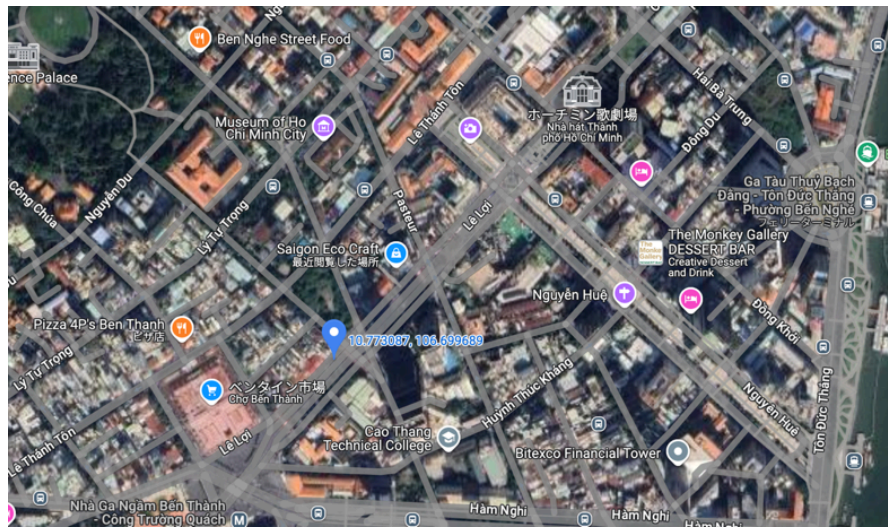
1. <https://www.agritechnica.com/en/>
2. <https://www.jetro.go.jp/j-messe/tradefair/detail/140242>

5.14 市内フィールドワーク③_ホーチミン市内100台バイク調査

ベトナム中心市街地の特徴的な光景として、混雑するバイク交通がある。車道いっぱいに車線関係なく、自動車もお構いなしに進むバイクたちからは、ベトナムの自由さと独特な発展の様子が窺える。今回は、ホーチミン市・ベントイン市場沿いの大通りを走るバイクの様子を定点で20秒間撮影し、通り過ぎる台数と属性を整理した。またその結果から、ベトナムのバイク交通にまつわる種々の考察を試みた。

撮影場所：ホーチミン市 ベントイン市場近くのLe Loi通り

時間：1回目19:43 2回目20:03 からの20秒間



撮影地点(青でプロットされている地点) Google mapより



1回目の観察の様子



2回目の観察の様子

結果は以下の通りである。

	総通過台数[台]	相乗り人数		
		1人乗り[台]	2人乗り[台]	3人乗り[台]
1回目	52	30(3)	22(3)	0
2回目	46	36(3)	7(5)	3

表. 総通過台数と相乗り人数の内訳 ()内はバイクタクシーの数

20秒間(一般にLe Loi通りで信号が変わるまでの時間)で48台前後が通過し、概算ではあるが、ホーチミンの中心であるLe Loi通りでは約40秒に100台通過すると言える。

1人乗りのバイクタクシー率は概ね1割、2人乗りは傾向が掴めない結果となった。2人乗りの差は、1回目は上り線、2回目の撮影は下り線の撮影であったため、夜時間帯を考えると帰宅に利用する層が多かったためと考えることもできる。3人乗りは全て夫婦と5歳未満の小さい子供を乗せたもので、危険性はさておき家族移動にも広くバイクが使われていることが読み取れた。

6. Expert Lecture

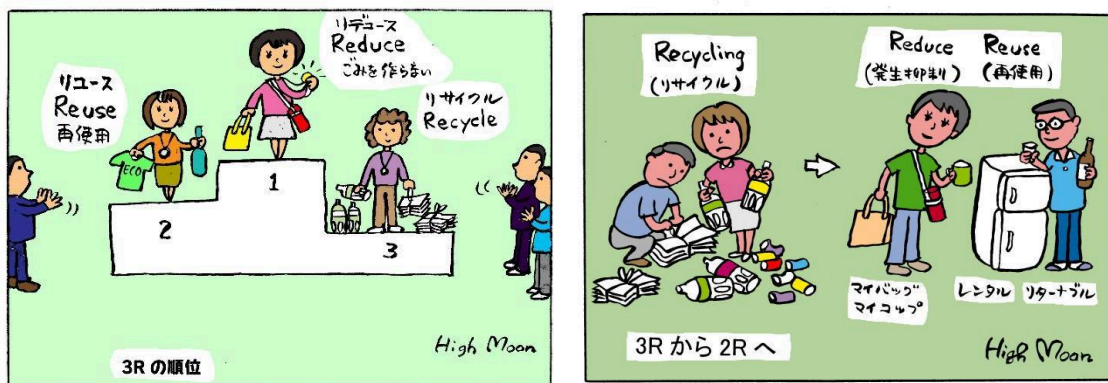
6.1 村上先生の講義

事前学習で村上先生から日本の廃棄物についての講義を受けた。人が生活していくにあたってゴミの処理が問題になるのは当たり前だと思っていたが、ゴミが問題視されるようになったのは最近のことだと知り衝撃を受けた。昔は生活で不要となったものはそのまま川に流したり、空き地に捨てたりしていたが、人口増加、ゴミの材質の多様化などからゴミを「処理」する必要が出てきたと知り、ゴミの問題は最近の課題なのだと認識を改めることができた。

よく耳にする「3R」の中で取り組むべき優先順位はReduce、Reuse、Recycleの順であり、まずはそもそもゴミを作らないということが大事である。ゴミの元の量が増え続けてしまったら、いくらリサイクルをしようと努力しても追い付かず結果が出ない。ゴミをどう処理するかではなくゴミをどう出さないようにするかを考えていく必要がある。また、最近では3Rから2R (Reduce、Reuse) に変わりつつあるのも同じ考えでゴミを出さない取り組みである。

日本では廃棄物対策として細かく法律が定められている。物品や素材ごとに取り決められた、どのようにリサイクルするかを法律や3R全般にわたる計画の法律などがある。特にプラスチックごみに関する規制を強化していて、プラスチックごみをそもそも減らす、リサイクルしやすいプラスチックを使用する、分別回収を促進させるといった内容である。

ここ数年日本ではレジ袋が有料化されたり、プラスチックストローが廃止されたり、「プラスチックごみを出さない」という取り組みが進んでいるように感じる。今後も続けていけば必ずゴミの量を減らしていくことができると思うので、まずは「そもそもゴミを出さないようにする」という意識を持ち続けていきたい。



3Rの順番、3Rから2Rへ取り組みのイメージ図(村上先生の講義資料より)

6.2 農機具(坂田正三氏の講義)

留学の約2か月前、私たちは事前学習として農機具について詳しいアジア経済研究所の坂田正三氏にお話を伺うことができた。

この講義によって、私たちは科学技術が受容されるプロセスに始まり、ベトナムを中心とした東南アジアの農業の実態を学ぶことができた。特に、技術を導入する場合外部のサービス(技術の使い方、壊れた時の対処法などを教えてくれるサービス)がないと技術は普及しない、というお話は心に残っている。なぜならば、私は理系学生として常に先端技術に対する憧れの念を抱き勉学に励んでいるが、その技術の浸透方法を考えたことがなく、新鮮だったからだ。確かに考えてみれば、技術だけ存在してもそれが広く普及するためには、人々が技術に対する基本的知識を持っていなければならない。

また、ベトナムでは「枯れた」技術が使われ続けている、というお話もとても興味深かった。実は東南アジアでは、日本の1930から1950年代に生み出された技術、つまり「枯れた」技術が今も使われ続けている。また、日本の農業用器具を改造したり、全く違う用途で使用したりもしている。そしてその改造を生業とする人々も存在するのだ。これは、私たちの感覚では想像しがたいが、ベトナムと日本の農業の違いに注目すると理解できる。日本は高品種のコメの生産を進めているが、ベトナムでは質より量を重視している。そのため、日本の農業機械はベトナムのニーズには完全に一致はしないのだろう。このように、ただ先端の科学技術を与えるだけでは支援されている国のためにならないこともあるのだ。きちんとその地域のニーズをとらえ、何を目的として行っているのかきちんと考えることが必要なのだなとおもった。

また、ベトナムでは日本の農業器具の改造を行っていると聞いて、そのことが原因による事故は増えているのだろうか、とふと疑問に思った。そこで坂田さんに質問したところ、厳密に調査している事実や結果は見たことがない、とのことだったが可能性はあるとのことだった。また、この改造の問題となるのは中古品のPL責任(Producer Liability)の所在がはっきりしないことだという。先進国ではこの責任は製造企業が負うという法律があるが、中古品はその限りではない。ましてや開発途上国ではそのような法律さえ存在しないことが多い。このようにトラブルの責任の所在があいまいな国に投資することは難しく、これは国の工業化に大きな影響を与えている。私はこの話を聞いてますますニーズの明確化が重要であると思った。確かにニーズを明確化することで個別化が進み大量生産は難しくなるかもしれない。しかしこのようなことが原因で発生する事故はあってはならないことである。市場拡大の可能性も十分にあるのだからそれぞれの地域にあった農機具

がもっと開発されていくべきだと思った。

6.3 カン先生によるベトナム南部の農業について

3月11日、カントー大学にてカン先生から「メコンデルタ地域における稲作の変遷」という講義を受けた。メコンデルタ地域がベトナム有数の穀倉地帯であることは事前学習で理解していたが、今回の講義では、コメの生産量がどのように増加してきたのか、地域ごとに育てられている主な農作物、そして農業の機械化の現状について、具体的かつ詳細な説明を受けた。

まず、コメの生産量増加の背景には、ベトナム政府によるドイモイ政策によってコメの生産・販売が自由化されたことが挙げられる。さらに、“3 Reductions 3 Gains” や “1 Must 5 Reductions” といった生産性と品質の向上を目的とした施策や、VietGAP・GlobalGAPといった農産物の安全基準の導入も、生産拡大に大きく貢献している。

一方で、コメの栽培に適さない地域では、エビの養殖やパイナップル、サトウキビといった他の作物への転作が進められているという。こうした動きにより、地域の環境条件に応じた多様な農業が実践されていることがわかった。

また、2012年以降、コメの総生産量はおおむね2400から500万トンで推移しているものの、田んぼの面積は減少傾向にあり、結果として生産効率が向上している。具体的には、1990年から2023年の間で、1ヘクタールあたりの収穫量が平均で約2.2%上昇しているとの説明を受けた。

農業の機械化については、田起こし、播種、除草剤の散布、収穫といったすべての工程で高い割合で機械が導入されており、メコンデルタ地域の農業が急速に近代化している様子がうかがえた。ただし、播種に関しては機械化率が75%と他の工程に比べて最も低く、その理由としては種をそのまま田んぼに手でばらまく方法が一定数残っているためだという。

なお、生産効率の向上にもかかわらず、農家の収入が必ずしも増えていないという課題もある。これは、市場が不安定で、販売価格が低く抑えられてしまうことが要因であると説明を受けた。



カン先生の講義

今回の講義を通じて、メコンデルタ地域の稲作は、単なる大量生産ではなく、政策・技術・環境の変化に応じて柔軟に発展してきたことを実感した。しかし、生産性が向上しても農家の収入が安定しないという現実から、農業における経済的な脆弱さや構造的な課題が浮き彫りになり、今まであまり意識してこなかった農業のあり方について深く考えさせ

られた。

6.4 ホーチミン工科大学環境天然資源学部 Vo Thanh Hang 先生の講義

3/13にホーチミン工科大学環境天然資源学部のHang先生からベトナムの廃棄物に関する講義を受けた。

その中でベトナムでは2025年1月1日より、家庭ごみをリサイクル可能なもの、食品ごみ、その他、の3つのカテゴリーに分けることが義務付ける法律が施行された。しかし現状、ゴミを分別するという習慣がなかった人々がいきなり分別できるようになるとは考えにくく、分別は進んでいない。今後それをどう改善するかが課題となっている、という話があった。

実際、留学中ゴミ箱が生ごみとそれ以外に分かれて置かれていても、生ごみのところにペットボトルや紙が捨てられていたり、ベトナムの学生に聞いても家でゴミを分別していないと言っていたりゴミの分別に対する意識が低いと感じる場面があった。しかし意識を変えるというのはそう簡単なものではないので、根気よく長い目で見て、様々な方面から働きかけをする必要があると思った。また、ベトナムの人々はゴミを分別しないのはよくないことだと分かっているながらも、現状できていないという理想と現実のギャップがあると思った。意識だけでなくどう行動を起こしていくべきか示す必要もあると感じた。

そもそも、ベトナムではまだ使えそうなものもすぐに捨てている印象を受けたので日本で近年行われている「ゴミをださない」という取り組みも、分別ができるようになったら進めていくべきだと感じた。



ハン先生の講義



生ごみのゴミ箱にペットボトルや紙が捨てられている

6.5 VECA (Ve chai cong nghe) (ホーチミン工科大学)

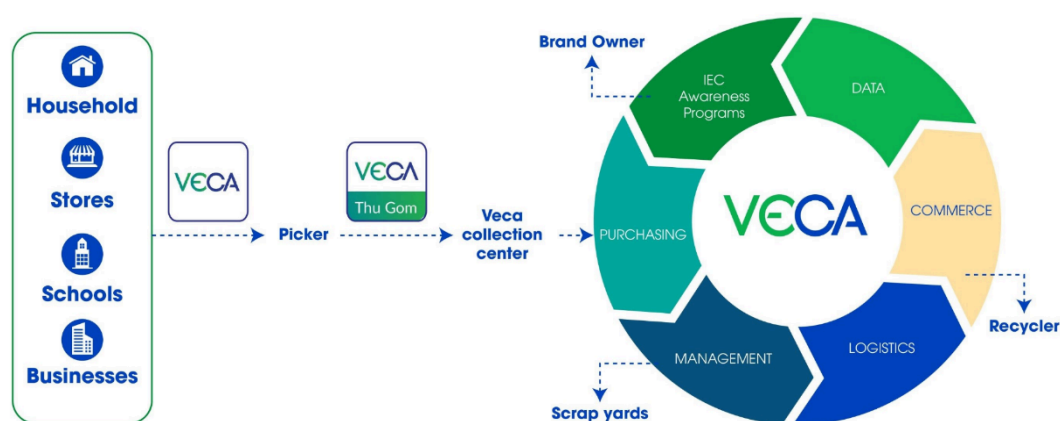
ホーチミン工科大学にてVECAの方から、“VECA model - The chain of 3R of the circular economy” の講演を聞いた。VECAは、ベトナム国内のスクラップ市場とリサイクル業者をデジタルでつなぎ、リサイクルの効率化と環境負荷の軽減を目指す企業である。

ベトナムには「Ve Chai」と呼ばれる伝統的なリサイクル業者が存在し、彼らが各家庭や事業所から回収した廃棄物をリサイクル業者へ供給する仕組みが長らく機能していた。しかし、このリサイクルの流れは非公式なものが多く、効率的な資源循環が妨げられることもあった。実際にベトナム国内で過ごしているときに、ペットボトルが大量に入った袋をバイクで運ぶ人を何度か見かけたが、手作業で効率が悪そうだと感じた。また、それら

の人々が回収に回る家は限られており、その他の家ではごみの分別をしても回収をしてくれる人がいないという現状があるという。VECAはこの課題を解決するため、廃棄物の適正な回収と再利用を促進するデジタルプラットフォームを提供している。スマートフォンアプリを通じて、住民や企業は廃棄物の回収を依頼でき、リサイクル業者は効率的に資源を確保することが可能になる。また、ジャンクショップのオーナー向けに研修プログラムを提供し、リサイクル業界の専門知識を持つ人材の育成にも取り組んでいる。

ベトナムでは、廃棄物の分別が進められているが、規制が整備されつつある段階である。VECAは、アプリを活用して規定に基づいたリサイクルの普及を促進し、より効率的なリサイクルを実現している。VECAはまた、Grabと同様のプラットフォームを活用し、廃棄物回収のプロセスをさらにデジタル化し、広く参加を促進している。

私は、ごみの回収は行政が整備し、一括管理すべきものだと考えていた。しかし、ベトナムではそれを一般の人々がビジネスとして担っていることに驚いた。将来的には日本のように一括管理されるのか、それとも独自の形で発展していくのか、今後のベトナム社会の変化が楽しみだと感じた。



「VECA ビジネスモデル」 VECAのホームページより

7. 学生交流及びグループワーク

7.1 ハノイ工科大学

3月6日、ハノイ国際空港に到着してすぐに向かったのは、ハノイ工科大学だった。1956年に設立されたベトナム初の工学専門大学で、現在は約35000人の学生が在籍している。今回はその中でも「English for Science and Technology」を専攻する約30人の学生たちと交流する機会があった。私たちが教室に入ると、ハノイ工科大学の学生たちは一斉に大きな声で「こんにちは！」と元気に挨拶してくれた。その後、ハノイ工科大学の学生3~4人と東京科学大学の学生1人で、合計9グループに分かれて自己紹介をし、日本とベトナムの違いや共通点について話し合った。交流の中で突然、学生たちがベトナムで有名な曲「Sau tát cả」を歌い始め、途中からは全員でライトを使ってウェーブを作った。最初はびっくりしたが、最終的には温かく和やかな雰囲気になった。その後、「ドラえもん」の曲をみんなで歌ったが、歌詞がローマ字で書いてあったので全員で歌うことができた。教室での交流が終わった後には、多くの学生たちから「一緒に写真を撮ろう!」「インスタを交換しよう!」「明日、一緒に夕飯を食べよう!」など、さまざまな声をかけても

らった。

そして翌日、3月7日には前日に交流した学生たちと一緒に夕食に出かけた。その後、カラオケにも行き、「カンナムスタイル」や「FANTASTIC BABY」など、どちらの国の学生も知っている曲を一緒に歌い、盛り上がった。前日の教室でもカラオケをし、この時もカラオケをして、カラオケが好きなんだなあ、と感じた。別れた後も連絡を取り合い、お互いが今どこにいるのか、ベトナムで挑戦してみるべき料理など、さまざまな話題で盛り上がった。

わずか数時間の交流ではあったが、それでも非常に深いつながりを感じることができた。特に印象的だったのは、ハノイ工科大学の学生たちの明るさと活発さである。日本の文化に強い関心を持ち、積極的に質問をしてくれた一方で、自国の文化についても熱心に語ってくれた。異文化を尊重し、前向きに交流を楽しむ姿勢が非常に印象的だった。



教室での交流の様子



教室での交流後の全体写真



教室でのカラオケの様子

参考文献

1. [https://www.jetro.go.jp/ext_images/ Reports/02/2023/3ea450db1fe01b35/Vietnam_ITUniversity.pdf](https://www.jetro.go.jp/ext_images/Reports/02/2023/3ea450db1fe01b35/Vietnam_ITUniversity.pdf)

7.2 ホーチミン工科大学

○ホーチミン工科大学について

ホーチミン工科大学はホーチミン市街地南部に位置する工科大学である。学生数は約23000人、教員数は約600人である。1957年に創立され2001年に現在の名称へと改称された。世界157の大学と連携をされていて、日本の大学とは22校と連携がある。また、大学間交流だけでなく、日本企業のインターンの受け入れや採用も盛んである。学部は12学部あり日本の大学と比べ、環境や土木、資源系の学部が多いという特徴がある。

○事前のオンライン学習

渡航前にホーチミン工科大学の学生との事前オンライン交流があった。この交流ではお互いの自己紹介や互いの国についての印象や特徴を話し合った。自分のグループでは日本人2名、現地学生2名の4人で交流を行った。現地学生の生徒が積極的に話しかけてくれたことでたくさんの意見交換ができた。日本人側からはちいかわを紹介し、それに現地学生がすごく食いついてくれたことが印象的だった。現地学生からはベトナムのおすすめのコーヒーショップを教えてもらい、実際に現地に行った際はそこを訪れることが出来た。オンライン交流会後は連絡先を交換し、現地に行き会えるまで頻繁に連絡を取り合った。飼っている猫や犬の話から将来のキャリアビジョンまでたくさんのコミュニケーションを取ることができ、実際にあったからの交流がスムーズに進められてよかった。

○キャンパスの様子

ホーチミン工科大学のキャンパスはとても大きい印象を受けた。各教室もきれいで学習環境としては申し分ないなと感じた。研究室については私が所属している機械系の研究室と違ってたくさんの研究室が一か所に集まっており、横の連携がとりやすそうだなと感じた。



研究室の様子

○学生交流全般について

ホーチミン工科大学の学生たちとの交流は基本的にグループごとに行うことが多かったが、全体での交流も少しあった。全体での交流はみんなでゲームを行った。グループ対抗でクイズを出し合ったり、フルーツバスケットに近いようなゲームを行ったりした。どれも英語で行われたが、ゲームということもあって細かいニュアンスが伝わらない時でもみんなで楽しくコミュニケーションを取れた。

週末はグループごとにホーチミンの街を観光したり、グループワーク課題をこなしたりした。現地の学生に案内してもらったことで有名な観光どころはもちろん、地元の人間しかわからないような場所に連れて行ってもらえることも多く、旅行者として訪れるよりもずっと濃い経験ができた。



学生交流の様子①



学生交流の様子②
(現地観光)



現地学生からの贈り物



学生交流の様子③(クイズ大会)

ホーチミン工科大学最終発表の様子

5つグループ各グループがそれぞれのグループワークを経て素晴らしい発表を行うことが出来た。

1班は発表の途中におしゃれに編集されたムービーを流し、とても見やすく聞きやすいプレゼンを行っていた。2班はユーモアのあるショート動画と端的なスライドによる簡潔でわかりやすい発表を行っていた。3班はエビに着目した案を出し、文献に基づくデータを出しながらその画期的なアイデアと信頼性で見事優勝を勝ちとった。4班は当日の人数が二人になってしまった中、二人が各自のパートをまっとうし素晴らしいパフォーマンスを見せた。5班はアルミ缶をヒーターにDIYするという画期的なアイデアで実際にヒーターを作るという興味深い内容であった。

各班が各々に各自の役割をまっとうし自信をもってプレゼンを実行することが出来ていた。結果発表後は各グループ、やり切った顔をして全員で記念撮影をすることができた。



全体の集合写真

7.3 ホーチミン工科大グループワーク

7.3.1 グループ1 西村

私たちのグループは、世界中で大量に捨てられている古着の問題に着目し、このテーマについて発表を行った。近、ファッション業界では「大量生産・大量消費」の傾向が強まっており、それに伴って短期間で不要とされた衣類が次々と廃棄されている。

この問題は日本でも深刻であり、毎年多くの服が販売される一方で、その多くが十分に使われないまま捨てられているのが現状である。リサイクルやリユースの仕組みは存在しているものの、実際には多くの衣類がそのまま焼却されており、資源の無駄遣いや環境負荷の増加を招いている。こうした現状について、グループのメンバーと共有し問題意識を深めた。

グループワークを通じて、日本の状況と比較する形で、ベトナムでは古着を修繕して再利用する文化的な傾向があるという話も出た。特に親世代では、服を修繕して長く使うことが当たり前とされており、物を大切にする姿勢から学べる点が多いと感じた。しかし、特に若い世代では、新しい服を次々と購入し、古いものはそのまま捨ててしまう傾向があるとのことだった。これは日本とも共通する部分であり、「リサイクルや再利用が大切」という一般論を理解していても、実際にそれを行動に移すかどうかは別の問題であると実感した。

こうした背景を踏まえて、私たちは、使われなくなった服を単に廃棄するのではなく、リサイクルやアップサイクルを通じて新たな価値を持つ製品に生まれ変わらせることが重要だと考えた。たとえば古着の布を活用して、バッグやポーチなどの小物を手作りするこ

とで、個性ある一点ものとして再利用することができる。こうした取り組みは環境保護に貢献するだけでなく、縫製技術を持つ人々の雇用機会の創出にもつながる可能性がある。

しかし、リサイクルやアップサイクルにも限界があるため、グループの議論の中では、「そもそも新しく作る服の数そのものを減らすことが、最も効果的な解決策なのではないか」という意見も出た。新たな生産を抑えることが一番手っ取り早く、根本的な対策になるという考え方である。ただし、それはファッション業界全体の仕組みや消費者の価値観にも関わるため、現実的には簡単なことではないという点も共有された。そのため、プレゼンではこの点に深く触れることはできなかったが、「生産を減らすべきだ」という理想と、「それをどう実現するか」という現実のギャップについても考える必要があると感じた。



グループメンバーの写真

7.3.2 グループ2 宮武 長谷川

私は2班のグループワークの様子を紹介する。2班はペットボトルを道路修復に使用するコンクリートに再利用できるということを紹介し、それを促進させるためのショート動画の作成とスライドによるプレゼンを行った。この案は同じメンバーに提案を行い、私がブラッシュアップし、ホーチミン工科大のメンバーがスクリプトや動画の作成を行ってくれ、完成することができた。この案にまとまるまでにはベトナムのメンバーからゴミをアート作品に再利用するといった意見や、日本側からたばこの吸い殻を再利用するといった意見がそれぞれ出た。結果的に、実際に道路を歩いてみて感じた道路補修の必要性にベトナムメンバーも賛同してくれて今回の発表にまとめることが出来た。発表においても各自が役割分担してパートを決め全員で協力して最後までやり遂げることができた。

私たちが作成したショート動画は、飲みほしたペットボトルを道路の崩れた箇所扔到、押し込んでいる様子を逆再生して道路からペットボトルが出てくるといったようになるように演出をした。ペットボトルが道路補修に利用できるということを示唆すると同時に逆再生という注意をひく形でのショート動画にすることができた。

ショート動画を作成した分、スライドは短く端的にという方向性で作成し、キーワードを中心に載せて口頭で説明をするという形をとった。しかし今回の発表においてはもう少しリサイクルにおける技術的な少し細かめの内容もプレゼン内であるとよりよかったという意見をいただき、発表で求められる内容のバランスを考えることの大切さを感じた。

今回のグループワークを通じて、他メンバーのユーモアのあるアイデアを出す力とそれ

を形にする実行力を目の当たりにし、リスペクトを強く感じた。



グループ2話し合いの様子



グループ2プレゼンの様子

7.3.3 グループ3 真鍋 浜岸

グループ3は、はじめ少しお互い様子を伺い静かだったものの、徐々に打ち解けることができた、静かに闘志を燃やすグループだった。

プレゼンでは、エビの殻のアップサイクルに着目したバイオプラスチックの提案を行った。

主に私たち日本学生からは、日越両方の消費量のデータの提示から現状の統計的な消費の実態を、ホーチミン工科大学の学生からは、彼らが学部授業や外部コンペティションで培ったキチンを用いた化学的なリサイクル理論の導入を提案してくれた。さらに直接個人レベルから意識改革を強引に目指すのではなく、あえてシーフードレストランと集中的に連携し市民に広めていくという事業スキームの提案を共にすり合わせ、結果提案としてまとめることができた。

文献引用や基本的な部分の見落としがあったものの、環境課題に対するバランスの良いアプローチと解決策を提示することができ、ありがたい事に1等をいただいた。

休日はHuie君の自動車に乗せてもらい、タンディン教会や空港近くのショッピングモールを訪れ、ちょっと豪華なホーチミン学生の休日を体験することができた。2人は経済の授業やテストを控えていたものの、長い時間を私たちと交流していただき、率先して進めてくれた。楽しい時間をとても感謝している。



大学近くの屋台で合同ご飯



自己紹介の様子



GWプレゼンの表彰式

7.3.4 グループ4 關川 若尾

我々のグループのメンバーは日本人学生2名と、大学卒業後日本で働く予定の、ホーチミン工科大学学部4年生2名の計4名だった。2名とも日本で働きたいということもあって日本語がペラペラで4人で会話するときは英語と日本語を交えて会話した。

我々のグループは使用済み乾電池の回収システムに焦点を当てた。日本の家電量販店などにもある乾電池回収ボックスを改良し、無人でも回収可能で乾電池を入れるとリターンとしてガチャガチャが回せるようにした。また、設置場所は学校やスーパーなど乾電池の消費が多い場所や乾電池を購入する場所にした。

我々日本人からは回収ボックスを乾電池を買ったり消費したりする場所に設置すること、ガチャガチャシステム、乾電池の分類方法について紹介した。ベトナムの2人からはベトナムでの乾電池の捨て方に対する問題提起や似たような事例についての紹介があった。異なる文化の人たちによるグループワークは、自分にはないアイデアや知識が得られとても興味深かった。

グループワークを行う中でベトナムと日本の違いや共通点について話すことができ、とても有意義な時間だった。また、これほど長期間、同じ外国の人と話す機会は初めてだったので、朝ごはんの内容から他国についてそれぞれどのような印象を持っているかまで本当に様々なことを話すことができ、ベトナムという国だけでなく、お二人についても詳しく知ることができた。



提案した回収マシーン



週末に観光したときのグループショット

7.3.5 グループ5 鈴木 山中

グループ5はこれまでのリサイクルの過程にDIYを挟むことで、既存のサイクルにプラスして価値を生み出すことができるのではないかと、という発想で無駄なエネルギーとプラスチックを減らすことをメインテーマとした。このアイデアは、例として用いたアルミ缶のように、リサイクルすることで再び同じ製品にすることができるものに対してとりわけ効果を発揮する。アルミ缶はリサイクルすることでアルミ缶にすることができる。アルミ缶を用いてDIYをして、何か買うはずだった商品を買わずに済ませ、使い終わった残りは、アルミ缶としてリサイクルするのである。今回はこのプロセスを紹介するとともに、具体的なDIYの例としてアルミ缶ストーブを実際に製作し、プレゼンテーションの時に実物を紹介した。DIYのメリットはたくさんある。買うはずだったものを買わずに済ませることで多くの無駄を減らすことができる。製品を購入するとその輸送費、包装用プラスチック、工業用のゴミをなくすることができる。

グループワークの流れとしては、メンバーのうちの一人が持っていた、アルミ缶で缶ストーブを作ることができる、という知識から、それをどのようにして、ゴミを減らすことにつなげるのかということ考えた。アルミ缶ストーブだけに注目するのでは、あまりに局所的すぎる、という意見から、DIYという大きな概念に拡張した。どのようにしてゴミが減るのかという内容と、実際のアルミ缶ストーブ製作を日本側が行い、スライドの編集とプレゼン発表はベトナム側が行った。



アルミ缶ストーブ



メンバーの写真

7.4 グリニッジベトナムワークショップ

3月14日の午後、イギリスのグリニッジ大学ベトナム・ホーチミン校にて、ごみ箱をデザインするワークショップが開催された。最初に、村上先生による「ベトナムにおけるごみ問題」に関する講義を受けた。講義では、ベトナムが抱えるさまざまなごみ問題の一つとして、「ごみを出す人が分別をせず、すべてのごみを同じごみ箱に捨ててしまう」という課題が挙げられた。例えば、日本ではごみの分別を促すために、ごみの種類ごとに異なる色のごみ箱を使用していることが紹介された。このような工夫を参考に、「正しく分別できるごみ箱を考える」というテーマが各グループに与えられた。

グループ構成は、グリニッジ大学ベトナム校のデザイン学科の学生が2から3人、東京科学大学の学生が1人、ホーチミン工科大学の学生が1人で、1チームあたり4から5人となり、全体で8グループが編成された。

各グループには90分間のデザイン作業時間が与えられたが、最初のアイデアをまとめる段階で多くの時間を要し、あっという間に時間が過ぎてしまった。ワークショップの最後には、各チームが自分たちのデザイン案を全体の前で発表し、活発な意見交換が行われた。



グループワークの様子



発表の様子



全体の集合写真

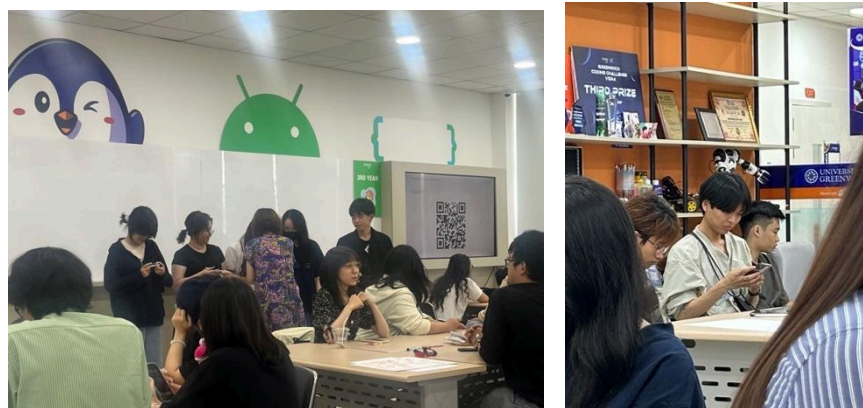
7.4.1 グループ1 真鍋

当グループワークでは、グリニッジ大のデザイン系当日参加学生、ホーチミン工科大の環境工学系交流学生、そして我々工学系の科学大生が集まり、知恵と知識を持ち寄って革新的なゴミ箱のデザインを行うことを目的としていた。簡単な自己紹介から始まり、テーマ設定と課題把握から解決策の提案、デザインと発表までを短時間で行った今回は非常にタフだったが、初対面で英語での抽象的な議論に少しづつなれることができ、発表までできたことが個人的に嬉しかった。

事前にホーチミン工科大で分別を考える課題のキックオフがあったものの、ゴミ分別の実態や時間帯が地域によって本当にバラバラで、大学間で会話が噛み合わなかったり問題点の前提が共有できなかったり、正直議論はかなり難航していた。しかし、グリニッジ大

の学生2人が一つ一つ整理して書いてくれて、必死に自分の拙い英語の意図を紙や絵で伝え合うことができ、全員が共通の提案をまとめられたと思う。

グループワークを通して、分別という市民の行為にデザインが与えられる変化の可能性がもっと考え出せたら良いなと思った。現地学生と話していても、どこか彼らには「ベトナムの市民個人の分別を完璧にさせることはほとんど無理だよ」という諦観が感じられた。確かにあの自由さと既にある慣習の定着さ、拘束力の低さを見るとそう思うのも無理はないと思うが、その個人個人が持つ真面目さをどうにか良い方向に向けられないかと悶々と思っていた。単純な報酬の与え方ではなく、ベトナムの国民性や根付いた生活習慣を、変えることなくむしろ地域資源として利用するようなアプローチを編み出すことができればと思う。議論では、ベトナムの若者に対しゴミ箱に写真を取れる機能があたり、外食文化から飲食店の周りにおいたりとなんとかアイデアを出してはみたが、英語の壁や専攻・考え方の違いもあり中々意見がまとまらなかったのも思い出である。もう一步インパクトがあって夢がある提案が思いつけたらもっと良かっただろう。各分野の学生が集まった環境デザインの議論として、現実性かインパクトか、どの方向性を大切にするかのスタンスの共有が肝要なのだと身をもって感じた。



グリニッジ大GWプレゼンの表彰と筆者グループの様子

7.4.2 グループ2 若尾

私はグリニッジ大学との共同プログラムにおいて、分別をゴミ箱の見た目を工夫することで促進する取り組みをチームで提案した。

現地の学生とゴミ問題について意見交換を行う機会を得たことで、彼らの環境意識や発想力の高さを実感することができた。当初は、提案される内容としては、せいぜいゴミ箱の数を増やす、色分けや分別のルールを徹底するといった、基本的で実践的な施策にとどまると予想していた。しかし実際には、彼らの多くがAIやIoTといった先端技術を活用したソリューションを提案しており、その革新性と意欲の高さに驚かされた。こうした発想の背景には、ゴミ問題を一過性の課題ではなく、深刻で長期的な社会問題として認識している姿勢があることがうかがえる。

このイベントは理系学生のみならず、デザイン専攻の学生なども含まれており、学際的な交流の場となっていた。そのため、技術的な実現性にやや乏しいアイデアも見られたが、逆にそれが独創性や創造性を高める要因となっていた。たとえば、リサイクル施設の外観デザインや、ゴミ分別の啓発ポスターの視認性といった視点が取り入れられることで、技術偏重に陥らず、多面的なアプローチが可能となっていた。このような異なる専門性を持つ学生同士の協働が、社会課題の解決においてどれほど重要であるかを再

認識させられた。



グループワークの様子

7.4.3 グループ3 西村

私たちのグループでは、「ごみの分別を的確に行うこと」および「多くの人がごみを捨てたくなるようなデザインを考案すること」を目標に、グループワークに取り組んだ。まず、ベトナムの学生から「音や光で人々の注意を引くことで、ごみ箱の存在に気づいてもらいやすくなるのではないか」という提案があった。私は以前から、ベトナムの人たちは派手な音や光を好む傾向があると感じていたため、その点をベトナムの学生に確認してみたところ、やはりその通りであるとの返答を得た。そこで、私たちのグループでは人がごみ箱に近づいた際に音や光が発せられる仕組みをデザインに取り入れることにした。

また、私（日本側の学生）は「より正確な分別のために、科学技術を活用する方法も考えたい」と提案した。それに対し、別の学生が「磁石を使えば金属類を自動で判別できるのではないか」と意見を出し、さらにAIによる画像認識でごみの種類を識別し、自動で分別するというアイデアも出た。やや実現性に欠ける印象はあるものの、今回はあくまでデザインの段階であるため、グループ全体としてこのアイデアを採用することにした。

グループワークでは、お互い積極的に意見を出し合いながらも、相手の意見にもきちんと耳を傾ける姿勢が見られた。そのおかげで、国や文化の違いを超えて、建設的で前向きな議論を進めることができたと感じている。



グループワークの様子

7.4.4 グループ4 鈴木

3/14の午後、グリニッジ大学を訪問し分別を促進するゴミ箱のデザインを考えるワークショップに参加した。

8個のグループに分かれ、自分以外は全員ベトナムの学生という班であったが、どのようなデザインのゴミ箱が良いかを考えるうちに打ち解けることができた。まず日本とベトナムでのゴミ箱の工夫の特徴を紹介し合い、その良いところを話し合った。そしてベトナムでのゴミの分別を反映させた分別するゴミの種類を決めて、日本でよく見かける色分けされたゴミ箱を作ることになった。また、それに関連して東京工業大学時代にあった授業でゴミ箱をデザインする授業があったので、その授業をとっていた友人の話を思い出しながらゴミ箱の形を工夫することを思いついた。例えば缶だったら缶の形、ペットボトルだったらペットボトルの形、というようにである。それをグループメンバーに伝えたところ、そのアイデアを採用してくれることになった。グリニッチ大学の学生メンバーはデザインを専攻していたので、私の伝えた意図を汲んで、ゴミ箱として使いやすくなおかつわかりやすいゴミ箱をデザインしてくれた。さらに他のメンバーがアプリを開発して管理するというアイデアも出してくれた。

話し合いをしてより良いものを作っていくという経験は日本でもしたことがあったが、ベトナムという国で価値観や文化が異なる国の人とグループワークをする経験は今までになかった観点だったり逆に日本独自であった価値観に気付かされたりする良い経験となった。



グループワークの様子

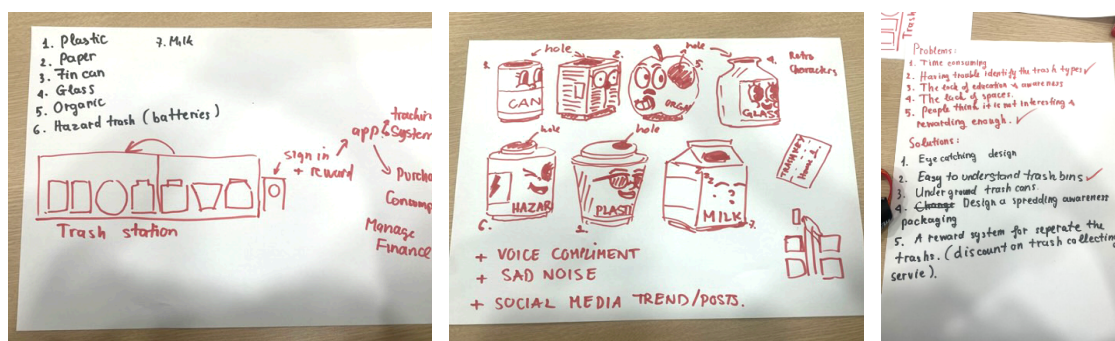
7.4.5 グループ5 浜岸

3月14日の午後グリニッジ大学を訪問し、分別がしやすくなるようなゴミ箱のデザインやシステムを考えるワークショップに参加した。

私のグループは最初はおとなしかったが、徐々に打ち解けることができた。ベトナムの学生がゴミ箱を見た目のかわいいデザインにし、分別できていない時は悲しい声が聞こえるような仕掛けを作るというアイデアを提案してくれた。グリニッジ大学の生徒は大学でデ

デザインを専攻しているらしく、ささっとキュートな絵を描き上げてしまった。また、ゴミ箱の場所を近所の家でまとめて1箇所にし捨てる際カードをタッチするとポイントがたまるというシステムを私が提案したらグループのアイデアとして取り入れてもらえた。そうすることでゴミ捨て場まで歩く必要があり、健康にも良いねとベトナムの学生が言っていて、ベトナムはバイクで家からどこにでも行けるので歩く機会があまりなく、それを気にしているのかなと感じた。

私たちのグループは発表で1位を取ることができた。初対面の人と英語で意見交換をして一つの意見にまとめるという貴重な経験をすることができた。



発表時に使用した資料

7.4.6 グループ6 宮武

Greenwich大学では日本人1人とベトナム人4人とでグループになってゴミの分別を促進するゴミ箱のデザインについて考えた。私のチームはデザイン的な側面と技術的な側面の2つの側面でのアプローチを行った。デザイン的な側面としては人々になじみやすいゴミ箱にするために3つの色分けとその色分けに応じた動物のデザインを取り入れることにした。また、技術的な側面としてはゴミ箱にマグネットを使い、可燃ごみ用ゴミ箱などに金属ゴミを入れるとマグネットがそれをひきつけ、間違ったゴミ箱に入らないようにする仕組みを考えた。私は当初AIカメラを用いたゴミの分別認識を提案していたがマグネットのほうがより安価に簡単に導入できそうだという意見をもらいお互いが納得の上、前述のようにまとまった。

発表は実際にデザインしたゴミ箱を絵にかいて見せながらプレゼンを行った。残念であったのは私が英語に不慣れで発表を現地学生にすべて任せたことである。短時間でのワークショップでもコミュニケーションを十分にはかり、プレゼンまで自分の力でできるよう成長したいと感じた。

最終結果としては表彰していただくことが出来て、最後にはグループメンバーと連絡先を交換することが出来たので総じて楽しく活発な経験となった。



GWの様子①



GWの様子②



発表の様子と提案したデザイン

7.4.7 グループ7 關川

我々の班は、日本人学生1名、ホーチミン工科大学の学生1名、グリニッジ大学の学生3名の計5名で構成された。我々のグループはペットボトルや空き缶などの資源ごみの回収システムに焦点を当てた。

ベトナムでは、資源ごみの分別回収がまだ十分に浸透しておらず、家庭によっては回収業者が来ないこともある。また、回収自体もバイクや小さなトラックで行われるため、効率が悪いという課題があった。そこで、ヨーロッパに留学経験のあるベトナム人学生が、ドイツのペットボトルデポジットシステム「Pfand」を参考にすることを提案。さらに、日本のくら寿司の「びっくらぼん」のような仕組みをヒントに、ベトナムに適した回収システムを考案した。

具体的には、コンビニの近くに回収ボックスを設置し、資源ごみを投入するとポイントがもらえる仕組みを提案した。このポイントは、買い物時の割引や特典と交換できるようにすることで、回収率の向上を図る。また資源ごみの投入量に応じて簡単なゲームができるという遊び心も取り入れた。

最初は、日本人が私一人という状況に少し不安を感じていたが、班のメンバーは私の話に興味を持ち、積極的に議論に参加してくれた。そのおかげで、楽しくプロジェクトを進めることができ、有意義な経験となった。



提案した資源ごみ回収マシーン



グループフォト

7.4.8 グループ8 長谷川

グリニッジ大では「分別したくなるごみ箱」のデザインを考えた。私たちの班では、どうしたら人々が分別したくなるか？の答えをリターンがあることだと考えた。つまり、正しく分別すればポイントやキャッシュの変換があるのだ。また、日本とベトナムの共通のものを探していた時、日本の有名なキャラクターの一つであるドラえもんが話題に上がった。そこでベトナム人学生の一人がごみ箱にドラえもんを使うというアイデアを出してくれた。ごみ箱のそばには等身大サイズのドラえもんの像が設置されており、彼がポイントやキャッシュを提供してくれる役割だ。また、日本側は渋谷の透けるトイレのテクノロジーを採用し、ふたを開けるとごみ箱が透けて中身を確認することができるというアイデアを出した。私たちの班では、とにかく出た意見を殺さず組み合わせることで解決策を考えた。言語の壁を越えて意見を尊重し融合しあうこの経験は私にとってとても貴重なものだった。



グループワークの様子

8. 博物館、美術館訪問

8.1 ホアロー刑務所（6名）

① 真鍋

ハノイ市街地に位置し、収容所～フランス統治時代～ベトナム戦争～記念館までの建物の使われ方とそれにまつわる人々の歴史を伝える博物館である。

現在も収容所としての名残が感じられ、外周の壁頂部には脱獄防止用のガラス破片がびっしり敷き詰められていたり、生々しい監獄部屋、足枷や拷問器具の展示が衝撃的だった。

特に印象的だったのが、政治的な理由で捕えられた捕虜たちに重んじられたココナツの木だ。当展示では屋外展示も豊富に用意されていたが、その中でもココナツの木では収容されてもなお主張を諦めず、熱心に木の下で会議を繰り返したと説明があり、当時の思想統制の過酷さと残忍さ、捕虜たちの力強さが、ある場所として記憶に残っていることに胸を打たれた。私たちの思想を自由に主張できる環境のありがたさと同時に、先人たちが信念を持って生死をかけながら活動した場所の記憶を継承していくことの意義を改めて考えさせられる展示だった。



脱獄防止のガラス破



屋外展示の様子

② 西村

3月8日にハノイにあるホアロー刑務所を訪れた。ホアロー刑務所は、フランス植民地時代にベトナムの独立を目指して活動していた人々を拘束・監禁するために建てられた施設であり、その後、ベトナム戦争時にはアメリカ人捕虜の収容所として使用されていた。入場料は5万ドン（約300円）で、音声ガイド付きのヘッドホンを借りるには10万ドン（約600円）かかった。最初は「ヘッドホンはいらなかったかも」と思ったが、展示ごとに日本語で丁寧な解説があり、結果的に借りて良かったと感じた。

特に興味深かったのは、展示の雰囲気がフランス統治時代とベトナム戦争時代で大きく異なっていた点だ。フランス統治時代の展示では、全体的に薄暗く重苦しい雰囲気の中で、囚人たちが足かせをはめられた様子や、実際に拷問に使われた器具などが紹介されていた。対照的に、ベトナム戦争時代の展示は明るく、アメリカ人捕虜たちが受け取ったタバコやトランプなど、比較的穏やかな生活の一部が紹介されていた。また、音声ガイドでは、アメリカ人捕虜が刑務所内で好待遇を受けていたことが繰り返し強調されていた。

しかし、展示内容はあくまで北ベトナム側の視点で構成されており、実際には、アメリカ側の証言や資料には、ホアロー刑務所での過酷な拷問や劣悪な環境についての報告も多く残されている。展示だけを見てアメリカ人捕虜は快適に過ごしていたと受け取るのは、一面的すぎるかもしれない。

ホアロー刑務所の展示は、ベトナムの歴史や戦争の記憶を知るうえで貴重な機会だったが、それと同時に「誰が、どの立場で語っているのか」という視点を常に持ち続けることの大切さを改めて感じさせられた。



足かせに繋がれた囚人たち



アメリカ人捕虜に提供された娯楽品

③ 長谷川

3月8日は昼頃からホアロー刑務所に訪れた。この刑務所は、ベトナム戦争時の政治犯の収容所として使用されていた。当時この刑務所でフランス人によって行われていた拷問はとても過酷で、この収容所は別名「地獄の中の地獄」である。その中でも収容者たちは希望を失わず密かに勉強会を開いたり、過酷な拷問に対するストライキを行ったり、時には脱走を図り、実際に成功した例もあるそうだ。

私がこの収容所で特に興味を持ったのは、人々が収容されていた実際の部屋だ。その部屋は25mプールぐらいの大きさでとにかく天井が高い。3mほどあった気がする。そして床から2mぐらいの高さに窓があるのだが、収容者が脱出できないように格子状になっている。人々は2列に向かい合うように座らされており、全員が片足に足枷をつけられている。この石でできた収容者たちが、収容所の環境がどれだけ悪かったのか私たちに伝えてくれる。

私たち日本人からすると「戦争」と言えば「第二次世界大戦」を想像する。しかしベトナム人からすると戦争と言えばベトナム戦争のことを示すのだ。日本が高度経済成長期で欧米の仲間入りを果たしている中、ベトナムではこのような残虐な行為が行われていたのだ。（しかも欧米によって）私はこの事実に驚愕した。今回このホアロー刑務所を訪れたことで、私たちの常識が必ずしも世界の常識ではないということを再認識できたし、戦争について考え直す良い機会にもなった。



人々が収容されている様子

④ 鈴木

ハノイのホテルから20分ほど歩くと黄色の建物が見えてくる。一見可愛らしい建物に見えるが、実際は1954年まで多くの人が収容されていた刑務所なのである。

1896年、フランス植民地政府によって建てられたこの刑務所が、地元住民から土地を安く買い上げて始まったものであるという歴史から展示は始まる。奥に進んでいくにつれ、人の模型も用いた実際の収容の様子、刑務所内での過酷な労働の話、また脱走劇についての説明もあり、すべての展示が大変興味深かった。



外観



収容の様子



脱走について



犠牲になった革命家たちの記念碑

この刑務所では植民地政策に反対するベトナム人の政治犯を収容していたこともあり、記録に残って展示されている収容の様子などは教養人という印象が強いものとなっているが、何人かの個人を具体的に紹介している箇所もあり、今はこうやって平和になっているがこの刑務所であったことは紛れも無い事実であり、人々の記憶から忘れ去られて風化させるべきものではないという展示の意図をひしひしと感じた。

⑤ 宮武

ホアロー刑務所はフランス植民地時代にベトナムの独立運動をしようとした人を拘束したほか、ベトナム戦争でアメリカ人を拘束した刑務所である。

今回私は音声ガイドを35個聞きながらこの刑務所を回った。独立運動の展示で私が印象に残っているのは囚人たちの生活環境の劣悪さとそれに負けない強い意志である。ここには囚人が足を鎖でつながれている様子や収容されていた部屋の様子が展示されていて、音声ガイドの中でもその環境は劣悪であったと述べられていた。しかし、その展示には同時に、鎖でつながれながらも革命に向かって囚人同士が話し合う様子や音声ガイドの中でも劣悪な環境に対して声を上げる囚人がいたと述べられており、その意思の強さを垣間見ることができた。今のベトナムに至るまでの多くの人々の苦悩と戦いが伝わり感銘を受けたとともに、日本にもあるそういった先人たちの歴史を学ぼうと感じた。

そしてアメリカ人捕虜の展示で私が印象に残ったのはベトナム側の友好的な態度である。アメリカ人捕虜に対して決して劣悪な対応をしてなかったという主張を強く感じる展示であった。個人的には、アメリカ側からの意見としてこの刑務所での暮らしがひどい環境であったという文献も調べると出てきたので、劣悪な対応もあったのかもしれないなと思いつつ、展示を楽しんだ。



足を鎖でつながらながらも革命に向かって話しあう囚人

参考文献

1. https://www.loc.gov/item/powmia/pwmaster_10755/ (閲覧日:2025年3月27日)

⑥ 山中

ホアロー刑務所に近づいてまず最初にその特徴的な壁に目が行く。多くの刑務所の壁には、収容する人間が脱獄することを防ぐための有刺鉄線が上の部分に張られていることが多い。ホアロー刑務所の壁の上部には、大量のガラスの破片をセメントに刺すことで作られた部分があり、これが有刺鉄線の役割をしていることがわかる。離れてみると緑で美しいが、目を凝らしてみると鋭利で痛々しい。

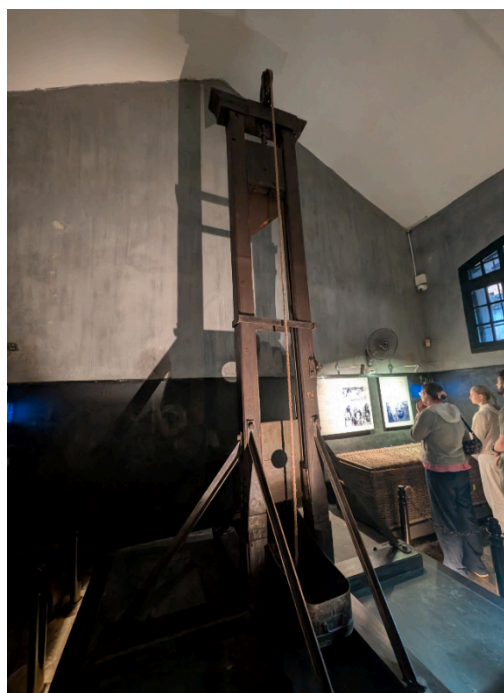
この施設は時代ごとにさまざまな使われ方をされたが、展示において強調されていたのは、ベトナムを植民地としていたフランスが植民地体制に反対する活動家を収容するのに使っていた時代だ。収容されたベトナム人の過酷な生活と、残酷な収容環境を細かく説明していた。収容された人は足を固定されたり、部屋にはほとんど光がなかったり処刑装置があったり。そして、そんな地獄のような環境でも収容されたベトナム人らは諦めずに情報を交換し合い、頑張って脱出した人もいたという内容だった。全体的に、ベトナム魂を鼓舞する内容だった。

ギロチンには首を受け取る箱があり、血もそこに流れるようになっていた。

驚くほど簡素なトイレは説明によると、囚人は情報を書いた紙を箱の中に入れて、トイレの中に隠して、情報を交換しあったらしい。



壁のガラス



ギロチン

8.2 ハノイ美術博物館（2名）

① 鈴木

まずハノイ美術博物館の外観からフランスの建築様式を思わせる建造物で、歴史を感じさせる外観をしていた。展示は時代順に並んでおり、青銅器を使っている時代から現代までのベトナムの美術が紹介されていた。作品の写真は別途料金が必要だったので撮っていないが、基本的に保存状態の関係で最初は彫刻など像が多く、現代に近づくにつれ絵の作品も増えていった。作品を見ていく中で、18世紀くらいまで似たようなモチーフが数多く登場していたことが印象に残った。特にライオンや虎などベトナムには存在していなかった動物がモチーフになっていたり、ドラゴンなど架空の生物がモチーフになっていたりすることも多く、装飾を作るにあたって強そうな生物をモチーフにするのは日本と変わらないのだと感じた。また赤の彩色が多いように感じ、ベトナムの国旗の赤と関連しているのかが気になった。1900年代に入って絵の作品が多くなってくると西洋画と日本画の間のような絵が多数を占めるようになり、フランスの影響とこれまでの中国の影響やベトナムの芸術が融合した形が見られるのが興味深かった。また、ベトナム戦争の時期になると戦争や平和モチーフ、逆に何気ない日常をモチーフにしたものが増えたように感じた。全て回ることでベトナムの美術の変遷をみることができ、大変面白かった。



外観

② 關川

ハノイ美術博物館では、古代の青銅器から現代アートまで、多岐にわたる展示があり、考古学や宗教、歴史などさまざまな視点からベトナムの美術品について学ぶことができる。展示は基本的に年代順に並べられており、最初に目にしたのはライオンやドラゴンをモチーフにしたオブジェクトだった。時代が進むにつれて、仏教の影響が色濃くなり、ブッダ像や仏教画が増えていった。特に千手観音像は今でも鮮明に記憶に残るほど印象的だった。17世紀ごろからは、赤や金色を基調とした中華風の絵画が増えてきた。またこの時代から展示は制作方法ごとに分類され、漆塗りの絵画は赤黒金などを基調とし、戦争や工業化をテーマにした作品が多く見られた。漆の特徴を活かし、力強さや暗さが感じられるものが多かった。一方、シルクに描かれた絵画は温かみがあり、ベトナムの自然や家族の団らんを描いた作品が多かった。これらの作品を鑑賞することで、ベトナムの歴史や文化について深く知ることができた。



仏教の展示 (lawyer24h.net)

8.3 ベトナム国立博物館（3名）

① 西村

3月8日にベトナム国立歴史博物館を訪れた。この施設は2つの建物に分かれており、一方は先史時代から19世紀末まで、もう一方は20世紀初頭から現代にかけての歴史を展示している。

前者では、ドンソン文化の青銅器やチャム王国の仏像・石彫刻、李朝・陳朝時代の陶器や貨幣などが展示されており、ベトナムが長い歴史の中でさまざまな文化や王朝の影響を受けながら発展してきたことがよく分かる内容であった。

後者では、フランス植民地時代から独立運動、ベトナム戦争、統一後の復興期までが時代ごとに展示されており、政治的・社会的変動の激しさや、ベトナムの人々の強い独立心を感じ取ることができた。

特に印象的だった点が2点ある。

1つ目は、ドンソン文化（紀元前1000年ごろから紀元前100年ごろ）の青銅器がきれいに現存している点である。日本の縄文土器は粘土で作られていたため、きれいな状態での保存が難しいが、青銅器は銅とスズの合金であり、腐食に強く、長期間良好な状態で残されていたと考えられる。また、日本の同時代の縄文土器などは生活用具としての性格が強いのに対し、展示されていた青銅器は儀式的な用途に使われていたことも学ぶことができた。

2つ目は、宋・明・清など中国王朝との戦いや防衛戦を示した地図展示が数多くあった点である。時代ごとの軍の進軍ルートや戦場、戦略が詳細に図解されており、ベトナムが外敵の侵略に対してどのように抵抗し、独立を守ってきたのかを視覚的に伝えていた。こうした展示は、単なる戦争の記録ではなく、民族としての誇りやアイデンティティを来館者に理解させる意図が込められているように感じた。



ゴック・ルー銅鼓



938年白藤江の戦いに関する地図

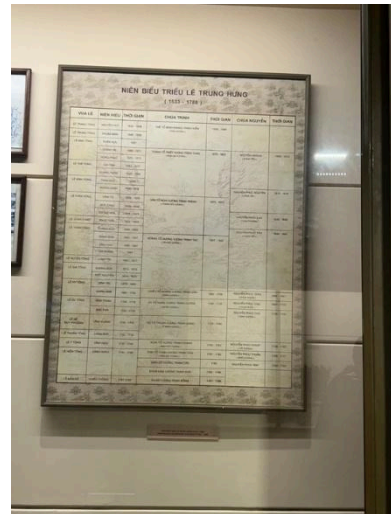
② 宮武

ハノイに位置するベトナム国立歴史博物館を訪れた。ここでは名前の通りベトナムの歴史を順番にたどって行ける展示があった。フランス植民地くらいまでとそれ以降の時代の展示が2つの建物に分かれていて、初めフランス植民地時代以降の展示場所を見つけることができなくて焦った思い出がある。訪れる際はこのことを把握して時間に余裕をもって訪れるとよいと思う。

音声ガイドがついていたが今回はガイドを聞かず、ベトナム語での説明を雰囲気を感じ取りながら展示を見て回った。ベトナムの歴史初期のころはたくさんの土器や陶器が展示されており、その量の多さに果たして本当に出土したものなのかという疑問を感じたが、かけている部分があるものもあり、実際に出土したものなのだろうとその場では感じ取ることとした。実際に調べると多くは本物であり、保存状態が悪いものなどは一部レプリカも存在するようだ。時代が進むにつれて年表のようなものが多く出てくるようになり、だんだんとそれが歴代の皇帝たちの名前なのだと自然にわかるようになってきて、雰囲気を感じ取りながらめぐる博物館も悪くないなと思った。



展示された土器



年表展示

③ 真鍋

ベトナム国立歴史博物館は、フランス人建築家・エブラールによる設計で、1932年に完成した建物。ベトナムの伝統建築様式とフランスの西洋式建築様式が融合した、いわゆるインドシナ様式建築の第1号であり、写真のような濃い黄色の壁と鉄柵で囲まれた建築である。周囲の植栽やコーヒー店にはヤシの木などが用いられ、インドシナの雰囲気を感じられた。用途としてはインドシナ領事館から極東学院博物館、その後現在のような歴史博物館に移り変わりながらも、観光客だけではなく地元民が多く集まっていることから長い間ハノイの風景の一部になっている存在なのだろう。



サブマシンガンと竹笛





外観・そそくさと施錠する係員

第一印象としては、同じ史料館でもベトナム戦争を境に敷地も違う別館となっていて、案内も少なく分かりにくかった。しかし、かなりの史料数があり、先史時代からベトナム戦争後までの歴史をビジュアルで理解できたため、とても満足感があつた。特に、他の博物館等ではみられないような実物のプロパガンダ広告や戦争武器がここぞとばかりに展示されていた。

ちなみに、閉館時刻になると係員が追い出しに現れ、施錠した後そそくさと帰っていった様子も、残業なしのベトナムらしさを感じた瞬間であつた。

8.4 タンロン城（2名）

① 若尾

タンロン城跡にあるタンロン遺跡は2010年にユネスコの世界遺産に登録されている。この遺跡の特徴は、1010年から1804年までのおよそ800年間のほとんどの間、この場所がベトナム諸王朝の都であつたことだ。そのため、多くの時代の重要なものが発掘され、現在も発掘中である。

たまたま訪れた時は、学生っぽい人たちが記念撮影をしていた。そのうち一人に尋ねてみると、学校の卒業記念だと言っていた。

非常に古い外観からは予想もしていなかったが、地下にベトナム戦争時代の地下司令部があつた。ここは北ベトナム軍の重要な会議に使われていたらしい。戦時中に使われていた、服や道具、通信設備がそのまま残っていた。司令部ということだけあつて、当時使われていた黒電話が数多くおいてあったり、ベトナムとその周辺を記した巨大で詳細な地図が壁にあつたりした。黒板へのメモもそのまま、なんて書いてあるかはわからなかったが、「B52」という単語だけは読み取れた。見た目明らかに貴重そうなものが、セキュリ

ティがかなり緩く展示してあったのが不安になるぐらい、当時をそのまま残したような鮮明な展示だった。一室には、地下施設の換気設備があり、説明には毒や粒子をフィルタリングするためのものと書かれていた。



正面からの写真



戦争で使われた服、道具



フィルター設備



何かの軍用機械

② 山中

タンロン史跡は、ハノイに位置する城跡であり、約600年間にわたってベトナムの都として機能していた。現在も発掘調査が続けられており、その歴史的価値が明らかになりつつある。この史跡は政府関連の建築作業中に偶然発見され、広範な遺跡群が確認された。

遺跡内には広大な庭園が広がり、細やかに手入れが施されていることから、重要な文化財としての保護の必要性が強く意識されていると考えられる。実際、タンロン史跡はユネスコの世界文化遺産に登録されており、歴史的・文化的な価値が国際的にも認められている。

また、この遺跡は宗教的・祭祀的な役割も果たしており、神事に関連する展示が多い。たとえば、祭事に用いられた太鼓や銅鐸などが保存されており、かつての儀式の様子を垣間見ることができる。これらの遺物は、当時の政治と宗教が密接に関わっていたことを示唆している。

さらに、タンロン史跡はベトナム戦争中に北ベトナム軍の軍事基地として使用された経緯を持つ。史跡内には当時の通信機器や軍事地図などが展示されており、当時の戦略的重要性がうかがえる。ほぼ当時の状態のままで保存されている点も特徴的であり、戦争遺跡としての価値も高い。

このように、タンロン史跡はベトナムの歴史を通じて様々な役割を果たしてきた場所であり、王朝時代の政治・文化のみならず、近代の戦争史においても重要な意義を持つ遺跡であることが強く感じられた。



タンロン城前にて



祭事用の太鼓



地下壕における、地図と通信器具の展示

8.5 ベトナム女性博物館（2名）

① 浜岸

ハノイの中心地に位置するベトナム女性博物館は、女性をテーマにした博物館であり、ベトナム女性の歴史、文化、そして社会における役割を知ることができる。訪問した日は International Women's Day に近く、ベトナム戦争中、やり取りをしていたある男女の手紙の特別展示も行われていた。

興味深かったところは「結婚」に関する展示のところである。ベトナムのある村では女性が主体となって統率を図り、家庭内でも花嫁が権力を持っている村もあると知り、まだまだ男性の方が活躍している日本とは逆の世界線だと思った。

また、ベトナムのファッションと言えば伝統的なアオザイ程度しか知らなかったが、少数民族の衣装もいくつか展示されていた。少しずつデザインが異なり、見ていて面白かった。どれにも一貫して言えることは手間暇をかけて一つずつ丁寧に作られているのが伝わってくる素敵な衣装であるということだ。作る工程も覗いてみたい。



ベトナムの民族衣装



結婚式の衣装



ベトナムの少数民族の村の様子

② 長谷川

留学3日目の3月8日、私は午後にはハノイにある女性博物館に訪れた。ここでは、ベトナム女性の歴史や文化、そして社会的役割を学ぶことができる。

私が興味を持ったものは以下の二つである。一つ目は、ベトナム戦争時における女性の役割である。そして二つ目は民族衣装である。

一つ目について、1フロア全体にベトナム戦争時に活躍した様々な女性たちが個人的に紹介されていた。看護師として軍に従事したもの、大切な情報を伝達したもの、そして中には男勝りにゲリラを率いた者もいた。そのようなたくさんの女性たちの名前と顔写真と

彼女たちの持ち物の展示から、彼女たちにとってベトナム戦争はどのようなものだったのか、どのような気持ちでこの戦争に向き合っていたのか思いをはせることができる貴重な空間だった。写真に写る彼女たちの表情は凛々しく、この戦争は彼女たちの自由を勝ち取るための大切な戦いであることがありありと伝わってきた。とくにゲリラに参加していた女性の強い芯のある目つきは目を離すことができなかった。

二つ目について、これもまた1フロアを盛大に使って民族衣装が展示されていた。年代ごとや民族ごとに展示されていて、とても面白かった。花嫁衣裳の歴史も目を引いた。民族衣装のブースでは「男系民族」と「女系民族」の結婚式の違いの展示があり、「女系民族」がいない私たちの社会では珍しいしきたりを知ることができた。この「女系民族」の結婚式は「男系民族」の結婚式と真反対であり、「男系民族」は花嫁を迎え入れ、花嫁はその日から花婿の家のものとなるが、「女系民族」では結婚後花婿が花嫁の家に嫁ぐ。



戦時中の女性の写真



ベトナムの伝統的な結婚式の民族衣装

8.6 カントー博物館（4名）

① 浜岸

カントーに着いたその日の夜、ホテルの近くにあるカントー博物館を訪問した。夕方の五時からしかやっておらず、昼間に開かず夜に開く博物館は新鮮であった。カントー博物館ではカントーの歴史や風土、文化はもちろん、ベトナム戦争時の貴重な写真も展示されていた。ベトナム語でしか展示の説明が書かれておらず、理解するのに少々苦勞した。

展示されていて一番衝撃的だったものはギロチン台である。フランスが植民地時代にベトナムに持ち込んだとされていて、インドシナ戦争時には北ベトナムで、それ以降は南ベトナムで複数回処刑に利用されたとされている。実際に目の前で見てみると本当にこんなもので人の首を切ることができるのかと不思議に感じた。ここに首をはめる時、人はどのようなことを思うのだろうかと考えると恐ろしくなった。さらに濡れ衣や理不尽な理由で処刑されるときの人々の気持ちを考えるといたたまれなくなった。ギロチン台以外にも爆弾の展示や写真などがあり、戦争の恐ろしさを実感した。



ギロチン台

② 若尾

カントー博物館は、カントー周辺に関する多くの物品を展示しており、地域の歴史や文化を知る上で重要な施設である。館内には、冠婚葬祭や昔の生活スタイルを再現した模型があり、伝統的な習慣や人々の暮らしぶりを視覚的に学ぶことができる。特に、ベトナム戦争に関する展示は印象的であり、ギロチンや白骨といった実物が大々的に展示されている点が特徴的であった。これらは勝利のシンボルとしてポジティブな文脈で紹介されており、日本人の視点からは独特な印象を受けるものであった。

また、カントーの地理的特徴に関連した展示も興味深い。湿地帯であることに順応するため、つる植物を用いた道具やボートが使用されていたことが紹介されており、これらの技術の一部は現代のカントーでも見ることができる。さらに、街の発展に寄与したインフラ整備に関する展示もあり、交通の利便性を飛躍的に向上させた橋の模型が展示されていた。この橋は日本企業が関与して建設されたものであり、館内で大々的に取り上げられていることから、その恩恵の大きさがうかがえた。

カントー博物館の展示は、地域の歴史や文化、戦争の記憶、都市開発の歩みを包括的に伝えるものであり、カントーの成り立ちを理解する上で貴重な資料となっている。



使用されていたボートの模型展示



ギロチンの模型展示



橋の模型展示

③ 西村

3月9日、私たちはカントー博物館を訪れた。この日は日曜日で、営業時間は8:00から11:00と18:30から21:00までであった。昼休憩が非常に長く、不思議に思った。カントー博物館に入る前に最も驚いたのは、建物の大きさである。正面玄関には4本の巨大な柱が立っており、都市の博物館としては非常に立派な建築であると感じた。館内には、過去に使われていた農機具、水上マーケットの様子、カントーの農業に関する資料など、多様な展示がなされていた。これらの展示は、地域の歴史や文化、人々の暮らしを後世に伝えるものであり、博物館が果たす教育的意味を実感させられた。また、この博物館も同様、ベトナム戦争時にカントーを解放した軍の旗のようなものが展示されていた。これらの展示は、戦争の記憶を伝えると同時に、ベトナム政府に対する忠誠心を感じさせるような展示だった。



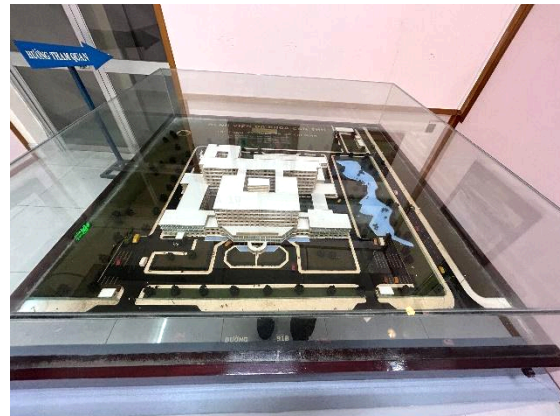
博物館正面



水上マーケットの様子 of 展示

Năm	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975
Tổng thu	26.647,2	12.279,2	17.505,8	13.779,2	22.115,2	24.557,2	29.007,2	32.557,2	35.557,2	38.557,2	41.557,2	44.557,2	47.557,2	50.557,2	53.557,2	56.557,2	59.557,2	62.557,2	65.557,2	68.557,2	71.557,2	74.557,2	77.557,2	80.557,2	83.557,2	86.557,2	89.557,2	92.557,2	95.557,2	98.557,2	101.557,2
Tổng chi	2.280,5	15.758,5	1.923,8	1.540,7	1.804,9	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4	1.497,4
Tổng dư	2.386,7	-3.479,3	15.581,9	12.238,5	20.310,3	23.060,0	27.510,0	31.060,0	34.060,0	37.060,0	40.060,0	43.060,0	46.060,0	49.060,0	52.060,0	55.060,0	58.060,0	61.060,0	64.060,0	67.060,0	70.060,0	73.060,0	76.060,0	79.060,0	82.060,0	85.060,0	88.060,0	91.060,0	94.060,0	97.060,0	100.060,0

カントーの行政に関するデータ



カントーにある病院の模型図



ホー・チ・ミン主席の言葉と表彰旗の展示

④ 長谷川

3月9日の夕方はホテルの近くのカントー博物館に訪れた。入るとすぐホーチミンの銅像が置いてあるこの博物館では、カントーの歴史や地理、自然について学ぶことができる。

入って最初に私の目を引き付けたのはたくさんの種類の蛇のホルマリン漬けた。少しガタガタする机の上に大量にガラスケースが並べられているせいで、最初自分で机にぶつかって蛇を揺らしているのに気づかず急に蛇が動き出したと正直焦った。

ほかにもベトナム戦争時に使われていたものの展示品は目を引いた。特に当時使われていたさび付いたギロチンは、戦争の生々しさを物語っていた。追撃された（と思われる）航空機や様々な種類の銃の展示も面白かった。この博物館は、説明がベトナム語だけでスマートフォンの翻訳機能片手に観覧しなくてはならないが、どれも当時使われていたままの状態リアルな人形などを用いて再現されているおかげで自分たちの想像力を自由に働かせながら当時のカントーの様子に思いをはせることができた。



戦時中に使われたものの展示品



説明はすべてベトナム語でスマートフォンの翻訳機能を用いないと読めない

8.7 ホーチミン市博物館（3名）

① 真鍋



ウエディングフォトの撮影



地下シェルター展示の入口



ホーチミンの土壌遷移



伝統楽器の展示

ホーチミン市博物館は、ネオゴシック様式の西洋的な風格を持つ、荘厳な博物館だった。入り口正面に設えられた美しい螺旋階段が有名らしく、来訪時も複数組がウエディングフォトの撮影を行っていた。確かに綺麗だったが、どうやら交流した現地市民たちにとっては、ウエディング準備のせいで自分たちの写真が思うように撮れないため、評価が高いわけではないようだった。

特に、併設されている元大統領用の地下シェルター展示は、サイゴン時代のリアルな避難生活が体験できとても印象的だった。しかし当博物館の特徴は、ベトナム戦争関連だけではなくホーチミン市にまつわる文化展示がある点であるように思う。ホーチミン市やベトナム南部の土着文化が数多く展示されており、中国の影響を受けた出土品が多かったハノイの博物館とは雰囲気が異なり、動植物の剥製や土壌の変化、アオザイの変遷や木製楽

器など自然と文化に焦点を当てていたことから、ベトナム戦争以前に培われた南部の穏やかな土着文化や北部との相違点を感じることができた。

② 鈴木

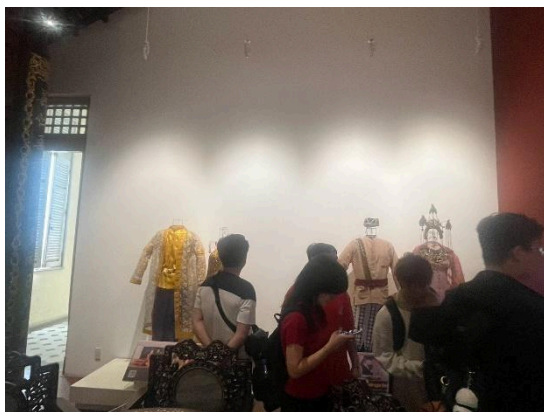
ホーチミン市博物館はフレンチコロニアル建築の建物で、主にホーチミン市の地質学や地理を紹介している他、南ベトナムで古くから伝わる冠婚葬祭の様子の模型、民族衣装やベトナム戦争中に使われた戦車や軍用ヘリなど様々なものが展示されている。また、このホーチミン市立博物館は、南ベトナムことベトナム共和国の初代大統領であるゴ・ディン・ジェムが身を隠したところとしても知られている。建物内が綺麗なこともあり、中ではブライダル写真の撮影を行なっているところに多数遭遇した。民族衣装などのベトナムの生活をよく知ることができる展示も興味深く感じたが、ホーチミン市の地質について紹介している部屋が一番印象に残っている。実際の出土物や地層のサンプルなどの展示もあり、出土物の時代の生活や地層からホーチミン市の変遷がよくわかる展示となっていた。人口増加のグラフではベトナム戦争時には人口が一時減っているなど戦争の凄惨さがとてもよく伝わってくる展示となっており、これらも併せてホーチミン市の移り変わりを感ずることができたのがよかった。



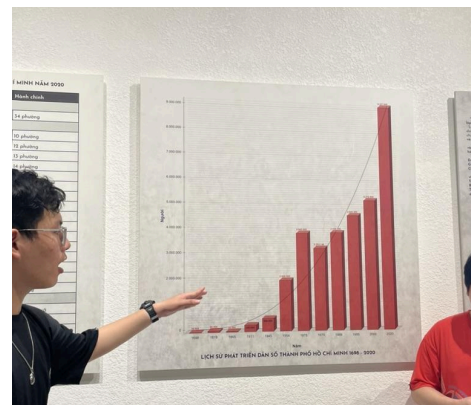
外観



ブライダル写真の様子



民族衣装の展示とそれを見る学生

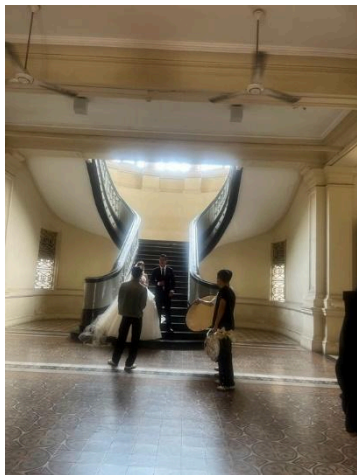


人口推移のグラフ

③ 宮武

ホーチミン市博物館では歴史や文化が総合的に紹介されており、特定の時代や分野にかかわらず雑多な展示があったことが印象的である。この博物館はホーチミンに長く住むフィ

リピン人2人とホーチミン工科大学の学生と私たち日本人学生2人で訪れた。個人的には、冠婚葬祭に関する展示コーナーで、派手な衣装や着方すらいまいちわからないようなゴージャスな衣装が並んでいたのが興味深かった。この博物館はウェディングフォト撮影の人気スポットでもあるらしく、私たちが訪れた日にちょうどウェディングフォトを撮影している方々がいた。ものすごく映えていたし、きれいだなと感じた。私も将来、夫婦そろってこういった素敵な場所でウェディングフォトを取りたいと思う。また、この博物館の特徴として等身大の人形が非常にリアルに展示されていたことがあげられる。上裸で加工作業を行う人の様子や革命を呼びかけ、こぶしを突き上げる人の様子などが忠実に再現されていた。その表情も緻密に作られており、その情景や迫力が伝わってくるようであった。



ウェディングフォト撮影の様子



冠婚葬祭に関する衣装



革命を呼びかける人形



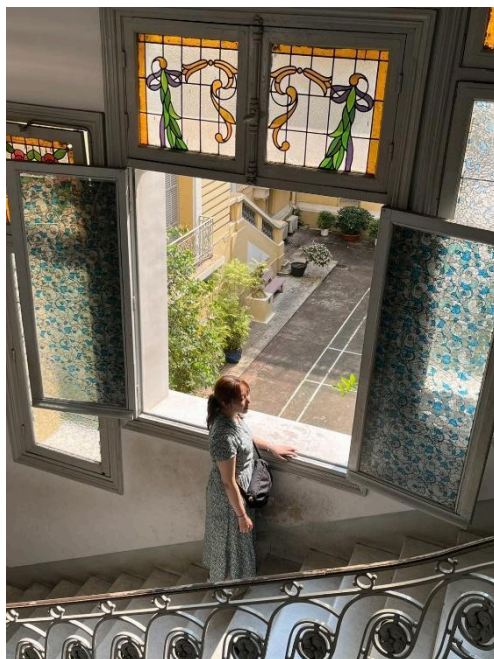
上裸で加工作業を行う人形

8.8 ホーチミン市美術館（2名）

① 長谷川

ホーチミン市ではホーチミン市美術館に訪れた。私は元来歴史を感じられる博物館や美術館に行くのを好むほうで、フランス建築の歴史が残るこの（インスタ映えスポットである）美術館に足を運ぶことができたのはとても良い経験だった。特に黄色い明るい壁はよ

く日光を反射し、たくさんの配色のステンレスガラスの窓たちは華やかな印象を植え付けた。また、おいてある芸術品は絵画だけでなく、彫刻もあった。私がこれらの芸術品の中で特に印象に残っているのは、ベトナム戦争を表現した絵である。残念ながら、この絵画の写真を収めることはできなかったが、簡単に説明すると人々は下のほうに暗いタッチで描かれており、中央には光り輝く女神がいる。この女神は決してか弱い女性ではなく美しい容姿からしたたかな精神が垣間見える強い女性である。この絵を見て、ベトナム戦争当時の人々はこの戦争に強い希望を抱いていたのだな、と実感した。この戦争は彼らの自由を勝ち取るための戦いであり、希望であったのだろう。



ホーチミン市美術館の階段

② 宮武

ホーチミン市博物館はホーチミン工科大学の学生と同じチームの日本人学生と3人で訪れた。現地学生がいくつか展示の説明をしてくれてそれがどんな作品なのかをなんとなく理解することが出来た。

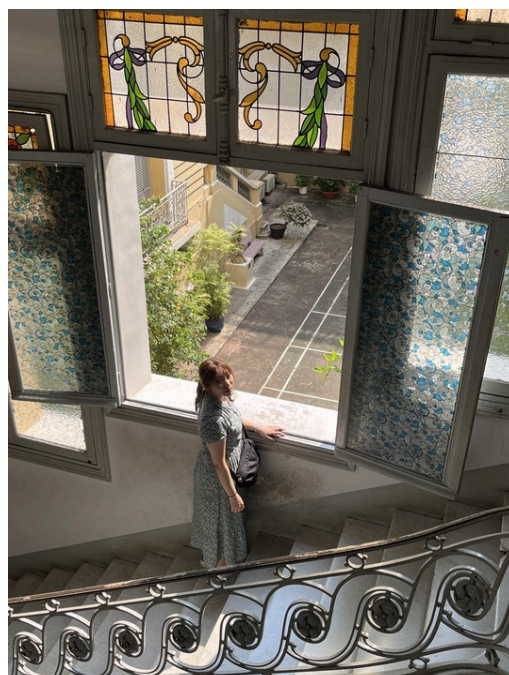
ホーチミン市美術館を訪れた際、まずその建築の美しさを感じた。写真映えする場所がいくつかあり、その中でも古いエレベータと光が差し込む階段では写真を何枚も撮った。

展示されている作品は多岐にわたり、ベトナムの伝統的な絵画や彫刻から、現代アートの作品まで幅広く取り扱っていた。「母の愛」という作品がたくさんあり、母親が子を抱きしめている絵画や彫刻はベトナム人の愛情を感じさせた。

私は普段からよく美術館に行くことがあるが、美術・芸術とは何たるかをよく分っている人間かのように鑑賞することが好きである。実際はわかっていない事がほとんどだが絵の前でうなづいてみたり、うなづいてみたりするのである。今回は「母の愛」のように作品と題名のイメージが一致している作品が多かったのでいつも以上に玄人の雰囲気を出しながら展示を見て回れた自信があり、大変満足であった。



古いエレベータ



光が差し込む階段

8.9 戦争証跡博物館（2名）

① 關川

ホーチミンの戦争証跡博物館を訪れると、現在の平和なベトナムの姿とは対照的に、数十年前には戦争の激しい爪痕が残っていたことを痛感した。ベトナム戦争の歴史とその悲惨さを学ぶことができるこの博物館は、戦争の恐ろしさを感じさせる展示が多数あり、特に枯葉剤による被害が強く心に残った。展示室には、戦争中に使用された実際の兵器や、当時の戦闘の写真、傷ついた民間人や兵士の姿が映し出されたものが展示されており、その光景から当時の凄惨さが伝わってくる。また、枯葉剤の使用によって引き起こされた人体への影響や環境破壊についても詳しく展示されており、戦争の影響は直接的な戦闘だけにとどまらず、長期的に続く環境問題を引き起こしたことがよくわかる。特に、枯葉剤による被害を受けた人々の姿や、戦争が終わった後も続く障害や苦しみを描いた写真や資料は、非常に衝撃的だった。また、館内には多くの外国人観光客が訪れており、彼らも真剣に展示を見つめ、ベトナム戦争の歴史に思いを馳せていた。



博物館の外に展示されていたヘリコプター。他にも実際に使われていた戦車や大砲が展示されていた。

② 西村

3月15日に戦争証跡博物館を訪れた。この博物館では、主に1955年から1975年にかけて起こったベトナム戦争に関する展示を見ることができる。博物館の外には、実際に使用されていた巨大な戦車やヘリコプターなどが並び、戦争の迫力と現実味を感じさせる雰囲気だった。館内に入ると、多くの展示が写真を中心に構成されており、視覚的に訴える力の強さを感じた。中でも特に衝撃を受けたのは、戦争の悲惨さをそのまま写し出した数々の写真だった。銃殺されて命を落とした母と娘の姿や、枯れ葉剤の影響により奇形で生まれてしまった子どもたちなど、言葉を失うような写真が数多く展示されていた。残酷な現実を真正面から突きつけられるようで、心が締め付けられる思いだった。また、それらの写真を撮影したジャーナリストたちに焦点を当てた展示も印象的だった。戦場の最前線で真実を記録し続けた彼らのこのような悲惨な戦争を後世に伝えたいという思いがひしひしと伝わった。さらに、展示の中には日本での反戦運動の様子も紹介されており、ベトナム戦争が国際的な問題として捉えられていたことを実感した。この博物館全体からは、戦争の悲惨さを次の世代に伝え、平和の大切さを訴えかけたいという強い思いが伝わってきた。



博物館の外に置いてある戦車



博物館に展示されている写真



日本のベトナム戦争に関する書籍も展示されていた

8.10 インディペンデンスパレス(統一会堂) (3名)

① 宮武

ホーチミンで訪れたインディペンデンスパレス。ここは南ベトナムの旧大統領官邸であり、ベトナム戦争が終結した歴史的な象徴として現在観光名所になっている。ここにはホーチミン工科大学のグループメンバーと訪れた。彼が展示について説明しながら回ってくれてよく理解しながら回ることが出来た。また彼はインディペンデンスパレスにまつわる彼の個人的な話をしてくれた。彼のおじいさんがかつて南ベトナムの兵士であったそうで、おじいさんはよくこのインディペンデンスパレスの前のカフェでゆったりするのが好きだったという話だ。結果的に南ベトナムは敗戦という形になったがかつて戦っていた人々にとっては誇り高く感慨深い記憶として胸に刻まれているのだなと感じることができた。その話を聞いているとき、心なしか窓から吹き込む風も気持ちがよかったように感じる。また、ここで展示のあった戦闘用のヘリコプターはカッコよかった。係員がホースをもって整備している様子も見られて大変良かった。



展示されていた戦闘用ヘリコプター

② 真鍋

統一会堂は、ベトナム戦争終結時のサイゴン陥落の瞬間や、戦時中の映像が字幕や音声ガイドとともにビジュアルで展示されている記念博物館である。ホーチミン工科大の学生に連れていってもらい、ところどころ解説もしてくれた。

建設自体はフランス統治時代にフランスによって建設が開始した。クーデターの爆撃による大破の後、現在の姿である2代目が1966年に再建され、フランス総督やベトナム大統領府・官邸として用いられた。神聖さを示したいののだろうか、建物のファサード(立面)には日除け機能とともに垂直性を持たせたルーバーが用いられていたり、教会建築とは異なる風合いがかなり印象的で面白かった。

展示では、独立に至る会議がなされた会議室や、大統領とその側近の寝室、来賓用の劇場や避難用の地下シェルターの電信室など、建物だけではなく家具や軍用機器、戦時下の上層部の生活が生々しくも学ぶことができた。

また、使用者・用途が変遷していたり戦災により再建されたためか、建設の歴史も展示としてまとめている点が、他の博物館と異なる点でも面白い体験ができる場所だった。



独立宣言が会議された



建設の様子展示



独立宣言が会議された



戦争時に用いられた地下の電信室

③ 西村

統一会堂は1966年に建設され、ベトナム戦争当時は南ベトナムの首相官邸として使用されていた。戦争末期には、政府関係者がこの場所を北ベトナム軍に明け渡したことで知られている。また、1975年に北ベトナム軍が突入した際に使用された戦車が、現在も敷地内にそのまま残されている。

印象的であった点は二つある。

一つ目は地下施設である。地下は戦時中の指令室として利用されており、複数の部屋が迷路のように連なっていて、高揚感を覚えた。地下室の壁は無機質なコンクリートで造られており、古い通信設備が当時のまま残されていることから、歴史の重みを肌で感じることができた。

もう一つ印象的であったのは、ベトナム戦争という激しい戦闘の象徴とも言えるこの建物が、極めて良好な状態で現在まで保存されているという事実である。モダニズム建築によって建てられた建物は、美しさと機能性を兼ね備えており、特に地上階の空間は来訪者をもてなすための豪華な絨毯、カーテン、椅子が用いられていた。激しい戦火をくぐり抜けてきたにもかかわらず、建物が大きな損傷を受けず、現在もなおその姿をとどめているという点は非常に興味深い対比である。



統一会堂の正面



統一会堂の内部

9. 派遣プログラム全体の各自の所感

9.1 工学院 機械系 B4 西村

私は以前から、なんとなく留学してみたいという思いはあったものの、実際に海外へ

行った経験すら一度もなかった。不安もあったが、「たった2週間だし、卒論も終わって春休み中なら行ける！」と思い、このプログラムへの参加を決めた。応募時には、さまざまな国のプログラムがあった中で、私はベトナムを選んだ。その理由は、もともと発展途上国に関心があり、急速に経済成長を続けるベトナムに対して、日本がどのような関わり方をしているのか知りたいと思ったからだ。

ただ、プログラムの日程が近づくにつれて、旅先での食事や衛生面、ぎっしり詰まったスケジュールにうまく対応できるかどうか、不安が大きくなっていった。日本ですら10泊以上の旅行をしたことがない自分が、慣れない海外でうまくやっていけるのか、とても心配だった。

そして、いよいよ渡航の日。実際に始まってみると、良い意味で期待を裏切られた。1日目、慣れない飛行機移動で疲労困憊の中、最初の訪問先であるハノイ工科大学では、学生たちがとても熱烈に歓迎してくれ、その疲れも一気に吹き飛んだ。彼らは日本の文化に強い関心を持ち、また英語のレベルも高く、私の拙い英語にも一生懸命耳を傾け、理解しようとしてくれた。その姿勢に感動し、自分ももっとベトナムの文化を知りたいという気持ちが強くなった。

その後の日程でも、現地の人々の優しさやパワフルな雰囲気に触れ、疲れを忘れることが多かった。滞在中に出会ったベトナムの人たちはとても親切でエネルギーがあり、その姿に引っ張られるように、自分自身も元気に、前向きになれた。

また、日本とは違う風景や文化に、毎日が新鮮だった。私は旅先で車や電車の中から景色をぼーっと眺めるのが好きなのだが、今回の短期留学では車での移動が多く、ベトナムの街並みを存分に楽しむことができた。ハノイやホーチミンでは大量のバイクが行き交い、道路までテーブルを出して営業するレストラン、屋台で売られるバインミー、ベトナム語で書かれた看板など、目に映るものすべてが新鮮だった。カントーでは焼き畑が行われていたり、農民が畑を耕していたりと、日本では見られない風景が広がっていて、飽きることがなかった。食の面でも、バインミー、フォー、バインセオなど、さまざまなベトナム料理を楽しむことができた。自分は異なる価値観を避けがちだと思っていたが、今回の経験を通して、実はそうではなく、新しい価値観に触れたときに「面白い!」「いいね!」と感じる性格なのだと気づくことができた。

さらに、今回のプログラムでは、日本とベトナムの結びつきを現地で直接見る機会もあった。ヤンマーの研究所では、ベトナムの農業に適した機械の研究開発が行われており、単なる製品提供にとどまらず、現地の課題解決に寄り添う姿勢を感じた。JICAのオフィスでは、主に農業分野における技術支援や人材育成など、長期的かつ多角的な取り組みについて話を伺い、公的な立場からの支援のあり方を学ぶことができた。また、JFEエンジニアリングのごみ処理発電の施設では、日本の技術が活かされ、都市化の進むベトナムにおけるごみ処理問題の課題解決の一端を担っていた。これらの訪問を通して、現地のニーズを丁寧に捉え、それに応える形で日本の技術や知見が活用されている姿を見て、国際協力のあり方についても多くを学ぶことができた。

ここまで体験したことをつらつらと綴ってきたが、今回の短期派遣で私が一番学んだことは、「少しでも興味を持ったことには、とにかく挑戦してみるべきだ」ということである。実はこの短期プログラムの存在自体は前から知っていたにもかかわらず、「海外は怖いし不安だ」と思って応募を見送ってきた。そして気づけば4年生、卒業が目前に迫っていた。このままだと海外に行くことなく大学を卒業してしまうと焦りを感じ、思い切って応募したのだった。結果として、このプログラムは私にとって非常に有意義な経験となった。そして今では、「もっと早く応募しておけばよかった」と感じている。今回の経験を通じて、これからは少しでも興味を惹かれたことには、臆することなく飛び込んでみよう

と思うようになった。

最後に、このプログラムを計画・実施してくださった村上先生、鹿取さん、現地でさまざまなトラブルに対応してくださったフィさん、現地で温かく迎えてくださったベトナムの皆さん、そして一緒に参加した学生の皆さんに、心より感謝します。

9.2 工学院 機械系 B4 宮武

○一番強く感じたこと

私が本交流を通じて一番強く感じたのは、言語の壁だった。留学経験者の多くがぶつかる壁であるかと思うし、自分自身留学前から想定していたことではあったがその壁の大きさには大変ショックをうけた。それを痛感した出来事が、ハノイ工科大生との交流とホーチミン工科大生との交流である。

ハノイ工科大学の学生との交流はベトナムに到着した初日に行われた。私と4人の現地学生で1つのグループになってお互いの自己紹介や互いの国の文化などについて話し合った。交流が始まった直後は写真を撮ろうと言ってくれ、すごく好意的だなと感じたが、私の英語が拙い様子を見るとだんだん現地学生4人のうちの女性2人が会話に混ざらなくなってしまいそのうちの1人は寝てしまった。もう2人の男子学生は一生懸命私とコミュニケーションをとってくれ、私も拙い英語でたくさん身振り手振りを交えて積極的にコミュニケーションを取るよう心掛けたのですごく楽しかったのだが、何度も聞き返してしまったり、話題が単発になってしまったりする場面もあり、自分の伝えたいことや自分自身の魅力を伝えられない苦しさを痛いほど思い知る交流となった。

ホーチミン工科大学の学生との交流は本留学プログラムの後半に行われた。ここで同じグループになった現地学生の一人は日本語を話すことが出来た。私はなるべく英語で話すよう心掛けていたが、うまく話せない時には日本語を交えて話し、それを相手も理解してくれたのでコミュニケーションがすごく快適だった。相手が自分たちの言語を勉強して話してくれることがこれほどうれしくて、そしてコミュニケーションを円滑にするのだということ強く感じた交流であった。

二つの交流の経験を経て、英語話者とのコミュニケーションにおいて、相手にストレスを感じさせず、快適にコミュニケーションを取るためには英語力の向上がまだまだ必要だなと感じた。それと同時に、自分の魅力や日本の文化を話すためにどんな話ができるのか、どんな知識を持っているといいのかという実際のコミュニケーションレベルでの目線を持ちながら日々の英語学習を進めることが大事だなと感じた。

○ベトナムの人々や街に対して感じたこと

現地の人々に対して感じたことはいくつかあるがその中でも2つ印象に残っていることがある。

一つは、彼らは自国の歴史についてよく知っているということだ。もちろん今回見た範囲での所感だが、多くのベトナム人が戦争のことをよく理解し私たちに説明してくれた。博物館に一緒に行った時も各展示の説明を詳しく話してくれた。自分自身を振り返ると、学校の授業で歴史を学ぶことはあってもその多くはテストのための短期記憶としてしか残っておらず、歴史から何かを学んだり、自らの意見に落とし込んだりする機会は少なかったなと感じた。本留学前から少しずつ、日本神話に興味をもって調べたり、政治に参画するために近代の歴史に触れたりするようになっていたので、より一層こういった学びは深めるべきだと感じた。

二つ目は格差についてだ。プラスチック村やカントーを訪れた際は町のにおいや人々の服装などで日本とは違った空気を感じる場面が多かった。しかし、ホーチミンで現地学生

と街を観光した際は日本とほぼ変わらない空気を感じる場面も少なくなかった。私が交流した学生はあるベトナム料理が並ぶ大きなフードマーケットに行ったとき、自分はここで食事をしたことはないと言っていたし、彼との食事は日本のサービスとさほど変わりのないお店でとることが多かった。(彼はこういったお店をsafe optionと言って自分はよくsafe optionを普段から選ぶと言っていた。) 地域やかかわる人によってベトナムの発展度合いに対して抱く印象は大きく変わり、そこにある格差を感じた。

○総括

総じて今回の留学で得た経験は今後の自分の人生に素晴らしい影響を与えてくれるものであったと感じる。視野を広げ、外に向けることに意欲的なれたし、自分に足りないものへの向上心を高めることが出来た。本学在学中にもう一度留学に行きたいという思いを今は強く持っている。

9.3 工学院 システム制御系 B4 關川

今回の派遣プログラムを通じて、積極性や「歓迎の心」の大切さを深く実感した。初日に訪れたハノイ工科大学の学生たちは、私たちが圧倒されるほどの勢いで歓迎してくれた。また、ホーチミン工科大学の学生たちも温かく迎えてくれ、ランチに誘ってくれたり週末にはホーチミン市内の様々な場所に連れて行ってくれた。バイクに乗ったり、翻訳機を使っても意味が分からない、日本にはないようなユニークな料理を勧められ、それがとても美味しかったり、普通の観光では体験できないような貴重な経験ができた。この経験を通じて、消極的な姿勢では得られるものが限られてしまうと強く感じた。私ははじめ「うまく話せないから」や「面倒だ」といった消極的な考えから学生交流に対して少しネガティブな感情を抱いていた。しかし、今回ベトナムでの交流を通して、むしろ積極的に行動すべきだと気づいた。そうしなければ自分が想像している以上の体験は得られないと思ったからだ。今後はもっと積極的に物事に取り組んでいきたいと感じた。また、今後日本を訪れる外国人と関わる機会があったら、今回私が受けたような温かい歓迎をしたいと思った。

私がプログラムに参加した理由の一つは、将来海外赴任や出張があった際に、自分がどれだけ適応できるかを試すためでもあった。私はこれまでオーストラリアなどの、比較的日本と同じくらい発展している国にしか訪れたことがなかった。しかし将来発展途上国やインフラが整備され切っていない国に派遣される可能性もあると考え、今回ベトナムを選択した。治安の面から最初は一人ではなく団体で行きたかったという思いもある。実際にプログラムを終えてみると、衛生状態や食文化に関してはストレスを感じることもあったが、異国で暮らすことは毎日が刺激的でとても楽しく、今後も海外で生活してみたいという気持ちが強くなった。観光ではなくその国での生活を選びたいのは、生活をすることでその国の本当の暮らしを最大限に楽しむことができると思うからだ。また、ベトナムの食文化も魅力的だった。肉の塊が乗ったフーテウや出来立てのマンガースムージーがどちらも300円程で楽しめ、安くて美味しい食事を堪能できた。このような体験を通じて、海外での生活に対する興味がさらに高まり、今後も海外に出たいという思いが強くなった。

9.4 環境・社会理工学院 建築系 B4 真鍋

私は当プログラムで得た経験を通して、以下の3点を学びにすることができた。

1点目は、現地での国際交流の想像を超えた難しさだ。

当プログラムでは、日本でのZOOMミーティングや、現地大学でのディスカッション、そして現地での観光や食事を通じた日常の交流といった、さまざまな形での国際交流を体

験することができた。しかし、全てが円滑に進んだわけではない。

以前私は大学の研究室で留学生とよく日英混ざりながら話をしていて、しかし彼らは日本への留学のハードルを超え、日本の生活に慣れている少数派の方々だったということに再認識した。国際交流において、訪問先で出会う学生やスタッフ・店員といった海外の現地で暮らす人々の習慣や立ち振る舞いが、まさに相手国のそれであることが想像以上にコミュニケーション上のギャップになると知った。文章で見ると当たり前だが、いかに私たちが今まで会話や議論における暗黙の了解や共通認識に頼っていたかを知った。例えば、ベトナム市街地での移動は基本的に「Grab」を用いたタクシー移動だが、運転手が仲良く誰かと通話したままで一言も交わさないことが多かったり、ハノイ工科大学では日本の国民的アイドルグループ「嵐」を全く知らない学生が少なくなかったり、学生が早く帰りたい一心でオンラインや時間短縮を優先したり、といった具合だ。

反対に、特に对学生では意外なところに共通の知識があることもあった。例えば、ホーチミン工科大生はCGVシネマでドラえもんや日本代表するアニメ映画をよく見ていたと言っていたり、ハノイ工科大生は上記の国民的だけでなく、ボーカロイド調のカバー曲やDTMよく知っていた。他には少しコアなオタクも散見され、日本人として嬉しい気持ちにもなった。ミリタリーやサバイバル、羽生結弦、TikTok文化、マッチングアプリetc.. 俗に言う日本の若者文化がそのままベトナムの大学生にも浸透していることは、オンラインを介したある種のバックボーンを共通しているという嬉しさがあつた。しかし、かえって自分自身が日本のことを知らなすぎると自省するきっかけにもなった。彼らに「東京でおおすすめの観光地を教えて」、「今日本でブームになっていることは？」と質問されても、彼らのそれと同等の熱量を持って語ることができなかったり、ベトナムの流行ではなかったりした。国際交流は、言語をうまく操れるかだけではなく、自国と相手国の両方にリスペクトを持ちながら、目的達成に向けて有意義なコミュニケーションをとっていく、とても難しくやりがいいのあることだと再認識した。

さらに印象的だったのは、現地学生と話す中で、彼らにとっての留学は奨学金や試験の問題から障壁がかなり大きいことだ。日本行きだけではないが、成績の問題や抽選に落ちたりして留学を断念した話もよく耳にした。どれだけ日本のことを知っていたり好きでも、ベトナムを出ることが経済的・環境的に叶わない場合が少なくない。今後も大学内であるであろう留学生との交流の機会を一層大切にしようと思ったと同時に、新興国内の意欲ある学生への支援母体が官民間わずさらに充実するようになると良いなと漠然と思った。

2点目は、ベトナムの力強い発展への期待だ。

2週間のプログラムの中で、農業・都市開発・教育・生活などの様々な面でベトナムの社会の実態を体験した。ベトナムへの渡航、ましてや海外への渡航は初めてであったため、人や街の空気感に不安を持っていた。はじめに訪れたハノイ空港は外国人のごった返し、客乗せキャッチのがめつさ、空気粉塵のおおさに度肝を抜かれた。正直なところこの先の不安が大きくなったが、振り返ってみるとその雑多さとベトナムの力強さを一番感じることができたのはハノイだった。3.2建物の章にも記したが、ハノイ旧市街の増改築や商品の勝手な溢れ出し、忙しないバイク交通の様子から、現地の思い思いの過ごし方や生活する力強さを学んだ。衛生環境や都市開発の面ではなかなか統制が取れていないと捉えることもできるが、それでも日本にはないこの独特なエネルギーは、非常に価値のあるものだと思う。

加えて、その後に訪れたホーチミンの想像以上の都市としての繁栄さにも衝撃を受けた。

バイクや自動車の交通量はハノイやカントーとさほど変わらないが、街並みや人の雰囲気が大きく異なっていた。大通りや広場は高層ビルや東京・丸の内のようなだし、中心地か

ら3kmほど離れれば、首都圏の住宅地のような穏やかな風景が広がっていた。吉野家や各種コンビニエンスストア、高島屋や牛角など、日本を代表する企業も多く店舗進出しており、過度な電飾や狭すぎる歩道でごちゃごちゃしていたハノイ市街地と比べ見慣れた景色であった。また日本人も多く、街中を数分歩いているだけでも日本語がちらほら聞こえてくるなど、

3点目は、環境配慮活動の実態と、現地住民の視点それを持つことの難しさだ。

今回のプログラムでは、国・組織・企業単位の枠組みで環境問題を見てきたように思う。しかし、学生との会話を経て、一人の住民へそうした配慮意識が浸透させることがいかに難しいかを思い知らされた。近年のまちづくりの分野には、トップダウン/ボトムアップという1対のキーワードがある。今まで先進国で進められてきたトップダウン型の統制・管理による開発の推し進められ方を反省し、住民が大切にしている地域資源を正しく捉え、それらが健全な形で地域内で循環し発展に活かされるような個人視点のボトムアップ型のイノベーションが注目されている。この考え方を、ベトナムという力強い個人のエネルギーを持つ国でどうにか課題解決に適用できないだろうか。訪れた通称プラスチック村の人々は単純な作業として国内外のプラスチックゴミを扱っていたり、ホーチミン工科大グループワークの中でもゴミ分別への市民理解の難しさを説得されたりした。しかし、そうした現状の中でも、例えば大学が開催するゲリラのワークショップやインスタレーションを通じて個人や少人数でのイノベーション活動を誘発したり、意識改善へのインセンティブを仕組み作りを市民と同じ目線で行ったりできるのではないかと。JICAや官民連携の環境配慮活動、一部の外資企業が行う農機具イノベーションなども、いかにその取り組みの価値と意義を個人単位に意識させるかが、ベトナムの持続可能な発展に後々寄与してくるのではないかと感じた。

最後に、このプログラムを通して、肌身でしか感じるできないベトナムの人々の空気感や最前線の取り組みの実態を視察した経験を糧に、今後の環境にまつわる社会課題について、多角的で住民視点の考察ができるような人材になりたいと思うようになった。このような機会を設けていただき、大きなトラブルなく終えることができたのは大学教職員、事務、交流先の方々、そして参加メンバーのおかげである。ここに深く感謝の意を表したい。

9.5 環境・社会理工学院 建築系 B2 鈴木

今回のベトナム留学プログラムでは、ベトナムという国の歴史を存分に感じる事ができたと思う。まずハノイではハノイ美術博物館に行ったことで、ベトナムの美術史を紀元前から現代まで追うことができた。街並みとしても旧市街地など歴史を感じる部分も多く、ハノイ大教会やホアロー刑務所などフランスの植民地時代由来の建造物もあり、現在のベトナムを形作っている概念に一步近づくことができた気がした。

カントーの水上マーケットやナイトマーケットではその地域に根付いている暮らしのようなものを垣間見ることができ、ベトナムへの理解が深まったように感じた。またカントー博物館のベトナム戦争についての展示は、日本では遠い昔のこととされているような戦争がベトナムではまだ日本よりも身近にあったものとして受け入れられているような印象を受けた。

ホーチミンは大都市ということもあり、高層ビルの他にフランス植民地時代に建てられた多くの建物や西洋の歴史様式を模倣した建造物が並んでいるようだった。訪問した観光名所や博物館はホーチミン工科大学で交流した学生たちに案内してもらいながらの観光となったが、ベトナム戦争についての説明も詳しくしてくれて、やはり日本よりも戦争とい

うものが感覚的により身近にあるのではないかと感じた。そしてベトナムにおいてはベトナム戦争というのは歴史を語るにおいて外せないものなのだろうと思った。

将来自分は建造物の保存・修復にかかわりたいと思っているが、その作業にあたって建造物の建っている国や地域の歴史的背景を理解することが保存方法を考えるときに必要になってくると考えている。今回のベトナム留学を通して、その思いはより強くなった。歴史はその国の人々の考え方に基づいているものであるので、そこを理解しない限りは建物を建てた意図もその地域の人にとってどのような意味を持っているのかも理解することができない。この点に関してはベトナムの人と交流することも含め様々な方法でベトナムを知ることができたと感じていて、今後もこのような観点から建造物を見つめることを忘れないようにしていきたいと思った。

また、普通の旅行では行かないような場所である焼却炉やリサイクル村も興味深かった。各大学との交流でゴミの分別をどうするかを話し合ったこともあり、特にリサイクル村は、ゴミを集め手作業で分別しリサイクルできる形にするというビジネスの形の村で、このように村として形成されていることは良くない思いながらも、それ以上に良い形がまだ開発されていない、むしろ日本などの先進国はそれを助長しているかもしれないということで、社会問題としての難しさを感じた。物事は決して良い悪いの二面でのみ見れるわけではないという良い経験となった。

最後に今回のプログラムに参加していたみんな、村上先生やHuyさん、鹿取さんをはじめとする本プログラムに関係していた東京科学大学の皆様、現地の大学で交流して下さった方々に感謝申し上げます。素晴らしい体験ができました。本当にありがとうございました。

9.6 環境・社会理工学院 B1 長谷川

今回の留学を通じての所感を述べる。

まず、現地の学生との交流は私の人生の中で非常に貴重な経験となった。今まで海外に住んでいる人と仲良くなったことはなかったため、私にとって初めての海外の友達ができ、ベトナムの学生の英語が中々聞き取れずコミュニケーションが取りづらい分、上手く伝わったり共通の話題があったりした時の嬉しさは一段と大きかった。特にホーチミン工科大学の学生は博物館やショッピングモールなど色々な場所に連れて行ってくれて親切に説明をしてくれていた。短い時間ではあったが、これからも連絡を取り続けたい。

また、ベトナムの人々の優しさに触れることができた。交流した学生はもちろん、メニューにベトナム語しか書かれておらず、読むのに苦戦していたら隣に座っていた英語を話せる方がこちらに来て説明してくれたり、船に乗りたいと団体の高校生グループ言ったら相席をさせてくれたり、おもてなしの精神を強く感じた。私もこれから日本で外国人が困っているのを見かけたら親切に対応したいと思った。

今回の留学ではリサイクル村を見学したり、ホーチミン工科大学の学生とどうしたらゴミの分別ができるようになるか話し合ったり、ベトナムのゴミ事情について考える機会が多かった。街中にゴミ箱が別々に置いてあっても分別ができていなかったり、ベトナムの学生が「今まで分別したところがないから急にやれと言われてもできない」と言っていたりして、ベトナム人にもリサイクルやゴミを分別しようという意識はあるが、それを実際に行動はまだできていないように感じた。意識を変えてさらに行動に移せるようになることは簡単ではないから、最初は飲食店のゴミから分別を始めて、ゆくゆくは家庭内でもできるように意識を浸透させていく必要があると感じた。

最後に、意外に感じたことが一つある。留学前は留学に行くと自分の言語能力の低さを痛感し、より言語を頑張らなければという気持ちになると思っていた。しかし、実際に

行ってみて、言語の学習よりもこれから学んでいく専門的な分野の研究や自分の意見を明白に持つことをより頑張ろうと思えるようになった。言語ももちろん大切だが、いくら流暢に話せるようになっても話す内容が希薄であれば意味がない。実際、グループワーク中に「あなたはと思う？」と聞かれて、自分の意見を強く持っていなかったため「これは日本語でも答えられないな…」とを感じる場面があった。訪問したJICAの今井さんも「言語は気合いです」とおっしゃっていたように言語は必要な状況になれば嫌でも身に付けなければいけないので、まずは日本で専門の勉強に励み、海外でも通用するほどの技術や専門性を身につけたいと考えた。

9.7 環境・社会理工学院 B1 浜岸

私にとってこのプログラムはとても貴重な体験をさせてくれる場だった。留学中何度「こんな体験ふつうはできない！」と言ったか覚えていない。毎日人生初めての出来事が待っていて日本ではできない体験を楽しむことができた。

たくさんの印象深い思い出があるがここでは2つ紹介したい。

一つ目はベトナム人学生との交流だ。ハノイに滞在中、ハノイ工科大学の生徒と交流する機会があった。彼女たちはとても快活で勢いがあり、なおかつ私たちにたくさんの楽しみを教えてくれた。交流した時間は1時間程度しかないのに、みんなでご飯を食べようと誘ってくれ（なぜかタイ料理）、そのあとカラオケにもつれて行ってくれた（それもVIPルームである）。彼女たちの元気さにこちらもつたない英語でもコミュニケーションをとりたいと意欲的にさせられたし、レストランからカラオケへの移動においてあるベトナム人の友達のバイクの後ろに乗せてもらった体験は二度と忘れないだろう。スピードにすると時速20kmとさほど早くないのだが、ただ彼女の腰にしがみつくしか命綱がない私には最初は恐怖体験であり、慣れると暗い夜道に連立する明るい電灯と冷たい風がひゅんひゅんと後ろに消えていくのが心地よかった。日本に帰ったらバイクの免許を取ろうと考えるほど楽しかった。

二つ目はカントー大学の先生に連れて行ってもらった自然保護区である。幅20mくらいの川をボートで漕いで回る。カントーはハノイに比べて暑かった（ハノイが20℃くらいなのに対しカントーやホーチミンは35℃前後）、ボートで川の上を、風を切りながら進むのはとても気持ちがよかった。川の岸边にはぎっしりと木が立っており、直射日光を遮ってくれた。蓮の葉が浮いていたのも見ものだった。水面をよく見るとアメンボがすいすい泳いでおり、少し濁ったこの川の水が様々な生態系を潤しているのだな、と実感した。また、本来ならば政府関係者しか入れない高台からの景色も最高だった。そのあとカントー大学の教授に連れていかれたレストランも今までにない体験で面白かった。簡単に言うとウナギのような生き物の鍋なのだが、スープがすっぱく、とったウナギをそのまま鍋に入れて野菜と煮た、という感じなのだ。味はとにかくワイルドな食べ方に土着の文化であることを実感した。実はそれまでのベトナム料理は割と日本食と味が近いものが多かったのだ。

このように私はこのプログラムで、ここに書ききることはできないくらいたくさんの経験をできた。

私は国際協力に興味があり、このプログラムに参加した。なぜならばこのプログラムを通じてJICAや日本企業がどのように支援を行っているのかこの目で見るができると思ったからだ。そして実際このプログラムは有益だった。特にJICAへの訪問は私の国際協力業界への興味をより引き立ててくれた。JICAはベトナムの人材育成支援としてカントー大学と協力体制を築いている。それは一見、日本からの一方的な支援のように見えるが、実際には日本とベトナムのそれぞれの研究者がタッグを組んで問題解決に向かって注力し

ている。これはどちらかが手を差し伸べる、という上下の関係ではなく、どちらも自分のアドバンテージを生かして手を組む対等な関係である。国際協力は一見一方的な支援に見えるが実は新しい可能性を生み出す貴重なコラボの機会なのだ。私はこの留学で「国際協力」の意味を改めて考えさせられた。

このような経験は私の物事への見方に新しい視点を与えてくれたし、これからの私の財産になると確信している。また、少人数だったからこそみんなととても仲良くなれた。夜中にみんなで集まって恋バナをしたのは旅の楽しい思い出。私はたくさんのプログラムの中からベトナムを選んで本当に良かったと思っている。他ではできない体験を人、新しいものの見方を体験したい人、現地の人々や学生とのコミュニケーションを大切にしたい人（そして何よりこのプログラムは安い！）はぜひこのベトナムのプログラムに応募すべきである。

9.8 工学院 B1 山中 渡航前

今回のベトナム留学は六年ぶりで大学生になって初めての海外渡航だった。日本よりも治安が悪いということを聞き及んでいたので、準備は十二分にしようと考えていた。バックパックとウエストポーチのすべてのチャックにロックをつけ、スマートフォンは金属製のケーブルで体につないだ。結果的には何の犯罪にも巻き込まれなかったのだが、慎重な盗難対策は正解だったと思う。盗まれるならほかのメンバーのものが盗まれるだろうと思った。ごめん。

食べ物

食に地雷の多い私はベトナムと日本の食文化の違いには苦勞した。日本では、卵と白米、マクドナルド。といった精製された食品ばかりを好んで食べていたが、ベトナムのグルメはもっとワイルドだった。人類は調理をすることで消化に必要なエネルギーを減らしたと聞く。贅沢にも自分は鳥の足をかじる食事には耐えられないようだ。渡航後まもなく食が細くなっていることを感じ、マクドナルドを補給した。渡航前は無限のフルーツを楽しむにしていたが、おののいているうちに、ついには食べなかった。持参したソイジョイで何とか持ち直したが、食文化の違いは心と体の健康に大きく影響を与えると実感した。せっかくベトナムに来たんだから、という感情を抑えて、食を慎むことで大きな体調不良を避けられたのは勇気のある決断だった。エッグコーヒーはおすすめ。

技術

ロボットエンジニアを目指している自分に最も刺さったのは、Yanmarの農業用機械の観察とドローンの飛行だった。農業用ということもあって、普段かかわっている機械よりもデカイ。カッコいい。地面を耕しつつ米の苗と肥料を埋めるマシン、収穫して脱穀した茎を刻んで吐き出すマシン。どちらも泥水だらけの環境で作業するためのものなので、精密な構造よりも、乱暴でも壊れない構造を求められる。素人目で観察した限り、用いられていた主要な構造は、ワイヤーによる力の伝達の構造、ローラーチェーンによる伝達の構造、油圧による伝達の構造だけだった。自転車じゃん。多くのロボットのように電動だとたくさんモーターを配置すれば良いが、今回の場合エンジンを何個も搭載するわけにはいかないので主要なエンジンからうまく力を持ってくる必要がある。そのためどちらの機械

もシンプルで洗練された構造をしていた。エンジンいいなあ欲しいなあ。デカイロボットが作りたくなった。農業用ドローンについて、音がよかった。乗りたい。カントー大学の学生は一回り小さい農業機械をいじって研究しているらしい。研究室所属が楽しみだ。

英語

悔しい。自分のユーモアをわかってもらえないのが悔しい。グループワークは何とかなった。与えられた課題に対して取り組むのは、そこまで難しくなかった。お互い同じ目的と前提があるので、意見を汲み取りやすく、話は進む。ユーモアは難しい。ひねったことをいうと、何か聞き間違えじゃないかと思われて、聞き返される。これじゃ台無し。あとこれは文化の違いだと思うが、含みのある言い方が全然通じなかった。So what? と何回も言われた。今回の留学を終えて、オンライン英会話を始めた。

雑記

- ・飲食店の店員の数が多い。何人かスマホをさわってる。
- ・犬多い。リードなし。猫もいる。
- ・紙幣だけで硬貨がないのは結構好きだった。お金持ちになった気分。
- ・クレジットカードをほぼ使わなかった。意外と対応していない。
- ・生鮮市場は非常に生臭いにおいがした。
- ・似た名前、同じ名前の人が多い。
- ・値切り交渉は楽しかった。
- ・ベトナムの朝は早い。
- ・ショッピングモールで毎日何かしらイベントやってる。
- ・ベトナム語は難しい。特に発音。
- ・裸足で溶接している人がいた。
- ・スーパーで売ってる飲み物の種類が多い。
- ・国旗がとにかく多い。ホーおじさんもとにかく多い。
- ・看板や広告に萌えキャラがない。
- ・フェイクブランド品がいっぱい売ってる。
- ・軍人がひよろひよろしている。
- ・辛い。
- ・コンビニのホットスナックが充実してる。
- ・CAはアオザイを着ている。
- ・店の名前が直接的で何のお店なのか非常にわかりやすい。ex. Made in Vietnam Factory Outlet
- ・著作権がゆるい
- ・トイレにペーパー流したら詰まった。
- ・ベトナムでは18歳からお酒が飲める。
- ・蚊は数が多く、速く、しぶとい。
- ・ベトナムの学生はプレゼンのスライドを作りこむ。インスタグラムの投稿も作りこむ。
- ・日本人観光客が多い。
- ・何個買ったらずつ無料のようなサービスが多い。薄利多売。
- ・文化財のセキュリティが甘い。
- ・TeaPlusはおいしい。

謝辞

村上先生、鹿取さん、Huyさん。ベトナムで協力してくれた皆さん。そして奨学金。貴重な経験をありがとうございました。



中華とは違う味がするチャーハン



巨大な農業用機械



ホログラムシールで修理した
形跡のある文化財



偽物のHOKAの靴100万ドン
(6000円)



日本のマクドナルドのほうがいい

9.9 生命理工学院 B1 若尾

今回の海外派遣において、特に満足できた点として、現地の大学生との交流、駐在員との対話、そして日本の技術に頼らない現場の視察の三点が挙げられる。

まず、現地の大学生との交流を通じて、同年代の人々と共有できる価値観と、異なる価値観の双方を確認することができた。同じアジア圏に属していても、文化や社会制度

の違いによって形成される価値観には大きな差がある一方、個人レベルでは共感できる部分も多いことを実感した。さらに、現地の学生の中には、自分と似たような境遇の人々もあり、国が異なっても似た考え方を持つ人々が存在することを知ったことで、親近感が生まれた。

例えば、SNSへの関心は日本と全く同様である。現地でのオンライン上での意思疎通は日本でも広く使用されるInstagramをもっぱら用いた。また、それらに投稿する内容も日本人のものと酷似しており、現代の若者としてインターネットに求めるものが共通していることを実感した。これに付随して、こうしたスマートフォンやその他電化製品による生活習慣の乱れを自ら嘆く生徒もあり、自分と重ね合わせる場面もあった。その一方で、ホーチミンにて若者向けのカフェを訪れた時、そこにはさまざまなレトロな物品が装飾品として置かれていた。日本においても、アナログな体験を重視しようとする動きは若者の間で見られ、こうした流行りも共通していることがわかった。

このように、彼らと直接対話し、日常生活や考え方を共有することで、単なる統計データや文献では得られない、より具体的でリアルな現地の姿を理解することができた点は大きな収穫であった。

次に、現地で働く駐在員の方々との対話も貴重な経験となった。特に印象的だったのは、単なるビジネスの成功要因ではなく、現地の人々とうまく連携するための心構えや、生活の仕方についての実践的な話を聞いたことである。例えば、現地でのビジネスは単に技術や資本を投入するだけではなく、その国の法律や慣習を正しく理解した上で進める必要があることが強調されていた。さらに、女性の駐在員がどのように現地での生活を送っているのかといった話も興味深く、異文化の中でのキャリア形成についての理解を深める機会となった。特に、現地の法制度を正しく理解し、尊重することがビジネスの第一歩であるという話は、今後の学びにもつながる示唆に富んでいた。

また、日本の技術に依存せず、独自の方法で発展を遂げている現場を視察できたことも大きな収穫であった。リサイクル村においては、単に日本の技術を導入するのではなく、地域特有のゴミ回収ネットワークが整備され、それに基づいた事業形態が確立されていた。現地の人々が自らの環境や社会的ニーズに適応した方法でリサイクルを行っている様子を目の当たりにし、必ずしも外部の技術や資本に頼らなくても、地域社会の工夫と努力によって効率的な資源循環が可能であることを実感した。

また、特に努力した点として、現地の大学生との交流、駐在員の経験の聞き取り、日本の技術の活用状況の観察の三点が挙げられる。

まず、現地の大学生との交流においては、同年代の人々と共有できる価値観と、異なる価値観の双方を意識的に確認しようと努めた。異なる社会制度や文化的背景を持つ人々と対話することで、共通点を見出すだけでなく、相違点についても客観的に考察する機会となった。また、現地の学生との交流を通じて、単なる観察や文献調査では得られない、現地の生活や価値観の実態を捉えることができた点は大きな成果であった。彼らの視点を知ること、表面的な情報だけでは把握しきれない現地社会の構造や課題を理解する手がかりを得ることができた。

次に、駐在員の方々の経験を積極的に聞き出すことにも力を入れた。特に、データや企業のプロフィールといった一般的な情報ではなく、現地の人々とどのように連携を取るべきか、日常生活をどのように送るのが適切かといった、より実践的な視点からの話を重視した。また、女性の駐在員がどのように現地で働き、生活しているのかという点についても関心を持ち、その具体的な実態を把握することに努めた。駐在員の話からは、文化の違いを理解し、現地の慣習や法律を尊重しながら適応することの重要性が強調されており、国際的な環境で働く上での実践的な知見を得ることができた。

さらに、日本の技術が現地でどのように活用されているのかを観察することにも注力した。特にリサイクル村の視察では、日本の技術に依存せず、独自のゴミ回収ネットワークと、それに紐づいた事業形態によって効率的なリサイクルが実現されている様子を確認した。このことから、必ずしも日本の技術を導入することが最適解ではなく、地域の特性に応じた独自の工夫が重要であることを実感した。現地の環境問題への取り組みを日本と比較しながら分析することで、技術移転や国際協力のあり方についても考えるきっかけとなった。

【参考資料】

訪問や学生交流の様子をニュースにいただいたリンク先

JICA カントー大学オフィス

https://www.jica.go.jp/oda/project/1902763/news/1565095_47035.html

ホーチミン工科大学

[https://www.facebook.com/profile.php?id=61569421312989&_cft__\[0\]=AZXeq1mPXPHHybZ-4N1dQP01_erMbe4gAumE7gwj0TpktiymVXE-17J79duwZbzwLqnrcWM14nQMOJ4cqQeLT-VbBILR-R6VZJV2fiQS_zMBeG1TljiNumpUEcnjAeHQXoe6Xgnb4dtZZCF6nN8YnVCZuTTc_50NUSjFpg4u_TtUdJeSJw8q5R9CpP3730ivThxo0NqR2k03F82y0RG11b4_&_tn_=-UC%2CP-R](https://www.facebook.com/profile.php?id=61569421312989&_cft__[0]=AZXeq1mPXPHHybZ-4N1dQP01_erMbe4gAumE7gwj0TpktiymVXE-17J79duwZbzwLqnrcWM14nQMOJ4cqQeLT-VbBILR-R6VZJV2fiQS_zMBeG1TljiNumpUEcnjAeHQXoe6Xgnb4dtZZCF6nN8YnVCZuTTc_50NUSjFpg4u_TtUdJeSJw8q5R9CpP3730ivThxo0NqR2k03F82y0RG11b4_&_tn_=-UC%2CP-R)

グリニッジ大学ベトナムホーチミン校

https://www.facebook.com/story.php?story_fbid=1074986011314979&id=100064107701450&_rdr